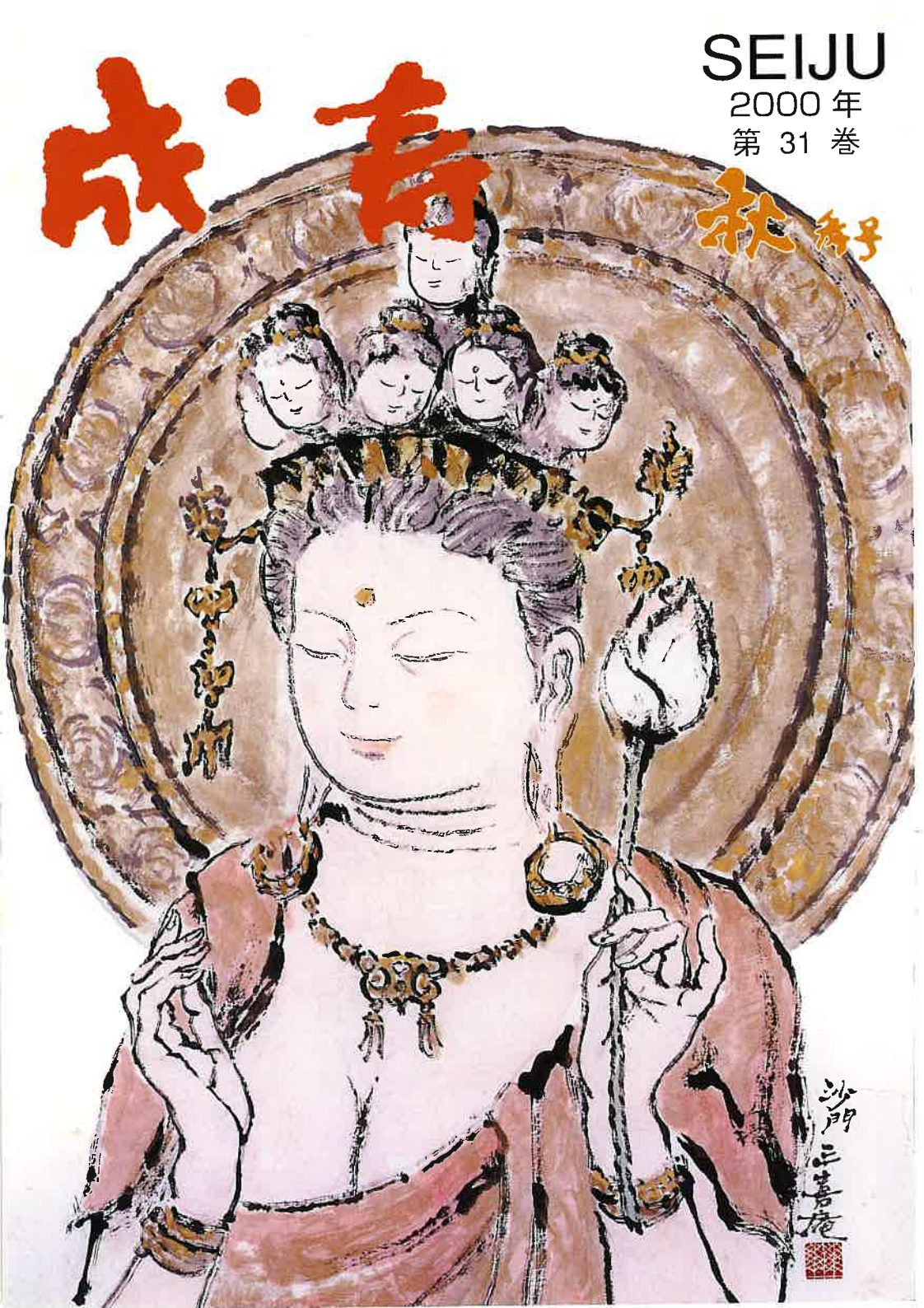
成・寿

SEIJU

2000年

第31巻

秋 春号



謹啓

残暑お見舞申し上げます

手素寺門の興隆並育英会に対し格別の

御尽力を賜り厚く御礼申し上げます。

成壽三十一号をお届けいたします

やすらぎの郷霊園並管理棟が落慶いたしましたので

特集号とさせていただきました。

御一読賜ければ光栄です。

今後共佛法興隆の為により一層の精進努力

いたす決意でございますので何卒ますますお願い

申し上げます。

合掌

善光寺　星田武志拝上

横浜やすらぎの郷霊園

開園並管理棟落慶式典

平成12年6月5日

所在地：横浜市旭区上川井町字堀谷

落慶式

感謝狀贈呈

黒田武志住職挨拶

黒田俊雄老師

東　隆眞先生

東郷　敏氏

祝宴

一階ロビーと受付

管理棟正面

墓地より管理棟を臨む

2階法要室

霊　園

カラー■横浜やすらぎの郷霊園開園並管理棟落慶式典……1
特集●横浜やすらぎの郷霊園開園並に管理棟落慶式を挙行　お祝いの言葉……12
リポート●霊園開園式・管理棟落慶式に出席して……川内　朋子……15
特別読物●人生の指針　修証義・発願利生の教え……黒田　武志……22
提唱●儀式について……前角　博雄……41
連載●くらしの中で読む『正法眼蔵』面授の巻・その六……小倉　玄照……49
カラー■横浜善光寺留学僧　具足戒授与式……57
特集●タイの上座部仏教について―ウパサンパダーの儀式に随喜して……福田　孝雄……65
●仏のこころ―得度式と戒律……東郷　敏……69
弔辞●小谷亀太郎氏逝去……106
カラー■仏教への厚い信仰に生きて　タイの仏教文化を訪ねて……113
旅行記●チベット紀行……伊藤　博・伊藤　宣……117
寄稿●『正法眼蔵』における頭陀説再考……阿部　慈園……127
カラー■伊藤三喜庵先生による想い出の成寿表紙　創刊号から30号まで……153
声136　読者のたより142

題字・イラスト　伊藤三喜庵

巻頭言

黒田武志
（善光寺住職）

善光寺が長年念願としておりました霊園『横浜やすらぎの郷』が無事完成し、去る六月五日、関係者をお招きし、開園式並びに管理棟落慶式をとり行いました。国籍、宗教、宗旨、宗派をとわない霊園として、横浜市旭区の自然に抱かれた丘陵地の一画、西方に富士山を望め、お天気の良い日は、えもいわれぬほどに佳境なる眺望がいただけます。霊園内は、高齢者、身障者の方々に優しい簡易のリフトも装備いたしました。皆さま方にも是非一度お参りいただけたら光栄であります。関係者の方々の御尽力に、厚くお礼を申し上げます。

さて、会者定離と申しますが、残念な報告です。善光寺育英会発足以来、海外の顧問として、私も公私共に三十五年間お世話になりました小谷亀太郎会長さまが七月十三日、タイ国バンコクで、八十五歳の生涯をとじられました。

会長さまは、仏道への堅固な菩提心と人種、民族の枠を越えた弘法救生の慈悲のお方でありました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

十一月中旬には、中国寧波の天童禅寺（宗祖道元禅師が修行なされ、真実の仏法を体得されたお寺）開創一七〇〇周年の式典に、修祥監院老師から随喜の招待をいただきましたので、檀信徒の方々と参列を予定いたしております。

さてミレニアム、二十一世紀の足音が近づいてまいりました。いま世界は仏教への関心を高めています。仏教の真理こそは、宇宙自然の理に合致しているということです。仏教こそ真の宗教だと世界中が再認識しております。これも急激に起って来た地球と自然環境破壊の脅威が叫ばれ、仏教のこころにその救済が求められているからです。いまこそ、仏教国日本は、アジアの隣人と共通の認識に立ち、魅力ある共同体作りを進める必要に迫られています。大乗、上座の仏法が一つとなり、新しい世紀、次の世代に明るい展望と、やすらかなる「生」を得るために、益々日本とアジアの交流を密にして、いよいよ平和と繁栄のため至誠を尽くし尚更に精進することを心にちかっております。

□横浜やすらぎの郷霊園□

開園並に管理棟落慶式を挙行

――三十周年記念事業で開発――

横浜市街地から多摩丘陵にさしかかる緑ゆたかな一角に「横浜やすらぎの郷霊園」が開発された。〝宗教・宗派・国籍〟を問わない霊園で、交通の便もよく、晴れた日には霊峰富士や丹沢の山々を望む恵まれた環境にある。霊園事業の通例を破ったのは、宗教法人善光寺自体が経営事業主体となっていることである。六月五日に開園並に管理棟落慶式が執り行なわれた。

善光寺は黒田武志住職が昭和四十四年、ナリス化粧品の初代会長を開基に迎え、本師・黒田白純大和尚を開山に勧請し、山号を「成寿山」と名づけて開創した寺である。これまで開創十五周年の記念事業として「横浜善光寺留学僧育英会」を設立し、仏教による世界平和に寄与する人材の育成を寺檀一体の報恩行として継続している。霊園開発は善光寺に帰依する人々の願いに応えるため、開創三十周年の記念事業として二年がかりで進めてきた。

霊園の所在地は横浜市旭区上川井町字堀谷。規模は開発総面積六、九六六平方㍍（進入道路を含む）、販売敷地面積一、六〇〇平方㍍。昨年九月に造成が完了し、付帯施設として約五十坪・

二階建ての管理棟、駐車場がこのほど完成した。管理棟の落慶法要は本寺の栃木県光真寺・黒田俊雄住職の導師で営まれ、㈱開成プランニング、日広建設㈱、指定石材店十三社、その他に感謝状が授与された。

駒沢女子大学の東隆眞学長は「世にたくさん霊園はあるが、この霊園は黒田老師の魂が入っている。黒田老師の魂が、この霊園にご縁のある方々に真のやすらぎを招く。そういう点で、他と大いに異なるところがある」と祝意を表し、黒田住職は、三十年来の願いがかなったことに万感を込めて謝辞を述べた。

祝宴の席上、黒田住職の修行時代からの〝心の友〟である東郷敏氏（元ナリス化粧品常務取締役）は、「黒田方丈は〝世界は一つの村〟と考えているお方だ。そのお方がグローバルな霊園を実現された。かねがね、お墓は心のよりどころ、先祖代々のすみか、人々のやすらぎの郷でなければならぬと念じておられたようだ。この霊園は霊園利益事業に非ず、社会貢献事業なり。企画から管理運営まで僧侶が加わり、すべて善光寺がさせていただく霊園だ。プロの石材屋さん、葬儀屋さん、仏壇屋さんと連絡をとり、心を尽くしてやすらぎを提供しようとするこの霊園こそ、善光寺黒田方丈の真骨頂です」と称賛した。

お祝いの言葉

本日は、霊園の整備と管理棟が落慶し、まことにおめでとうございます。

東郷　敏

親孝行の第一人者と称される曾子の言葉に、「終わりを慎み遠きを追えば、人の徳厚きに帰す」

とありますが、人それぞれに先祖代々あって今日の我が身があり、遠くに見えぬ諸々の恩人に心致し、また近くは家族の大切な存在を失って、初めてその尊さを知る。そんな人々の生・老・病・死、その心慮ばかるグローバリスト黒田武志方丈が、常に地球を一つの村として考えるグローバリズムの霊園。それがここ「やすらぎの郷」として実現しました。

この緑豊かな富士の望める大地に新しい霊園。陽当たりよければ風当たりも強し、完成まで方丈の手となり足となり関わり働いた方々のご苦労は、人知れず並のものではなかったと想像いたします。本当にご苦労さまでした。

方丈はかねがねお墓とは心の拠り所、永代の住まいなりと申され、安心と安らぎを求めて止まない心があり、常にその用意と準備がありました。そして新しい時代の新しい在り方、皆様のニーズ（必要性）や、否ウォンツ（欲しいもの）に応える在り方を模索していたのです。

霊園の企画から開発、管理、運営まで僧侶が関わり、その道のプロフェッショナルの方々とも密接な繋がりをもって、すべてを善光寺が行う。当然にして宗旨、宗派を問わないし拘らない。この郷は霊園事業にあらずして社会貢献事業です。まことにもっておおらかな寿陵、天地に響き心と魂を揺さぶる永遠の霊園。これこそ横浜善光寺黒田方丈の表現であり、真骨頂であります。

どうぞ本日ご列席の皆様、この郷を中身においてやすらぎにおいて、世界一の郷に高めて下さいませ。

先ずはおめでとうございました。

□リポート□

霊園開園式・管理棟落慶式に出席して

リポーター　川内朋子

『横浜やすらぎの郷開園式並びに管理棟落慶式』が、気持ちのいい青空が広がる平成十二年六月五日（月曜日）の午前十一時から、完成したばかりの管理棟の二階で厳かに執り行なわれた。

一階から落慶法要の始まりの鉦の音が響く。開園にご協力いただいた方々や檀家の方々総勢百三十余人が見守るなか、導師、本寺光真寺黒田俊雄老師が祭壇の前に立たれいよいよ法要が始まった。善光寺住職黒田武志老師はというと、開式の辞が始まると同時にずっと頭を下げ続けていらっしゃる。おそらく皆さんへの敬意と感謝の気持ちを表わしていらっしゃるのだろうと想像するが、その姿が印象的だった。

私は芸能リポーターという仕事をしているため、このような厳粛な法要に出席させていただくのは初めてのこと。もちろん檀家でもないが、黒田老師とはご縁があってお知り合いとなりこの日は取材という形で出席させていただいた。ただ、黒田老師にとって霊園を持つことは三十

年来の念願であり、大変なご苦労があったと伺っている。どんなにお喜びか、計り知れないことである。

そしてもう一人、喜びを隠せない方がいらっしゃる。元ナリス化粧品常務取締役の東郷敏さんである。ご存じのように東郷さんは、黒田老師が總持寺の修行僧から善光寺を建てられるときに、全国を廻りたったの三ケ月でその資金を調達された方である。その東郷さんは、

「黒田武志という方はただただ人のためにという方なんです。一切〝私が無い〟このやすらぎの郷だって霊園利益事業ではなく、方丈のなさっていることは社会貢献事業だ」

と言い切る。

「損得無しで世界に貢献する。そして常に地球をひとつの村と考える。いわゆるグローバリスト。私はそれが最高に好きです。そういう心は私自身ないことですからね。まったく方丈という御方は、どんな構造をしているのか不思議でならない」とその総力に相好を崩す。

「今日はご老師にとって、うれしいでしょうね」と尋ねると、

「最高でしょう。しかし、いつになく静かです。というのは、方丈の気持ちの中でこの仕事は今日ではなく、昨日で終わったんだと思いますよ。もう次のことを考えていると思うんです。あの泰然自若ぶりは、今日の喜びより次のこと。という在り方。方丈とはそういう方なんです」

方丈とは四十年のおつきあい、その東郷さんならではの洞察力。

さらに東郷さんはこうもおっしゃる。

「男が男に惚れるというのかな。あの方のためなら死んでもいいと思うときが、しょっちゅうありますよ。短い人生の中では滅多にないことです。本当に〝私心〟の無い人間とは、どうしてこんなに魅力があるんでしょうね」見事に

黒田方丈という人となりを表現しているように思った。

『横浜やすらぎの郷霊園』は開発総面積六九六六平方㍍、販売敷地面積一六〇〇平方㍍、駐車場も完備。市内としては希少価値のある宗派不問の霊園として誕生し、日当たりのよい穏やかな丘陵に広がっている。晴れた日には富士山や丹沢の山々を望むことができ、まさにやすらぎの聖地。と、以上はいただいたパンフレットに書いてあったことだが、本当に見渡すかぎり畑がつづき、静かで空気がおいしいことに間違いない。管理棟の前に立つと遠くにバス通りの八王子街道が見えるが、車の騒音はここまでは届かない。のんびりとゆったりとした気持ちになる。今日は晴れてはいるものの、大きな雲に阻まれて残念ながら富士山までは見えなかった。

さて落慶法要は、浄道場、献湯菓茶、仏像点眼、普同三拝、拈香法語、読経、回向、普同三拝とつづき、次に霊園開園にまた管理棟落慶に協力くださった方々へ感謝状と記念品が渡された。

そして、お三方からの祝辞の後は、いよいよ黒田老師の謝辞である。この時初めて顔を上げられたご老師は、

「善光寺には今まで墓地がありませんでした。欲しい欲しいと三十年間思っておりました。その思いが今日ここに叶いました。本当に本当に皆様のおかげだと深く感謝し、厚くお礼を申し上げます」

一言、一言、噛み締めるように話される老師の言葉には力がこもっている。が、感傷的な響きはない。まさに東郷さんのおっしゃる通り、静かな響きなのである。一同が緊張して耳を傾けるなかご老師はつづけて、

「皆さん、間もなく十一時五十分になります。五十分にならないと昼食の準備が整わないとい

うんですね。そろそろ大丈夫のようです。さあさあ、向こうでくつろいでください」

この言葉で皆、厳粛な空気から緊張が解けホッと肩の力が抜けた。

私はこれなのだと思った。三十年来の念願であった墓地が完成したのだから、祝辞でその感慨や苦労をしみじみと話されても当然のこと。それを言葉少なに抑え、唯々皆さんを気づかう。偉いお坊様だと、自分と距離感があって当たり前だと思うのだが、ご老師は「お陰さまで、お陰さまで」と言いながらすっとこちらに近づいて来てくださる。ここが魅力の一つなのだろうな、と思った。

場所を変えての祝宴は、ご老師を中心に談笑タイム。その輪の中にさきほど祝辞を述べられた一人、潮音寺住職安藤康哉老師に今一度お祝いの辞を聞いた。

「おめでたい、ありがたい、すばらしいの一

言ですね。黒田老師の熱血溢れる心情が、霊園の中に生きていると思います。

実は今日車に乗るときに思ったんです。高校生の時に見た『未完の交響曲』という映画のことを。すばらしいメロディーと『我が恋の終わらざる如く、またこの曲も終わらざるべし』というセリフを残したのですが、これは私たちに夢を与えてくれるものです。同じようにご老師も私たちに夢を与えてくれます。

第一楽章は、無から出発した善光寺の建立です。第二楽章は、その善光寺を国際的に発展させ、さらに学問をとおして仏教をインターナショナルにしようというものです。この考え方はすばらしいものです。そして今度の第三楽章は、グローバルなことではなくもっと地元に密着した、民衆の心に密着した、その心を捕えて造ったのが、この霊園だと思います。

老師の心というのは自分の志す一筋の道を命を賭けて、さらに己の力を他のために傾け尽くす。その心こそ、仏心であり、菩提心であり、願心なんですね。これをお持ちなのだから、これは未完でなくして必ず第四楽章があり、第五楽章が作られるであろうことを願っていますし、それは可能であると思いますね」

と、よほどの思いや願いがおありだったのか、安藤老師は一気に話された。地元に密着、私はこの話しにハッと思いあたることがあった。

私は今日、横浜から相模鉄道に乗り三ツ境駅で降りた。急行は十分おきに出ていて、十三分ほどで三ツ境駅に着く。そこからバスもあるが、私はタクシーに乗った。

「やすらぎの郷霊園に行ってください」

「ああ、新しくできたところですね。実は僕の友人が買ったんですよ。近くにゴルフ場があるくらいで何にもないけど、いいとこですよね。だから僕も買おうか考えているんですよ」

「私も初めていくんです。今日が落慶式なんですよ」

「ラッケイシキ?何ですか、それ」

たまたまと言ってしまえばそれまでだが、偶然乗り合わせたタクシーの運転手さんの言葉がうれしかった。新しくできたばかりの『やすらぎの郷霊園』を知っていたということではなく、安藤老師の言葉を借りれば、すでに地元の人に受け入れられているということが伝わってきたからだと思う。

さて、祝宴のにぎやかな談笑が続くなか、やはり法要で祝辞を述べられた駒沢女子大学学長、東隆眞先生にもお祝いの辞を聞く。黒田老師とは駒澤大学・大学院とご一緒で、以来四十年以上のお付き合いとか。

「喧嘩をしたり握手をしたり、ずいぶんしましたね。しかし、こんなデカイことをよくやったなあと感心します。老師の年来の宿願が一つまた実を結んだ、彼の魂が一つの形をとったんですね。

さきほど『手を合わす　やすらぎの郷　風さやか』と一句読ませていただきましたが、ここはその通りすばらしい。

不思議なことに、老師は絶対に失敗をしないんです。これは不思議ですね。『あれをやったけど、駄目だった』なんて話は聞いたことがない。それには緻密な計画と周りの人の協力があるからです。第一は奥さんでしょう。ひょっとしたら、奥さんの方が本当の住職かもしれないですよ（笑い）。私はそう思っているんです、本当はね。黒田さんはリモコンで動かされている（笑い）」

そういえばいつもご老師は「みち子、みち子」と呼んでいらっしゃる。その存在の大きさを見逃してはならないのでしょう。機会があったらリモコンをお持ちか、確かめる必要はありそう

だ。

最後は黒田ご老師にお話をと、近づいた。

「皆様のおかげであります。本当に感謝しております」

「法要ではどんなお気持ちでいらしたんですか」

「気持ちはただ一つですよ。お陰さまで有難うございますと。（ニコニコ笑いながら）黒田武志は緊張蚊取り線香だなあって」

「この場所はどういうことから選ばれたんですか」

「お墓を作りたいなあと思っているときに、ある方から紹介していただいたんです。もしご縁があったら、心の拠り処、心のやすらぎ場所、そんな霊園を作らせていただこうという気持ちでしたね。さきほど東郷さんが言ったように、ゆりかごからやすらぎの郷まで、これからこの郷が安心、平和、幸福感を抱くすばらしいところだ、と言われるように心尽くしてまいります。さあ、取材はそれくらいにして、飲んで飲んで」

黒田老師はやはり多くを語ろうとはしない。多くを語らなくとも、ご老師の気持ちや魂は檀家の皆さんの方がよく知っていらっしゃる。これ以上求めてもご老師は決して話されないだろう。ようやく私にも解かってきた。

帰り際、『横浜やすらぎの郷霊園』の桐元さんが、

「裏の山に登るときれいな夕日が眺められますよ。真っ赤な夕日に浮かぶ富士山を見ていると、何もかも忘れて気持ちがいいんです。今度ぜひ一度、登ってください」

そうだ、セミの鳴く頃に来てみよう。風に吹かれ、真っ赤な夕日に富士の山、見てみたい。俗世間を少しだけ離れて、心のやすらぎ、感じてみたい。

人生の指針

修証義・発願利生の教え

成寿山善光寺住職
横浜善光寺留学僧育英会理事長
黒田武志

今、携帯電話を片手に華やかな街を歩く日本の若者たちに、『正法眼蔵』の一部分でも手渡し、

「ぜひお読みなさい」

と言っても、たぶん彼らは受け取らず、まったく無視することでしょう。仏教書＝難かしい書物・おもしろくないもの――そうした固定観念を持ち、ほんの一握りの興味さえもわかないかもしれません。

たしかに、『正法眼蔵』は、古来から、あまりにも難解であり、そして膨大な書で、一般の人にはとても読みこなせるものではないと思われてきました。専門用語の高度さ、それを解説する書もまた仏教語によって書かれているため、よりいっそう読みにくいイメージがあるようです。

しかし、どんなに難解であっても、その原点に立ち返って、先入観抜きにして真っ白な心で接してみれば、そこには、人間誰しも――幼子でも、学生さんでも八十歳を越えたご老人でも、日本という国を知らない外国の方にでも――あ

てはまる、普遍的な、人生を生き抜くためのすばらしい知恵・魂が描かれていることに気付くことができるはずなのです。仏教を深く学んだ人なら、数多くの言葉の宝を自分の実生活に生かして真の安らぎに満たされていくことでしょう。しかし、仏教をまったく知らない人にでも、誰かがその真髄を、誰にもわかる言葉と心で、かみ砕いて伝えてやれば、それは、同じように彼らの生活に生かされていくに違いありません。

大人からみれば、眉をひそめることがある現代の若者たちも、半世紀もたてばきっと、

「今どきの若いものは……」

というセリフを思わずはいてしまう、次代の若者を育成する日本の中枢の年代になっていることでしょう。今から四千年昔のエジプトで書かれたらしいパピルス文書が発見されたとき、それを学者が解読すると、〝今どきの若者はけしからん〟という意味のことがあったというような話があるほど、〝理解しにくい若者〟は、いつの時代にも存在しましたし、現に、私だって、そうした若者時代を過ごしてきたのだと思います。

ただ、私にとってありがたかったことは、寺の家に生を受け、幼い頃から仏の道に携わる父や兄に囲まれ育ってきたことでした。ですから、未成熟な若者時代にも、自然に道元禅師の心に触れる機会を持つことができたのです。そして、師の生き方、考え方は、経験を積めば積むほど年を重ねれば重ねるほどに、私の血となり肉となっていきました。禅の教えを禅堂の中でだけ解釈するのではなく、その教えを、生きとし生ける者の日常生活の中で活かしていかなければ、道元禅師の心を後世に残すことにはならないのではないかとしみじみと感じるようになっていったのです。

道元禅師が伝え残したかった、真の釈尊の教え――それを学び、守り、後世に残せる若者づ

くり。人材づくり。いつしかそれが私の誓願となりました。

その実践的な方法は後で記させていただきますが、まずは、仏教についてまったく関心がないと言い切る若者にも少しでも興味の心を芽生えさせてほしいという願いをこめて、『修証義』の教えについて触れておきたいと思います。

人間本来の美しい生き方――修証義

釈尊は、いろいろな機会に多くの人と接して、仏教という教えを説いてこられた方です。仏教には、「八万四千の法門」の教え――中に入れば真理は一つだけど、その入口・門はたくさんあるということ――があり、それらはすべて、言葉による教えでした。言葉によらなければ、思想を伝達することはむずかしいことですが、しかし、言葉というものは、何世紀も過ぎていけば、その解釈のしかたなどで本当の意味からずれてしまうこともあります。釈尊は、八万四千の法門の他に、まったく異質な、言葉によらない教えというものがあるということも伝えられました。それを伝えるためにどうしたかというエピソードに、一輪の花を、ただ、ひねってみせるというものがあります。それを見ていた弟子の摩訶迦葉は、言葉を使わず〝微笑〟によって、釈尊のおっしゃっている意味がわかりましたと伝えました。これが、仏教の言葉でいうと、〝拈華微笑〟と呼ばれる公案です。

この、言葉によらない、異次元の法門が、禅であり、正法眼蔵なのです。そして、道元禅師はご自身の主著を『正法眼蔵』と名付けられました。言葉による八万四千の教えは、「正法蔵」と言います。正法とは釈尊の教えであり、それは文字で書かれた八万四千巻の経典となり〝蔵〟に収められました。それが正法蔵です。仏弟子たちによって受け継がれ守られていきましたが、

それだけでなく、いつ、どんな時代にでも、その経典を正しく理解し読み取る心・智慧が必要です。その直観的な心が〝眼〟なのです。正法眼蔵――正法を正しく学ぶことができる直観的な智慧の教え。その言葉や文字のない教え…禅――をこよなく大切に思い、伝えられたのが道元禅師です。

心から心に伝える。自分自身で気づく。むずかしいことに思えるかもしれません。しかし、私たちは日常生活の中で、こういうことをかなり多く経験しているはずです。相手の心を思いやることができるのは、私たちが、やさしさを常に心の中に持っているからです。波長が伝わると言ったらいいのでしょうか。美しい自然に感動させてもらえたり、赤子の微笑に幸せいっぱいの気持ちにさせていただいたり、それは、難解な言葉や知識を越えて得ることができる静かな安らぎの境地です。そこには、我というものがありません。言葉や文字を異にする外国人同志も、あっという間に共有できる不思議な力です。

『正法眼蔵』は、そんなふうに考えて見てみると、心温かくなる教えに全体が満たされているのがわかります。仏法の真髄を説いた日本最高の哲学書と聞けば、読む前から、自分にわからないのではないかと一歩引いてしまう人もいるかもしれません。しかし、『正法眼蔵』九十五巻の中から二十四巻を選びまとめられた『修証義』は、奥が深くて難解な教えを、たいへんかみくだいて優しく教えてくれているものであり、時代がどんなに変化しようとも変わることのない、大切な、人間本来の美しい生き方を示してくれる書なのです。そして、その内容を自分のものにできたとき、それが、どんどん伝わって全世界の人の心にまで染み渡ったとき、この世から、争いという言葉は消えて無くなるのです。

さて、『修証義』では、次のようなことが説かれています。

第一章　総序

「人生とは何か。それを究明することが、仏教徒として一番大事なことです。今、私たちは、人間としてあたりまえに生きているのではありません。この世に、人間として生を受けることはむずかしいことだし、仏法に出会うこともまれなことです。しかし、あなたは人間として生まれ、仏法に出会うこともできた。これは、すばらしいことなのです。人生というものは、はかないものかもしれません。月日は一瞬もとどめることはできないし、美しい顔の少年もいつの間にかどこかへ行ってしまいます。過ぎ去った日々に出会うことはできません。だからこそ、このかけがえのない人生を、充実させて生きなければならないのです。善と悪、因と果、業と報い、過去・現在・未来の三世というあらゆることを学び理解しないでいると、よこしまな考えに陥ってしまいます。この世で、私という存在は、たった一人しかいません。いたずらによこしまな考えに堕ちて、悪い行いを平気でして、その結果が自分にかえって苦しむなんて。たった一度の人生なのに、惜しいことではありませんか。」

たった一度のかけがえのない人生を、精いっぱい生きることの大切さを教えてくださっています。

第二章　懺悔滅罪（過去の悪業を悔い、罪がなくなることを仏に願う）

「仏や祖師たちは、私たちを憐れむあまり、仏道の広大な慈悲の門を開いてくださっています。これは、生きとし生けるもの、すべてを間違いなく悟りの境地に至らせ、救ってくださろうとするためなのです。過去に犯してしまった悪業はその身に受けることにはなりますが、しかし、

心の底から反省し、懺悔すれば、重い報いも軽くなり、また、罪が滅んで浄らかな身となることができるのです。心から仏さまに懺悔した功徳の力が、私たちを救い、浄らかにしてくださいます。浄らかな心がひとたび現れると、自分も他人も浄らかになり、それが自然やすべてのものに行き渡ります。一所懸命に仏の道を学べば、必ず仏祖のご加護があり、仏祖とおなじようなすばらしい力を得て生きることができるのです。」

一度犯してしまった過ちは、もうどうすることもできない、ということではなくて、罪を犯した者まで救おうとするのが道元禅師です。心から反省し悔い改めれば、あなたも浄らかな人になれますよ、と、救ってくださるのが仏です。犯罪を犯し、心が改まらないのに、法律で決められた刑期を過ごしたから、自分は自由になったという人は、決して真に浄らかになったとは言えないのです。罪業の根源をことごとく溶かすためには、本心からの涙枯れるほどの懺悔の心が必要であり、それは、強制されて生まれるものではありません。誰も見ていなくても、自分の心は、もう一人の自分が見つめています。本来、仏そのものである、もう一人の自分が……。

第三章　受戒入位（仏の子としての道に従い、それを受け、守り、仏として目覚めさせていただく）

「心の底から悪業を懺悔して、本来の不垢不浄の自己に帰って罪を清めたら、次に深く、仏・法・僧の三宝を敬いたてまつることを願うべきです。インドでも中国でも、仏祖が正しく伝えられたところは、仏法僧をつつしんで敬っています。いたずらに迷信や邪教に頼っても、もろもろの苦悩から解放されることはありません。次に三つの浄らかな戒と、十の大切な戒を受けなければなりません。

三つの浄らかな戒――生活のきまりというのは、

一、すべての悪と不善は行わないというきまり。

二、すべての善いことは行うというきまり。

三、自分だけではなく、他の人に対して、善いことをしていくというきまり。

です。

人として必ず守らなければいけない十のきまりというのは、

一、殺さないきまり。

二、ぬすまないきまり。

三、みだらなことをしないきまり。

四、うそ、いつわりをいわないきまり。

五、酒を売ったり買ったりしないきまり。

六、他人のまちがいを強調しないきまり。

七、自分をほめて、他人をけなさないきまり。

八、他人に施すことを惜しまないきまり。

九、怒ったり腹をたてないきまり。

十、三宝をそしらないきまり。

です。

これらのきまりをすべての人びとが受けて守り、絶対的な確信が決定すると、そのまま仏の世界に通じることになります。大宇宙のすみずみにまである地、草木、石ころまでもみな、仏としての仕事をくり広げているから、そのことによって起こる風や水の利益を受ける人びとがみな、深く広い、人間の思いでははかり知れぬ仏の力に助けられて、悟りを開くのです。新しい、真実の人生が開けてくるのです。同時に、多くの人々や社会、宇宙のためにお役に立ちたいという気持ちが起こってくるのです。」

三宝――仏・法・僧。まず、「仏」というのは、仏教の歴史から言えば、今から二千五百年前に仏陀（悟りを開いた人の意味）になられた釈迦牟尼・お釈迦さまです。敬まった言い方で、釈尊と言いますが、釈尊の説かれた教え＝真理が、

「法」です。そして、釈尊を中心にサンガ（和合衆と呼ばれる釈尊の教団）形成したお弟子たちが「僧」で、これを「現世三宝」と言います。これは、釈尊の在世時代の仏法僧という意味です。釈尊が入滅した後は、釈尊そのもの、また、その心をかたちとして現した礼拝の対象物を「仏」、お経を「法」、そして今日ただ今もなお仏陀の教えを身にとどめ保っているお坊さんを「僧」と言い、「住持三宝」と言います。

『修証義』第三章「受戒」の章では、この三宝に帰依することからすべては始まると説かれています。帰依するというのは、信じて私たちの究極の心の依り拠にすることです。帰依の同義語に「南無」という言葉がありますが、「南無」はインド語の「ナモー」「ナマス」の音写で、〃首や背中を曲げて礼拝する〃という意味があります。〃礼拝〃は、身を投げ出すという意味でもありますから、衆生の心身を投げ出して、本来の自己に帰ることを言います。道元禅師は、「礼拝が世に住まる限り仏法は絶えない」とおっしゃっています。

東洋では、日常の挨拶のときに、自然にお辞儀をします。手を合わせる国もあります。これは、伝統的な本当に美しい姿です。「どうも」の一言ですべてを終わらせる現代日本の若者や、これから仏教を学びたいという西洋の方々にも、三宝とともに、この〃礼拝〃の深い意味を知っていただけたらと思います。

第四章　発願利生（苦しみ悩みの世界に身を捧げると誓い、誓願を起こして、世の人のために奉仕する）

「自分のことはさておいても、他の人のために尽くすという願いを起こし、これを完成させようと努力することは、どのような人にとっても大切なことです。その姿かたちは、みすぼらしくとも、この心を起こすと、すでに生きとし生

けるものの指導者となります。たとえ七歳の幼い女の子であっても、ただちに、仏の道を学ぼうとするすべての人の指導者であり、生きとし生けるものの慈しみ深い父なのです。だから、急いでこの願いを起こすべきです。

生きとし生けるものを幸せを与えるには、四つの真実の智慧を、自分の願いとしなければなりません。四つの真実の智慧とは、

一、布施――むさぼらないで、施すこと。真心から与えること。

二、愛語――生きとし生けるものに、まず、慈しみ、愛する心を起こし、やさしい心のこもった言葉をかけること。親が子に言葉をかけるときのように。

三、利行――自分も他人もともに生きること。立場の違う人さまざまな人が自分の回りにはいるでしょうが、その方々に自分が生かされているということに気づき、感謝して、その方々が得をするよう、幸せになるように手段を思いめぐらして生きること。

四、同事――あらゆるものと仲良く調和して生きていくこと。海があらゆる河の水を拒まないで受け入れるのは、すなわち、自分と他人を区別していないということです。だから、よく水が集まって海となるのです。他の水を区別し汚そうとすれば海全体が汚れますが、美しくしようとすれば、自分自身も自然に美しくなります。

およそ仏道を求める心とその行いと願いは、このような道理があることを、静かに考えてみなければいけません。生きとし生けるものを残らず救う、この功徳を礼拝し、敬わなければなりません」

この、第四章〝発願利生〟の教えは、とくに、私の心を大きく揺さぶり感動させ、今の人生の大きな指針となっているものです。若き日のさまざまな体験的修行と日々の坐禅生活を経て、

最終的に私が大誓願をたて行ってきた諸々の事業の根本に、この、発願利生の教えがあるのです。

第五章　行事報恩（仏の生活をして、仏の恩に報いる）

「四つの真理に生きていくことはたやすいことではない。しかし、この人間界に生まれ、仏道を求める心を起こす機会が与えられたのは釈尊や多くの祖師たちのお導きのおかげです。このご恩を知っていながら、どうしてご恩に報いることをしないでいられましょうか。ご恩に報いるためには、まず、何よりも毎日の生活を大切に、ていねいに、仏さまのいのちとしての生活を営むことです。光陰は矢よりもはやく、いのちは露よりもろい。だからこそ、この一日一日の自分が、かけがえのない尊い仏さまのいのちであり、体なのです。毎日を、自己のありのままのいのち精一杯に生き、仏としての修行生活ができる自分自身を自ら大事にし尊敬しなければなりません。そして、他のいのちを大切に生かし続けるところにこそ、釈尊と相通じる仏法の真髄――坐禅の姿と心で生きていく仏――即身是仏という仏になるのです。そういう仏とはいったい誰のことかと、細やかに心をこめて参究すべきです。それこそがまさしく、仏のご恩に報いることになるでしょう。」

人はどのようにして仏になるのか。つまり、どのような人のことを仏というのか。それを教えてくださっているのが、『修証義』の大事なところでもあります。

世界的視野を持つ若き仏教徒を育てたい

さて、『修証義』に書かれているだいたいの意味はおわかりになったかと思います。私は僧侶である兄の助言もあって、仏教系の駒澤大学・大学院を出て、曹洞宗大本山總持寺、そして永平寺で修行を積みました。しかし、この頃はま

だ、道元禅師の『修証義』の奥深い哲学を自分のものとすることはできず、体を壊して下山するありさまでした。しかし、仏さまは、未熟な私でも、一度仏道を目指した者をほったらかしにはしませんでした。帰京列車の乗り間違えという不思議な偶然が重なって、私は二十歳代で、全国托鉢行脚という、まさかと思うような苦しくそして、貴重な体験を得ることができたのです。何週間も、何カ月も、お金もなく、冷たくされ、野宿を繰り返し、雨が降り、雪が降り、みじめで、悲しくて、せつなくて……。托鉢修行者が必ず携帯する、自分の葬式代でもある涅槃金にまで手をつけてしまうほどの生き地獄を味わいました。しかし、その体験の中から、はじめて私は、自分のいのちの尊さを、そして、生きとし生けるもののいのちの尊さを実感することができたのです。明日のいのちもわからないほどの体験をした時に、ふっと、自分が僧侶だということを思い出しました。恥も外聞も何もなくなって、我さえも忘れ、一人の僧侶となったとき、自分がするべきことは、仏道の修行であり、人さまのために般若心経を唱えることであり、ただ、それだけで満ち足りるではないかと、心底思えたのです。それからの、十円のご喜捨のありがたかったこと。仏に生かされている自分を感じることができるというのは、どんなに幸せな気持ちになることか。そうしみじみと思ったときに、それまでざんざん降りだった雨が上がり、雲の隙間からサーッと陽の光が射した、そんな、夢のような体験も、実際に味わいました。

全国托鉢行脚を終えた私は、新たな気持ちでゼロから仏道を学びたいと思い、誰かにすすめられるというのではなく、改めて自分の意志で、大本山總持寺で三年間の厳しい僧堂生活に入りました。その後タイ、インドへと留学して修行

し、タイのワット・パクナムでは二二七の戒律を守る生活で魂が浄められていくような気持ちを持つことができました。三十数年前の当時でさえ、何の目的もなく、ただ漠然と自分だけの楽しみだけ求めて生きている日本の若者と、仏教者を心から尊敬して生きるタイの若者たちとのあまりの生き方の違いに驚きもしました。

三十歳になったとき、次兄が禅センターを開いているアメリカのロサンゼルスに修行に行き、欧米人とともに参禅する日々を送りました。

同じ仏教でも多くに枝分かれしてしまった日本、そして、釈尊の真の教えそのものを学び伝えているアジアの国々、また、仏教以外の神を信仰する西洋の国々。各国を渡り歩き、実際にその地の空気を肌で感じる修行の旅を続けるうちに、私は、一つの光、答え、が見えてきたような気がしたのです。

宗教や宗派にとらわれず、国籍も、年齢も、性別も、職業もまったく関係なく、互いが理解し合い、調和し合ったら、どれほど幸せな世の中になることか。それが、道元禅師思想に通ずる、美しい海になるということではないだろうか。生きとし生けるものすべてを救い、幸せな世界をつくることが、釈尊のみ教え、つまり、仏教の原点。それを伝えることが、今の私の生きる道なのだ、と。

互いを理解するためには、互いの生活の中に溶け込んで、言葉や習慣、文化をそれぞれがわかり合い、そして最終的に心の共通点を見つけ出していくことが必要なのではないだろうか。そういうことが、何の壁もこだわりも持たずにできる、グローバルな視野を持つ若者を、人材を、育てていけたなら！

この思いは、アメリカから帰国後、尊い仏縁に生かされて横浜に善光寺を開創してからも、ずっと心に抱き続けていたことでした。

そして、昭和五十九年。開創十五周年を迎えた年に、長年思い抱いてきた願いを、具体的に実行に移すことが急務だと感じて、『横浜善光寺留学僧育英会』を設立したのでした。

人類は宇宙時代に入り、時間的にも空間的にも距離は著しく短縮されて世界はあたかも一国の観を呈しておりますが、反面、人類はかつてない不安と絶望の危機に見舞われています。これは、道元禅師が生きた、混迷の時代・人間の尊厳が失いかけた時代ともよく似ています。そのような時代に、独自の境地を開き、宗教の名にこだわらず、「ただ、ひとすじの正しい仏法あるのみ」という信念で人々に救いの道を説いた道元禅師の生き方と思想はまさに、時代を越えた永遠の真実として、後世に残さねばなりません。これほどの偉大な師を持つ、世界でも有数の仏教国でありながら日本の仏教界は、世界の大勢に即応して教化の実をあげる態勢に欠けていることを感じ、海外生活を通して広く世界に活眼を開く人材育成の重要性を痛感したのでした。

悲劇のない未来へ向かって

この、「海外に留学僧を派遣し、日本に海外からの留学僧を受け入れ」て、「世界平和に寄与する」という壮大な大誓願に対して、〝財産もない小さな一寺の住職にそんなことができるわけがない〟と心配してくださる声も設立当初には少なからずありました。しかし、私の心には、『修証義』第四章の、発願利生――どんなに苦しくとも、いのちをかけて世の人のために奉仕する――という教えが、深く刻み込まれていましたし、また、信ずれば必ず花開くという確信も、長年の禅生活の中で体得しておりましたので、決心がゆらぐことはありませんでした。

おかげさまで、多くの方々のご援助、ご協力

を得て、一歩一歩着実に育英生の数は増え、十六年たった今日では、その数のべ九十八名にのぼりました。育英会の関係国十八カ国・一地域、派遣国は十三カ国（アメリカ・タイ・インド・スリランカ・イギリス・フランス・イタリア・オランダ・韓国・カンボジア・ドイツ・スイス・オーストリアなど）。受入れ国は九カ国・一地域（アメリカ・スリランカ・韓国・中国・フランス・バングラディシュ・日本・台湾・ポーランド・ベトナムなど）となり、仏法のため、人のためなら命をも惜しまずというほどの情熱ある若き僧侶たちが、世界各国で修行に取り組みながら現在も活躍してくれています。

彼らが果して、日本から自分の国へ何を持ち帰ってくれるのか、海外から日本へ何を持ち帰り、どんな行動を起こしてくれるのか、まだまだ未知数ではありますが、必ずや宗教宗派意識を超えて、道元思想をまっすぐに現代の世に伝えられる国際的宗教者となってくれるであろうと私は信じています。やがて、十年後、二十年後の世界に、活き活きとした仏法の泉を沸かせてくれることを思うとき、私の限りある生命が、『修証義』でいうところの〝露ほどもろい――だからこそかけがえのないいのち〟が、世の中のなにがしかのお役に立ち、一隅を照らすことができるかもしれないと、喜びで胸が熱くなります。

一昨年、開創三十周年の節目を迎える前年に、スリランカで長年にわたり、教育・文化・宗教活動を展開した高僧、ウドゥヌワラ・サラナンダセロの業績を世に広めるために創設された政府公認の慈善団体「サラナンダ財団」より、〝仏教を学ぶ若い僧侶や研究生の海外留学と、外国から日本への留学生を支援する育英事業を高く評価する〟との理由で、国際部門の栄誉賞と称号を授与していただきました。スリランカとい

う伝統ある仏教の国・ともに釈尊の教えを信奉する国から評価していただいた――、このことは、歴代育英生たちが、いかに熱心にその国々で学び、溶け込み、教化活動に力を入れてきたかが認められ、かたちとなったものと私は受け止め、たいへん嬉しく感じました。

今年で育英生も第十七回生を迎えることになりますが、第一回生から毎年、彼らは体験的に得てきた智慧を論文にまとめ提出しています。『人間は心の持ち方で生き方が変えられる。釈尊の説いた慈悲の精神は、私たちに示された、平和を樹立するための英知である。私たちはこの精神を誇り高く掲げて、不戦、恒久の平和の誓願を世界へ向けて伝えたい』といった内容の真摯な論文に眼を通すたびに、若い力が育ち成長しているのを実感することができます。そして、彼らが今後、どんな困難な壁に突き当たろうともそれを乗り越えて、必ず花開かせ実を結び、また、新たな種を蒔いていってくれるであろう、と。

言葉も習慣も文化も異なる国での、ストイックな修行生活は、この世の中の娯楽も知っている世代の若者にとって、どんなにか辛いこともあるでしょう。しかし、彼らは、仏道を自ら選んで歩んでいます。それができるのは、彼らがすでに仏そのものだからです。生きとし生けるものは、すべて、生まれながらにして仏性を持っているのです。私は、仏教のことにまったく関わりないと思っている若者にも、まず、このことを知ってほしいと願っているのです。

百年、二百年後の世界に、片手の携帯電話の代わりに、『正法眼蔵』の一巻でも持って歩く若者の姿。お坊さんが通るのを見て、思わずお布施をし手を合わせる若者の姿。笑い話でも夢物語でもなく、私は真面目にそんな姿をイメージします。

私のイメージする日本の未来の若者の姿は、現代のタイ国の若者の姿に重なっています。タイには毎年訪問しますが、昨年は、世界最高の仏教建造物と言われる〝ブッダモントン〟のあるバンコク西部の町に参拝の旅に行ってきました。ブッダモントンは、仏紀二五〇〇年を記念する事業として一九五五年から建設が始まった国家プロジェクトの施設です。この建物の中に二十世紀最大の仏教遺産ともいわれる『南伝大蔵経』の経蔵があります。縦二メートル、横一・一メートルの板碑の数は、七〇九基。その表と裏、一四一八面にびっしりと、パーリ語で経・律・論の聖典が手掘りで刻みこまれています。これらは、かつて私も若き日に修行した瞑想の寺、ワットパクナムの僧侶たちが、精根こめて、一字一字彫ったものです。今の日本であれば、何十年たっても完成しないかもしれません。また、賃金がどうこうという問題が起こってくる

かもしれません。しかし、タイ国では、この仏教遺産『南伝大蔵経』を十年で完成させました。彼らを動かしているのは、お金ではありません。功徳の力です。現世で一所懸命徳を積もうとする清らかな心です。私は上座部仏教も学んだ者として、小乗とか大乗とか、そうした垣根を越えて、登る道は違えど、頂点――真理――は一つ。〝宗祖を通して、釈尊に還れ〟を宗教生活の原点として生きてまいりました。タイを訪問し、この信仰のエネルギーの凄まじさを目の当たりにするたびに、タイ国民一人ひとりの中に釈尊のいのちが息づいているのを実感することができるのです。

道元禅師も、「仏祖が正しく伝えられた国では、仏法僧をみな敬っている」とおっしゃっていますが、タイ国はまさに、仏と自分を切り離さず、究極の心のよりどころとして三宝を大切にしている国の代表とも言えましょう。

コンピュータ時代、情報化社会の最先端を走り続けているわが国、日本。戦後の廃墟の中から不屈の精神で立ち上がり、休むことなくまっしぐらに走り続けたそのパワーは、たしかにすばらしいものです。しかし、がむしゃらに走り続け、自分たちの利潤の追求ばかりをエスカレートさせていった結果、大切な心を見失ってきてしまったような気がします。道元禅師が残してくれた、真の仏の教えという、汲めども尽きぬ貴重な智慧の財産を持ちながら、振り向きもせず、また、誰からも教わることもなく、突っ走ってきた日本人。我が国の自殺者は、平成十年には、三万二八六三人に達しました。その前年には、二万四千人台だった自殺者数がたった一年で八千人近くも増加したのです。これはあの、大きな戦争を体験したときよりも多い、未曾有の数字です。

そして、国内だけでなく、世界に眼を向けれ

ば、一九九〇年代になって各地で地域紛争が急増し、紛争とは関係のない幼い子どもたちまでもが犠牲になって、亡くなった子どもの数は二百万人、地雷などで傷ついた子どもは六百万人。たった今、この瞬間にも、世界のどこかで、近代兵器の犠牲となり、悲惨な戦闘に巻き込まれて尊いいのちを失っている子どもたちがいるのです。紛争を起こす憎悪の根底にあるのは、貧富、経済格差であり、それが人種や宗教間の憎しみを生み出しているのです。

道元禅師の教えは、貴族とか大衆とか、賢者・愚者、出家や在家、罪のあるなしも問わない、すべての生きとし生けるものを救う智慧です。今の時代であれば、経済格差、人種差別、思想差別、すべての垣根を越えた、極めて普遍性の強いものです。大宇宙の真理です。川の水も池の水も雪も霧雨も、何もかも差別なく包み込む大きく繋がる一つの海です。

私が、今、日本で仏教を学ぶ若者を支援し、また、海外に留学僧を送り出すことは、宇宙的規模でみれば、無にも等しいほどの小さなことかもしれません。しかし、それでも、無ではない。一ミリにも満たない種も、年月がたてば大木となり、森林となり、一山中がその種の子孫でうめつくされる日は必ずきます。いつの世にも、〝遅すぎる〟ということはないと思うのです。

二十一世紀をはばたく真の平和の使者となる仏教徒たちに、私の思いをすべてバトンタッチできる日まで、私は仏さまから頂いた、限られた尊いいのちを生きていきたい。二百年、三百年後の世界というのは、空想の世界ではなく、必ずやってきます。そこは、子どもの笑顔といのちが消えることのない、地球人一人ひとりの心の中に釈尊のいのちが息づいている、悲劇のない未来であるとかたく信じております。

提唱

儀式について ON CEREMONY

前角博雄老師

私は前々から、あなた方のユダヤ・キリスト文化における“ceremony”（セレモニー）「儀式」という言葉の語源的意味あいを知りたいと思っていました。この言葉の起源を知ることで、私たちがどのように生きるかや、私たちが修行の中で見落としている点を発見するのに役立つと考えたからです。ラテン語において「セレモニー」という言葉は“caerimonia”という語になります。それはラテン語の“cure”という語につながっていて、“cure”（治癒）つまり癒す動作（heal）、または癒される（to be healed）という意味あいなのです。したがって、「セレモニー」という言葉の意味には、何かを治癒したり、また何かによって癒されるといった意味が含まれているのです。そこで私たちは、「セレモニー」・「儀式」を行じるにあたり、一体何が癒されるのか、また何によって癒されるのかを問いたださなくてはいけないのです。

そこで“heal”「癒す」という言葉が出てきましたが、その意味は“to be healthy”（健康にな

る）という言葉につながっています。そうすると健康的な生活を送るということは、儀式的に振る舞うということになるのです。ある決められた「かた」や「作法」にしたがって行動するとき、それは儀式になります。健康的な毎日を送るためには、自分の文化や民族的価値にしたがい毎日を儀式的に振る舞わなくてはいけません。朝目が覚めてから寝るまで、私たちは儀式を通して生きているのです。朝起きて顔を洗い、歯を磨き、食事をするといったごく単純な日常の作業もある「かた」にしたがって行っているのです。例えば、食事をとるときには、フォーク、ナイフを用い、また日本では箸を用いるといった「かた」にしたがうことも儀式の範疇であります。また仕事場において、私たちはある決まったやり方で同僚と挨拶を交わすことも、儀式的な行為であります。このようにある決まった「かた」や「作法」の中で、ほとんど基本的な日常の作業が遂行されていることは、興味深いことであります。実はこの「かた」や「作法」についての問題は、私たちの大多数にとっての問題でもあります。何故なら私たちの多くは、インフォーマル（略式的）であることや、カジュアルでいる（くだけた、形式張らない）ことを好みます。しかし、注意してみるとフォーマル、インフォーマルの如何（いかん）にかかわらず、そこには必ず「かた」や「作法」が存在するのです。

セレモニーの一つの定義として“law”（規則）という言葉が挙げられます。生活の「規則」ということです。またフォーマリティー（儀式的・正式）の反対としてインフォーマリティ（非儀式的）があります。朝起きてから夜寝るまで、私たちは規則や慣習に支えられた儀式の連続の中に生きています。あなたたちの目には、形式張らないインフォーマルな生活のほうが簡単でひょっとしたらより快適に映るかもしれません。

それではインフォーマルやカジュアルでありながら、私たちは健康な生活を築く礎となる規則や慣習を順守することができるでしょうか。例え習慣的に行っているごく単純な行いでも略式的になおざりにすることは、何かを見落としてしまったり、無視する結果となってしまうのです。それでは私たちは一体どのように自己を癒し、健康になるための規則に準じて生活すればよいのでしょうか。またどのようにこの瞬間、瞬間に自分を律して行けばよいのでしょうか。例えば朝起きる時間になれば、私たちは単にベッドから体を起こし起きあがります。簡単な動作ですが、あなたはそれをどのように行っていますか。「作法」通りに行うことで、あなた自身の生活を律することができるのです。もしインフォーマルに気ままに、手当たり次第にやっているとしたら、そこに何かを見落としていることになります。

気楽にやることは快適で簡単なように見えるかもしれませんが、そのようにインフォーマルであることは本当により快適でしょうか。この問題をもう少し考えてみましょう。今日この禅堂に集っている人の中で、ある人達はフォーマルな服装をしています。またある人達は比較的インフォーマルないでたちであります。ある程度のインフォーマルな服装は差し支えありません。ある一定の状況のもとでそれが許される限りは、そのような服装でもかまいません。わたしは禅堂では坐禅用の着物や袴でなくても長袖、長ズボンを着用していれば気にしません。しかし夏の暑い時など、半ズボンで坐れば、快適だと思うかもしれません。逆のことも言えます。もし着飾りすぎて礼服などで坐禅を組めばこれもおかしいでしょう。ある一定の「かた」や「作法」に従うことは、私たちがカジュアルになりすぎる傾向を治してくれるのです。また自分勝

手に何でも省略してしまうことは集団の調和を乱してしまいます。坐禅堂においては、一人一人が調和を重んじなくてはいけません。それゆえその場その場の「作法」があらかじめ決められているのです。各々の状況は、ある一定のやり方で規制されています。そのようなやり方にしたがうことがセレモニーの意味であり、ひいては健康になるための最善の方法なのです。

私はここまで特に個人の行動の重要性を強調してきました。しかし個人的な行動も、集団的な行動もまた同じだと思っています。何故なら社会、国家、世界といった集団もまた私たち一人一人が基礎となっているからです。このような認識の上に一人一人が儀式的にその場をわきまえて物事を行うことによって、自己中心的な考えを避け一つに調和を保つことができるのです。

ところで冒頭でお話した癒しについて興味深

い点があります。例えば、病は不調の症状でありますが、それは心や感情であったり、身体的なものであったりするわけです。いずれにせよ、私たちは儀式的に調和のとれた生活をするにいたるまでは病んでいるのです。もちろん儀式的な生活を営んでいても病気になることはあります。それでは私たちはどのように自分自身を整えて行けばよいのでしょうか。心と体、そして自分と周囲の調和に注意を払い、「かた」や「作法」に則って儀式的に物事を行う努力が必要なのです。このように正しい方法で生活を営むことによって病は避けることができるのです。もしそれを実行しなければ様々な問題を招く結果になってしまうのです。

私たちは「仏道」、文字通り仏の教えを修行しています。道元禅師は「仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするるなり。」とお示しになられています。それでは自分自身を忘れてしまったら一体どうなるのでしょう。仏道があなた自身の生活を明らかにしてくれるのです。それが儀式の目的なのです。道元禅師はさらに続けて「自己をわするるというは、万法に證せらるるなり。」とおっしゃっておられます。万法とは朝起きてから夜床につくまでの立ち居振る舞いにおける「かた」、「作法」であります。つまりその「かた」、「作法」にしたがって精進することが万法に證せられることであり、それが悟りそのものなのです。

それでは一体誰が気ままで不規則な生活を創り出すのでしょう。〝私〟という我がそうさせるのです。「セレモニー」、儀式は問題の元となる自己中心主義を避けるための「かた」、「作法」に他ならないのです。自己中心的な生活は、他人との間に問題を生じさせるだけでなく、自分自身にとっても問題となるのです。普通私たちはこの意味で「儀式」という言葉を理解してい

ません。しかしこの定義はあなたたちのユダヤ・キリスト文化の伝統に則っているのです。あなたたちの伝統文化から生まれた智慧において、生活を律する方法を「儀式」として受け継いでいるのです。

私が話を始める前、私たちは三度お拝をしました。お拝は仏教の伝統では重要な行為です。インドでは九種類の異なった礼拝（らいはい）の作法があります。その中で最も丁寧で、うやうやしいお拝を私たちは行っています。両肘、両膝そしてひたいをも地面に着けます。インドやチベットでは、ある人たちはお拝をするとき体を投げ出し地面にうつ伏せになります。これは完全な我や自己の不在を意味します。完全に生の法則に従順になるのです。このお拝の仕方が最も丁寧な作法であります。どのようにしてあなたはあなた自身と、また同様に全てのものと同体になることができるのでしょうか。まさにこのお拝が、自己を忘れ悟りにいたるお拝なのです。

同じことが顔を洗ったり、歯を磨いたりすることに言えるのです。この中のいく人かは道元禅師の著された『正法眼蔵』の「洗面」の巻を読んだことがあるかもしれません。顔を洗うことは正法眼蔵そのものに他なりません。顔を洗うことはこの上もないことなのです。道元禅師はさらにトイレでの作法、お尻の拭き方まで書いておられます（笑）。道元禅師は極端に儀式的な作法を細部にわたってお示しになっておられます。私たちがこれを読むと大変ばかげているように感じますが、道元禅師は真面目に語っておられます。そのようなやり方が悟りの体現に他ならないのです。生きることそのものなのです。日本ではもちろん私も含めて道元禅師の教えを如実に行っている人はたぶん誰もいないでしょうが。またあなた方が英訳を読んだとき、どう反応してよいのか分からないでしょう。た

だたんに驚きを越えているといった感じでしょうか。（笑）。しかし別の角度からよく看てみると、儀式的に行うことで、自分自身を秩序だたせていることが分かります。もし私たちが少しでも好き嫌いの考えがあるとこのように儀式的に行うことができません。言い換えると、そのような儀式的行為そのものが特効薬となるのです。不幸にして、この薬は強すぎるため多くの人には適さないかもしれませんが。

私たちは坐禅を修行しています。真に坐禅を行ずれば、全てはまかなわれるのです。そのことが儀式なのです。何事においても注意深く生活することによって、一挙手一投足が秩序だった儀式になってくるのです。この行動はただ単にフォーマルに振る舞うといった手段のためではなく、健康、ひいては生命そのもののためなのです。私たちがこのような目的で生活を営むとき、癒しや癒されるといった考えはもはや必要がなくなるのです。悟りは秩序だったごく普通の生活のなかにあり、またそのように生きるよう自分自身を扱ってゆかなくてはいけません。それが今日お話ししたかった儀式についてなのです。

（一九九四年三月十二日　ロスアンゼルス禅センター坐禅会における提唱より）

翻訳に当たって

この法話は故前角老師がアメリカ人の集う禅センターにて自ら英語で提唱されたものです。

遠藤博因

後にロスアンゼルス禅センターの寺報“THE TEN DIRECTION”1994 vol.XV No.1 に掲載されまし

た。この日本語訳はそこからおこしたものであります。

私も横浜善光寺黒田住職のはからいにて、前角老師の禅センターに数年間お世話になりました。私の場合はすでに確立されたアメリカ禅をかいま見てきたのでありますが、四十数年前にロスアンゼルスに渡られた前角老師は、全く仏教の土壌すらない白人社会に禅仏教の種を蒔かれることから始められました。比較的歴史的伝統の浅く、カジュアルに振る舞う白人達に接して、一から正法を説かれ、十余名の法継者を残されたことは、計り知れないご苦労があったことと察しております。

曹洞宗の宗旨に「威儀即仏法、作法是宗旨」とあります。私が大学卒業後、日本の僧堂にて安居修行を始めたとき、古参和尚よりこと細かく進退や作法について指導を受け、時には頭ごなしに叱責されることもありました。その当時は学生生活でたるみきった体に、世間知らずということもあり、僧堂での修行がなかなか素直に受け止められず、不満に思えるときも多々あったように記憶しています。しかしながら道心をもって自ら修行に励むアメリカの参禅者と生活を共にし、「かた」や「作法」といったものがいかに修行を助けてくれるものであり、ひいては人生の安心（あんじん）へと導いてくれるものだと認識させられました。

私自身の英語力、また日本語力の不十分さゆえどれだけ前角老師の提唱を正確にお伝えできたか自信がありませんが、いまは亡き前角老師の法をこのようなかたちででも皆様に触れていただきたいという思いであります。

合掌

くらしの中で読む『正法眼蔵』

―面授の巻―　その六

小倉玄照

〈本文〉

かくのごとくの面授を尊重すべきなり。わづかに心跡を心田にあらはせるがごとくならん、かならずしも太尊貴生（たいそんきせい）なるべからず。換面に面受し、回頭に面授あらんは、面皮厚キコト三寸なるべし、面皮薄キコト一丈なるべし。すなはちの面皮、それ諸仏大円鏡なるべし。大円鑑を面皮とせるがゆゑに、内外無瑕翳なり。大円鑑の大円鑑を面授しきたれるなり。

まのあたり釈迦牟尼仏をみたてまつる正法を正伝しきたれるは、釈迦牟尼仏よりも親曽なり、眼尖より前後三三の釈迦牟尼仏を見出現せしむるなり。かるがゆゑに、釈迦牟尼仏をおもくしたてまつり、釈迦牟尼仏を恋慕したてまつらんは、この面授正伝をおもくし、尊崇し、難値難遇の敬重礼拝すべし。すなはち如来を礼拝したてまつるなり、如来に面授せられたてまつるなり。あらたに面授如来の正伝参学の宛然なるを拝見するは、自己なりとおもひきたりつる。自己なりとも、他己なりとも、愛惜すべきなり、護持すべきなり。

〈現代語私訳〉

このような面授を大切にすべきである。それは言ってみれば師の心のあとかたをわが心の上にほんのわずかにしるすようなものであろうか。かならずしもありがたくもったいぶったものではない。ちょいとうなづいて師の心を受けとめ、ふとふりむいて弟子に仏法の真髄を伝える――師と弟子がいのちを伝えあう面の皮のありようは不可思議で、厚いと思えば三寸、薄いと思えば一丈。つまるところその面の皮は、諸仏が大自然の摂理を余すところなく写す大きな円い鏡にすぎない。大きな円鏡を面の皮と考えれば、表面にも内面にも瑕もないし翳もない。（師と弟子の面授のありようは）大円鏡が大円鏡を目のあたりにして光を授けそれを受けるようなものである。

まのあたりに釈迦牟尼仏を見たてまつることによって代々その正法を正しく伝えて来た眼前の師は、歴史上の釈迦牟尼仏よりも親しみ深い存在で、生きたまなざしからおりおりに数限りない釈迦牟尼仏をあらわして下さる。こういう次第であるから、釈迦牟尼仏を大切に重んじ、釈迦牟尼仏を慕いたてまつるには、何よりもこの面授による正伝を重んじ、尊び崇め、めったなことで出会えるものではないことと認識して（師を）丁重に礼拝すべきである。それはつまるところ如来を礼拝したてまつることである。それはまたとりもなおさず如来の面授を頂戴し奉ることでもある。ここにあらたに如来が如来に面授するという正伝のあり方は今も昔のままだということを参禅学道によって明らかにしてみれば、今のこの自己がはたして如来と言えるのだろうかと思われてくる。しかしながら自己が如来であると肯われようが肯われまいが、如来のいのちが今に伝えられているという確信を大切に護り持たねばならぬ。

がま・みみずも仏

師の生きざまを資（弟子）が素直に肯定できれば、面授も面受もそんなにむずかしいことではありません。ところが、人間には我見というものがありますからそれは想像以上に困難なことです。

『正法眼蔵随聞記』には、修行の要諦を語っている師の話を正しく受けとめるためには自分がよく承知していると思っている心をいったん放棄して、その師が語るところに随って漸次改めていくことだと示された後に、

「仮に仏というのは、自分の承知しているところでは、お顔だちが神秘で、神々しい光明が備わっており、尊い法を語り、衆生を救って下さる徳にみちた釈尊とか、阿弥陀様とかのことだとイメージしていても、指導の師が、仏というのはヒキガエルとミミズのことだと言ったら、素直にそれらを仏と信じて、ふだんから抱いているイメージを捨てるのである。その場合、このミミズの上に仏として神々しいお顔や光明、或いは仏のさまざまな尊いお徳を見出そうとするのは、これはやはり自分流の我見を捨て切っていないことになる。ただ、眼前にあるそのものをそのまま仏であると肯うことが肝要なのである。もしこのように指導の師の言葉に従って、先入観とか我見とかを捨てて改めていくと、ひとりでに自然の摂理に添うようになるものだ」（巻二）

と述べておられます。釈尊の時代から遠ざかるにつれて、人間は我見が強くなり、自分の見識をふりまわして、師の見解を否定したりすることが多くなるから困るとも嘆いておられます。仏道がだんだん衰微して行く傾向があるように思えるのも、それが原因だ――とも仰せです。

釈尊もまた、仏法を説く時に常にその点を懸

念しておられました。いわゆる「初転法輪」の故事は、そのことをよく示しています。

釈尊は、悟りを開かれる前、過酷な苦行に身を任せている時期がありました。その頃、五人の修行仲間がいました。釈尊は、修行のむなしさを悟ってそれを捨てました。断食等で極度に痩せた身では真実の人間の生き方を体得するのは不可能ではないか、と疑念を抱かれたのです。そして、滋養物として乳糜、つまり今時のヨーグルトを混ぜた粥を食べられました。すると、五人の修行仲間は「彼はぜいたくである。修行にいそしむことをやめて贅沢に流れてしまった」と非難しました。もちろん、釈尊とたもとを分ち、離れて行きました。

釈尊は、さとりを開かれました。そこで、そのすばらしさを語って聞かせる最初の人にこの五人の仲間を選びました。『阿含経』には、次のように記しています。

「かくしてわたしはあちこちと遊行し、ベナレスの仙人が集まり住んでいる鹿の国(鹿野国)に五人の比丘たちの群れをたずねた。すると、かれら五人の比丘たちは、はるかにわたしが近づいてくる姿を見た。それを見て互いに静止しあうのだった。

〈友よ、あそこに沙門ゴータマがこちらへ向かってやってくる。かれは贅沢で、努力することを怠り、奢侈に走った。だからこちらから挨拶をしたり、出迎えたりする必要はない。ゴータマの衣や鉢を受け取ってはならないが、かれの坐る場所だけは用意しておこう〉と。」

ところが、かつての五人の修行仲間たちはこの約束を守ることが出来ませんでした。釈尊が近づいてこられると、その風格に気圧(けお)されてしまって、ある者は衣鉢を受け取り、ある者は洗足の水を用意しました。最高の礼をもって迎え、〈友よ〉と呼びかけました。その時、釈尊は〈友

よ〉という呼びかけを拒否されました。正しく覚った者に対しては、謙虚な姿勢を持たなければならない。〔法を聞く〕耳を用意しなさい、と注意されました。

師の説くところを正しく受けとめるためには、まず師の前に謙虚な姿勢をとる必要があるという釈尊の厳しい態度は、実に重要なことなのです。

禅門では、修行の道場（叢林）に入門するとき、我見を折って素直な気持ちで指導者の指導が受入れられるようにということを第一番に考慮した受入れ方をします。

そのために、臨済宗の道場では「庭詰め」という行をするようです。到着した時の服装のまま玄関の式台の上に腰かけ、廊下に手をついて入門を乞うのです。いささかいびつな姿勢ですが、朝から晩課の四時頃まで、二日間ばかり、殆どみじろぎもせずにそのかたちを保つのです。相当な難行です。

曹洞宗では、庭詰めはありません。入門を乞う板を打てば、すぐに到着所に案内してくれます。しかし、そこで旅装を解いて、荷物を整えて壁際に安置すると、それに向って正座をさせられます。入門の許可が出るまで、正座して待つのです。およそ一日。態度に謙虚さや真剣さが見えなければ即刻追い出されてしまいますから必死の一日です。

庭詰めや到着所での入門を乞う行を通過すると、次は旦過寮。入門者の我見の角を折り、僧堂生活を送るに必要な基礎教育を施す役割を担った寮である。外から丸見えの部屋に、壁に向って日がな一日坐禅をして生活します。大学まで卒えて、いっぱしの社会人として通用するはずであった男が、ここに身を投じてみると、着物は身につかないし、箸一本の扱いすらが教わっても教わってもうまく出来ません。一所懸命に、

必死の思いでやっているはずの行動が、古参雲水のきびきびした行動の前には目だるく見えてしまうのです。頭ごなしにどやされるといささかむっとすることも多いのですが、からだのこなしが実際になっていないのだから仕方がありません。やみくもに叱られているうちに、何をいわれても「ハイ」と言わざるを得ないような心境になって来ます。我見の角が折れたのが指導者によって認められる頃、やっと旦過寮から解放されて、一人前の雲水として修行生活を始めることが許されます。

昔も今も、修行生活の第一歩は弟子が師に心服し、日常のどんなささいなことであっても師の指導に従って師のやり方をまねることから始まるのです。

くせものは太尊貴生

釈尊は偉大なる存在です。それゆえに、眼前の師が釈尊のいのちを伝えているといえばその身心にありがたさがみちあふれているはずだと考えがちです。ところが、釈尊のいのちを伝えた眼前のわが師にそんな尊くありがたいイメージを抱いたりしてはいけないというのです。畑の草を取ったり、採集した菜っぱを小川で洗ったり、或いは洗濯物を干したり、という日常の茶飯事をさりげなくこなしている師の姿こそが釈尊のいのちを伝えるありようなのです。淡々と地水火風（四大）と親しみつつ生活する師の姿を非凡なことに思え、それに手を合わせるような心境になった時、師と資の面授が成就すると申してもよいでしょう。

師の顔に後光がさしていたりすれば、誰でもが手を合わせることが出来ます。しかし、平凡な日常の些事を淡々とこなす師を拝み、それを真似することは、想像以上にむずかしいものです。

その人柄などに心酔して自ら志願して弟子入りした場合は、ことは比較的簡単です。このごろ一般寺院の師資の関係は、殆どがそうなのですが、父と子がそのまま師と弟子という間柄になると話がむずかしくなります。資の我見を叩きのめすわけにもいかず、資を簡単に放逐してしまうことも出来ないのが、血縁のしがらみというものなのです。資がいわゆる「甘え」を捨てきれずに苦しむのもそれが原因しています。

道元禅師が、

「おほよそ無上菩薩は、出家受戒のとき満足するなり、出家の日にあらざれば成満せず」(『正法眼蔵』出家)

と、出家の重要さを強調されるのも、血縁のしがらみが師と資の面授受面を妨げることを強く懸念しておられたからなのです。

しかし、現代の宗門寺院の師資の関係は、父と子、つまり血肉相続が殆どです。出家によって師資となるのは例外と言ってもよいような状況なのです。面授受面が相当に困難なことになっていると言ってもよいでしょう。

しかし、その困難を克服しなければ、宗門の命脈は絶えてしまいます。ではどうすればよいか。

釈尊の実子ラゴラ尊者は、出家した釈尊を慕って王家から自らも出家しました。最初から釈尊の偉大さに帰依しての出家ですから、血縁のしがらみを克服しやすいと言えましょう。ラゴラ尊者の方から父親そのものを太尊貴生と信じて帰依しているのですから、例えば東司(便所)の作法すらをそのまま素直に受容できます。

しかし、現代の寺院の父子の関係は、恩愛にどっぷりつかったままの関係の中で「出家受戒」の儀式を行ずるのですから血縁のしがらみが断ち切れていません。

こういう場合にはどうすればよいか。それを克服するキイワードは、「太尊貴生」です。とか

くすると、師の側が「太尊貴生」を尊重しがちになる傾向があるのでそれに気をつけなければならないのです。子が乳幼児の時から平凡に徹した、平常の生活を大切にする生き方をしなければならないと申した方がわかりやすいかもしれません。

名聞利養の誘惑の多い現代社会で、そういう生き方は相当に困難なことです。けれどもそれ以外に血縁のしがらみの中で面授面受を成就する生き方はないと申してよいでしょう。

横浜善光寺留学僧
具足戒授与式

タイ国・ワットパクナム

福田智昭師　　黒田博志師　　吉田日光師

授戒にのぞむ三僧

黄衣を受ける得度者

具足戒授与の儀式

新比丘に供養を捧げる人びと

食堂で祝膳をいただく

式典に向かう行列

ワット・パクナムの僧侶

パクナム住職ロンポーを囲んで記念撮影

儀式の前にバンコク市内にて

タイ国の上座部仏教について

――ウパサンパダー（具足戒授与）の儀式に随喜して――

駒澤大学講師　福田孝雄

タイ国有数の寺院ワット・パクナムのウポーサタ（布薩堂）の静まりかえった空間に戒師（和尚〈ウパッジャーヤ〉）の玲瓏にして凛とした音声が響きわたり、その前に謹んでうずくまる三人の日本の若き僧達の後姿が、宗教的感動に、僅かながらうち震えているように見える。

三人には、パーリ語の名が法名として与えられ、その名によって銘々が呼ばれ、戒師が彼等を取り囲むように両側に坐している僧伽（サンガ）に向って、今まさに行われようとしているウパサンパダーの儀式の執行を告示しているのである。

この三人とは、横浜善光寺第十五回留学僧の吉田日光師（日蓮宗。パーリ語法名はサッダー・マンガラ。サッダーとは信仰の、マンガラは吉祥の意味である）、善光寺黒田老師の令息博志さん（パーリ語法名はウィリヤ・マンガラ。ウィリヤは努力精進の意味）、そして私事ながら私の長男智昭（パーリ語法名はサティ・マンガラ。サティとは正念の意味）である。

この感動的な釈尊の仏教教団以来の伝統あるウパサンパダーの儀式は、かつて若き日の善光寺住職黒田武志老師も、同じく体験し、その後の黒田老師の国際的仏教者としての活躍の原点となった極めて重要な意味をもっている。

今繰り広げられる現前の厳粛な儀式に黒田老師はかつての自らの体験を重ね合わせ、言葉に言い現わせない感動が、心身に満ち満ちているに違いない。傍らに坐する私の身体にもそれがひしひしと伝わってくるのを感じるのである。

善光寺派遣の三人の僧が、同時にウパサンパダーの儀式を盛大に執行されるようなことはおそらく他の日本仏教の寺院の一寺の行事として実現することは殆ど不可能なことだろうと思う。

今回のタイ国ワット・パクナムの訪問の旅は、善光寺黒田老師の国際仏教界に屹立する大山の如き存在を改めて認識するに至るものだったと感じている。

ウパサンパダーの儀式の実況的詳細なレポートは東郷氏に委ねることとし、以下簡略ながらタイ国上座部の仏教を管見することにしたい。

一口に南方仏教と言っても、地域的にはインドから東南アジア諸国全域に広く分布し根をおろしているが、その契機となったのは、インドのアソーカ王（〈梵〉アショーカ。阿育王と音写。即位はB・C・二六八年）のシリア、エジプト、マケドニア、キレーネー、エペイロス、スリランカなど諸地域に使節を派遣したことによる。この南アジア、東南アジアに広く定着した仏教はテーラヴァーダ（上座部・長老派）と称し、伝持する経典類はパーリ語聖典であり、教理的にも地域差は殆どないと言える。つまりスリランカ、ミャンマー、タイ国、ラオス、カンボジアの諸国は、このテーラヴァーダ仏教の精神を基盤とし、強いつながりをもっていると言って

もよい。

タイ国の場合、中国系の大衆仏教を除いて、宗教総人口の九〇％以上仏教徒である。一九六四年の公式発表では二三、三七八の寺院数と一五一、五六〇人比丘（男性僧）と八七、〇一〇人の沙弥（僧の候補者）、一、九四七人の比丘尼（女性僧）が存在していると言う。信教の自由は保障されているが国王はすべての宗教の保護者であり、国王自らが、仏教徒でなければならないと憲法に明記されている。

タイ国の近代化に大きく貢献したモンクート王子は父王のラマ三世が一八五一年に逝去するや、二十七年間の僧院生活から黄衣を脱いで王座に就いてラマ四世となった。そして十七年間王位にあって、タイ国近代化の基礎を築き、列強の植民地化の危機を回避するために重要な役割を果したことは史実に詳しく記録されている。現国王も自らワット・ボヴォニベーで出家生活を体験されている。

タイ国の仏教はマハー・ニカーイとタンマユット・ニカーイの二派に分れ、大部分の寺院はマハー・ニカーイに属している。この両派ももちろんテーラヴァーダの仏教であるから、戒律を主とする仏教であり、教理的な差違はなく、多少の習慣上の相違のみであると言う。しかしマハー・ニカーイは自由派であり、タンマユット・ニカーイの方は厳粛派である。国王は教団の長として、サンガラージャ（サンガの王）を任命し、このサンガラージャとソムデットの称号をもつ僧とサンガラージャが任命する長老から構成される長老会議が仏教教団の統一と強力な組織を構成している。

仏教教団は手厚く保護を受けているが、政治的な事柄には関与しない。スリランカやミャンマーの教団が政治活動をするのに対して、タイ国の仏教教団が出世間的立場を維持し、必要に

応じて政府に意見を具申する程度にとどめ、政治活動をせず政治にタッチしないことがかえって教団の平穏が維持され、政治家を始め社会的指導層の尊敬を得ることになるのだろう。

タイの民衆は、元来宗教心が篤く、精霊（ピー）の信仰を有する。教育の普及や近代化によってピー信仰の形態や内容にも多少の変化がもたらされたとは言っても深く民衆の心に根ざし、信念として定着したものは簡単に消滅はしないだろう。都会の街角や近代的なビル街の空地には至る所にピーの祠が存在している。精神生活の体系の中で純粋な上座部を頂点とし、底辺をピーの信仰が支える形でパンテオンが構成されているのである。

またタイ国の仏教では、出家することも還俗することも自由である。仏教の本来の主旨に立ってみれば、出家することも還俗することも、あくまで本人の自由意志によるのであるから、他による強制の必要はないと言える。出家して僧院生活で修行を体験し、そして還俗して世俗的社会生活において、自ら会得した仏教精神を実践することも意義あることだとする考えである。つまり国王も出家生活を体験されるのだから、一般人もある一定期間修養し、人格を陶冶することが必要だとする立場であり、そのための機関として寺院が重要な役割を負っているのである。

社会の指導的立場にある人が僧院での修養を積み、世俗的生活の中で、在家仏教者として仏教精神を実践することにより、社会の浄化や社会の改革向上に資することができれば、別の視点から仏教寺院の存在が評価されることだろうと思う。

タイ国の仏教寺院のあり方が仏教の近代化の一つの方向性を示していると言ってもよいのではないだろうか。

仏のこころ

東郷敏

水には魚泳ぎ　田んぼには稲穂みのる。タイの自然、豊穣な国土をうたった詩である。

七月十日。横浜善光寺派遣留学僧三名がタイ国、ワットパクナムで、「雨安居カウ・パンサー」に得度する。私はこの得度式に参列させていただいた。これまで一度も得度式を見たことがなかった。ところが私に親しい在家からひとりの青年が仏弟子となる。それまで出家する、得度したなどよく耳にする。しかし、そのなんたるかはよく知らない。この正月善光寺ではじめて見る得度式。刻々変る出家者の僧衣と表情に大きな感動を覚え、以来宗教観、信仰心というものが、私の中で変化していることを感じている。

お釈迦さまは、人は生まれることも、老いることも、病むことも、死ぬこともすべては苦。またその間に生ずる嘆き、苦しみ、憂い、悲しみ、会うも、別れるもすべては苦。みじかい「いのち」の中にはまことに思いまかせぬことばかり。これこそが生きている現実の相。万人共通の悩みであり、苦だと謂う。その苦から逃れる

ためには、どうするか、そのとらわれた境遇と病んだ心の原因を尋ね、それらを棄捨し放棄し解脱解放する道しるべ、これが出家であり、出家至上主義を解く上座仏教の真髄。一方、大乗仏教は、当然にして、なにびとも、出家せず究極のさとりに達する道があると主張する。いわゆる在家のままで救われる。この違いが、行や戒律、布施活動に、大きな違いを見せる。

上座仏教は『己こそが　おのれのよるべ』と示し、「自分を救済するものは、自分をおいてない」と教える。これを信じるもののみが佛の助けを受ける資格があるという。万物を創造し、人間の運命を支配する神は不在であるとした。これは仏教以外の宗教とは根本的に異なる。どこまでも他にあらず、自ら救うものは自らしかない、そのためにはまず己をととのえることからはじめる。たゆまず自己を錬磨し、戒律を守ることに道があり。

まことの救いがあると教義は実に明快で徹底した論理と思想をもって教える。これこそ仏陀の教えの基本であり、原点といわれている。

「出家」とは俗世間を捨て仏道修行に入ること。剃髪の式をあげ、僧籍に入ること。「得度」とは、仏道の教化を受け、生死の苦海を渡り、涅槃の彼岸に渡ること（『広辞苑』）と示されている。説明は簡単だが実際は、大変なこと。俗世間を捨てる、生死の苦海を求めて渡るなど勇気以前の決心と心構えが必要なことは言うまでもない。

黒田方丈から上座仏教得度式への案内を受けたとき、なぜまたタイにまで行って得度しなければならないのか、夫々立派な大乗の僧籍をもち、或いはすでに住職にありながら、私には理解しにくい。いったい日本の仏教ではダメなのか。この世に日本以上の教えがあるのか、大乗という最高の教義をもちながら、上座仏教（小

乗仏教）に得度し出家する意味なり、価値があるのかわからずにいた。

黒田方丈の原点

ふり返って黒田方丈、雲水としての修行時代に、大本山總持寺や永平寺に籠もりなんどか荒行に挑む。そして出たり入ったり、その間全国一周托鉢行脚する。それでも求めるものに当らない。摑めない。やがて雲水仲間に呼びかけ、仏陀の原点に立つしかないと、その足でインド仏蹟を訪ね歩く。しかしこの原点で仏陀を探すことは安易ではなかった。すでにインドの仏教は過去のものでしかない。いまは信者に会うことさえむづかしい。

そのはず、五％にも満たない仏教信者。やがてインドをあとにする、そして上座仏教のタイに辿り着く。方丈はいう、今日わが身あるは、上座仏教に出家し得度したおかげ、あの難行苦行がなかったら今の黒田武志はないと言いきっている。戒律二二七を授けられ、行に勤しむなかに自己を発見、自らを救うものは、自らでしかないことを悟る。思いもしなかった僧伽での叢林生活、極貧、とまどいの環境の中でクロダ雲水に一大転換をもたらす。なにごとも物事の根本に力を尽くすのでなければとさらに行三昧に没頭する。学んで厭わざる雲水にいつしか「禅の精神こそ人の生きる道、世界中の人々に釈尊の教えを伝え、伝導することが自らの使命であり働き、これこそ人類の、安心、平和、幸福につながる」と小乗の「行」で大乗の極意を得る。行じること一年半、確信をもった雲水、僧伽生活に区切りをつける。さらに遠く海を越え、アメリカ本土に、そして白人の世界に飛びこむ、兄前角博雄師のもと、禅三昧、開教師として過す。僅か三年の間、アジア大陸から、アメリカ大陸へと駆けぬける「あの道のりは偶然ではな

い。お釈迦さまに導かれた」と述懐する。パクナムでの瞑想と教義は大乗仏教の再認識と再発見。そして真の釈尊の教えに近づいたと実感する。自らに授かった天からの徳命、この徳操を信じ、黒田武志は終極の目的に向い一生一業の成就へと歩き続ける。常にグローバリズムの視野に立つ、歩く道はグローバル。こんなところがグローバリスト・黒田武志といわれる所以である。

方丈はかねがね「私が今日、世界に眼を開く仏教徒になれた原点はワットパクナム」だと言うて憚らない。また第二の故里だともいう。このところ、現地での体験談のなかから、拾ってのちいま少しつっ込んでみる。でなければ、なぜ、小乗の「行」なのかがわからない。

方丈は戒律生活を通して、人間自己をしっかりつかみとる機会にめぐまれなければ、自己の完成も、ましてや自らを教育するすべもない。人間自己を見失ったら、主体性もなく、自主性もなくなる、いつだって肝心なのは、自分自身のことだ。これが修行の心得だという。成程聞いていて解る。しかしまたわかりにくくもある。これは「行」したものと、しない者の相違だろう。今日、禅を通して果たす、仏教国際交流の実績と成果を見るとき、たかが一寺一住職のなせる業ではない。ただひたすら、人を育てる、人材を育成するを悲願とする方丈のもと、出家得度者もあとをたたない。信者といい、檀信徒と得度者の数とその足跡をみるとき、なんとも敬服し、承服せざるを得ない。

善光寺は連日大概三、四十名の方々が勤んでいる忙しい寺。さて本題に、私はその方に申し上げた。「そのブレーンを育てたのは誰ですか、そのブレーンを動かしているのは誰ですか」と。そのときその方は、アッと云われただけで、全く反論なさらず仕舞いでした。どうしたのでしょう。人は時として間違っていることを本当と思

い、誤った場合がある。私も四六時中ある。ただこの間違いに、気づかなかった場合、とり返しのつかないことになる。

これには後日談がある。方丈に「こんな空気があります、どうぞ承知しておいて下さい」と当然にして誰がなどとは言っていない。方丈は「その通り、私の力ではありません。みなさんの御力添えあってのこと、私にできることはあまりに小さく、限りがあります。みなさんの御蔭です」と。「トーゴさん言うてくれる人はありがたい、言うてくれる人が周囲にいなくなったら人間はおしまい。ワタクシにも間違いはあります。否いつも間違っているかもわかりません。寺といえど、企業もしかり、衆知あってこそ成り立つもの、上意下達も大事です。しかしそれより大事なことは、下意の上達です。みなさんの意見を吸い上げ、いかに汲みとるか、これは上に立つものの器です」。トーゴさん、「すべては仏さまからのおあずかりもの、常に人は正しい、明日のことは、仏さまにおまかせすればいいのだからネ…」これは私の了見、見識のレベルの問題だと感じた。私があの方に申し上げたことは必らずしも正しくなかった。私の正義感からでたものであり、方丈の心ではなかった、と反省する。やはり方丈とは次元が違うと思った。

私の仏教も、黒田方丈に学び、教えていただく範囲、それでもいまだ在家の得度さえ至っていない。俗界に未練たらたらそれが決意を促さない。従って口先だけの人間、仏教のなにものかも承知せず、受けうりで書いている。ご覧いただく方は、私よりあらゆる面で、また立場上、仏法に関し広く深い知識、又経験をお持ちの方ばかり。解ったつもりで書くは、僭越至極。実際は解らないことだらけ、疑問をブッツケては、方丈にも叱られたり、怒鳴られる。

しかしやっぱり思う。いったい日本の仏教は、そして僧侶は、「人を救える」のかと。仏教の基本は「弱者へのおもいやり」、これを忘れては、仏教は成りたたない。日々刻々大激変、激動する世界、昨今、人々のもてる苦悩に対し、いったい「真の人心救済」ができるのか、そのためには、まず自らを救う必要がある。自らを救う以前に、その知恵を得るためその働きがなければならない。その働きを人々に与えるだけの、力なり、価値をもつ宗教なのか、僧界なのか。それとも、僧侶なのか。仏教は釈迦誕生以来、今日までの苦悩を解消しただけの、単なる宗教にすぎなかったのではないかなどとも、昨今宗教的意義の希薄となった仏教を感知し、単に儀礼的習慣や儀式のみにとらわれ、在家や信者の精神的規範にはなり得ていないのではないかと、そんな気がしてならない。僧侶は、単なる葬儀の経読み屋、寺は寺たらず、僧は僧たりえないのではないか。これでは新しい時代の新しい世代、新しい悩みには対応できず、世代の仏教離れはさらに進むのではないかと危惧する。

大乗とは、積極的に働きかけ、大きく広く働くのが、名称の由来のはず。指導者たちの待ちの姿勢に苛立つ。なぜ眠っておいでなのか不思議でならない。黒田方丈のいのちがけの活動や行をみるとき、いったい大乗集団は、本当に仏道を行じてゆく決意があるのか、心配になってくる。しかし、中には衣の色を気にせず、周囲にとらわれず、すごく立派で敬虔な素晴らしい、指導者の方がおいでのことも承知している。

二五〇〇年前にはなかった苦悩や諸問題が山積みしている現在、この変化に、対応できるのか、できないのかやはり知りたいのです。次元が違うといわれればその通り、このことは、仏教や宗教には関係ないことではあります。しかしなにをするのでも「人がする」人の心、ここ

ろの在り方にすべてに帰すると思うのです。「心の在り方」を教えたのは、釈尊だと私は思っている。

その釈尊の教えを伝え導くのは、いったい誰なのか。信者はいつでも期待し待っているのです。

タイ国の社会

さて私は再び（昨年十一月にワットパクナムとブッダモンを訪問した）タイに行った。しかしいまだこの国の上座仏教を知らないでいる。黒田方丈に一大変革をもたらし、第二の郷里といわしめた上座仏教。物の本によると、タイ国は世界で最も仏教を信奉している国、そしてその伝統を頑に守っている国だと示してある。実に九五％以上の信者をもつ。ということは限りなく一〇〇％に近いということになる。信仰の自由を認めているにかかわらずタイ国では、なぜこれ程までに仏教なのか、歴史や文献をみる限り、或る程度納得はゆく、しかし充分ではない。周囲は、四つの国、四つの国境を持っている。日本には地つづきの国境がない。なくても決して安泰ではない海の底、制空権は犯され続けている。だから自衛のための準備と体制は怠らない。

タイは実に危い。他国にいつなんどき侵略され、攻め入られても不思議はない。そんな状況下、何百年もアジアで唯一侵略されず、侵略しない。そして植民地になった歴史を持たない国。さらに宗教や民族間の争いもない。二十一種族の多民族国家でありながら、建国以来、一宗一派が存続している事実は驚異でしかない。人々が仏教に救われていなければ、変化したはずである。

日本の仏教だって、六世紀に渡来以来、その精神文化の拠り処であり、原点になっている。

聖徳太子により、仏教が日本に受け入れられ普及。日本最古の憲法十七ケ条も、仏教と儒教の教えの中からつくられていることはすでに承知の通り。以後、奈良仏教時代を経て、伝教大師、弘法大師により広く普及、鎌倉時代になり、さらに一般大衆に普及。空海、最澄、日蓮、法然、親鸞、栄栗西、道元など、仏教の指導者たちが、あい教え、あい学び、あい導きあって綱の如く結ばれ、あたかも壮大な曼陀羅絵図を描くように仏の世界を広めて来た。その影響は大きく日本の大乗仏教も否応が上にも、普及発展、揺るぎ無いものとなった現在、数字で見ることはできない。けれども依然として潜在的仏教徒は決して少なくはない。これには異議があるかもしれないが、おそらくタイ国と数値的には、変らないのではないかと思ったりもする。盆、暮、正月の大移動、神社、仏閣参りは、国民的行事、これに並ぶ、宗教、教団は他にない。しかしこの象徴的仏教でありながら、日本の中で、しっかりとした信仰の対象としてもはや存在しない、しないのに大多数がどちらかといえば、仏教とこたえる不思議。

タイ国の社会の仕組みは、パンフレット程度でみるとき、国民は王室を尊重、崇拝し、国は仏教を保護している。この状況、程度がわからないまでも仏教が発展、存続してきた土壌はわかるような気がする。またタイの憲法にも「国王は神聖にして、侵すべからず」「国王は仏教を信奉し、かつ宗教の擁護者である」と規定されていることから、仏教と国王、国民と社会の在り方が伺える。これはタイ国旗にも、それがよく表われている。

国旗はラーマ六世（現九世）約一〇〇年前の制定によるもの、横に中央の青ライン（王制）を白ライン（仏教）が囲む、さらに両サイドに赤ライン（国と仏教を守るために、流す国民の

団結と血を意味したもの）で囲む三色旗。いかにも、タイ国家の在り方を象徴している。

国民の大多数、ほぼ九〇％は農業に従事している大農業国、それだけに自然との関わりは大きい、天地自然の恩恵により、得られる農作物、収穫はすべてお天とうさま次第。

一日一日が平穏無事に過ぎることのみに価値をもつ。雨に降られ、モンスーンに吹かれても祈るしかない。凶作に見舞われても、「マイ・ペン・ライ」どうにかなるさ、と笑うしかない。

子供たちには、義務教育課程で、仏教道徳が必修になっている。仏教の根本思想である、善因善果（タム・ディ・ダイ・ディー）の、基本理念や、功徳する人（ミー・ブン）は必ず報われ、幸いを得ると、教える。この思想は、タイの隅々まで浸透しており、人間が社会性をもつ様になった時、「他人の為になる」というこの教えこそはいづれ国にあっても非常に大切な徳目だと思う。また功徳の中の最大は寺院や僧侶に布施をすることだと教え、それを心から信奉する国民。その期待に僧界や僧侶、どうしても応える必要がある。崇拝され、尊敬される僧侶の責務はさらに大きくこれに応えるためには修行に徹し、学びを深くし、そして「人を教え、導く」だけの力をつけてゆく、その力こそ最大の説得力であり、益々僧位を高くする。どこの寺院を訪ねても、たくさんの比丘が、数多くの信者に対し、マンツーマンで指導している様態を目にする。これはやはりすごいことだと思う。

仮に四〇万の僧侶が、マンツーマンで指導に当たるとする、僅か二ケ月間で国民全員を導ける体制にある。例えばの話だから、そんなことはないがそれ程人々と僧侶の関係は不可分であり、親しいものだと言いたかった。四〇万人は、雨期を基準とした数である。一定しているわけではない。それでも、男子六〇名に一人の割合

で、比丘がいて、比丘一人を六〇名の男子が一日二度、朝、昼の施食をしていることになる。単純計算しても一日八十万食大乗仏教とは比べようがない。依然として出家者は、予備軍を含め、増える傾向にあっても、減ることはないという。これはタイ独特の社会現象。一方比丘の大半は、働き盛りの青年たち、この潜在労働力が、全く生産活動に従事しない事情は、どう見ても、国の成長、発展に支障をきたすのではないかと心配もする。

しかしそんなことよりも、仏心尊い人づくり、心づくりが優先する国柄、いかなる犠牲を払っても、結果的に仏教を擁護する国の在り方、大乗のおかれた立場とは随分ちがうので一朝に理解できるものではない。タイ国は国の成長、発展は、いつの時代でも、マイ・ペン・ライ、ゆっくり、あわてずということなのだろう。

得度式

「出家」とは、字のごとく家から離れること、従って家を捨て、社会生活を放棄することになる。住む家がなければ生活も持続的に営むことができないばかりか、経済生活も当然にして維持できない。出家するということは、宗教的見地がなければ、恐ろしきこと、人間の常識から逸脱し、反社会的、反人間的としか受けとりようがない。どんなに美しく表現しようとも、全く生産活動を行わないわけだから、生きてゆくためには、日々の糧を、在家者（一般社会）から、得なければならない。これが善意の家出だから理解するとして出家イコール解脱（煩悩を脱して安らかになること）が出家者の終極の目的とするなら、煩い多く、せま苦しい家の中や、騒々しい生活環境から、離れることはいつの時代でも、必要なのかもしれない。ただ私ごとき

凡人には、どう考えても、出家者の常識は、まったく非常識としかうつらないから仕末がわるい。だからいまだに、出家も得度も叶わないでいる。

折角、神聖な「得度式」に臨んであらぬことを考えたり、否定的な思いを抱いては、罪が深い。またこれから純粋に出家得度しようとする青年たちには失礼というもの。私のこの得度式への参加は、黒田方丈より檀家総代の総会で決定し、十五周年記念の留学僧得度式、その記念写真家として、又、記録係として参加してほしいと依頼されたのである。

善光寺留学僧は十六年間に亘り、派遣をくり返している。既に一〇〇名以上に及んで派遣国も一八ケ国になる。その記念すべき第一回の派遣先は、ワットパクナム。そして今回また、三名の留学僧。一般公募により吉田日光師（福井県日蓮宗住職）いまひとり、黒田方丈の愛弟子・福田智昭師（ロス・禅センター開教師を勤め、さらに今回、上座仏教に）、方丈と全く逆コースを歩く国際派。いまひとり横浜善光寺正統継承者黒田博志師（方丈三男）。十五周年記念にふさわしい顔ぶれ。

歴史はまさに繰り返す、三十五年前、博志氏の父・方丈も上座仏教に学び、大いなる放棄をする、国を捨て、家を捨て、大乗を捨て、親兄弟を捨て、一切世俗の欲望を捨て去って一年半、方丈の述懐によれば二度と日本の土を踏むことはないとの決意もあったとか、いまその子が師であり、父の後を踏んで、出家得度する。兄弟弟子まで供って、これ迄、父より上座仏教の「行」については、そのきびしさや恐ろしさをイヤという程、聞かされて来たに違いない。父がやったことは、子はやらないというのが世の常なのに、父から強要されたか、或いは本人自ら求めたのか知りようもない、兄弟弟子智昭師も誘われて止むなしか、人のよさが仇になる二人なら

同時ということはあるまいどちらかが、骨を拾うだろう。いづれにしても生半可で臨める行ではない。原始仏教に限りなく近い上座仏教の修行環境はきびしい、食べることさえままならない。

学ぶ教典はパーリー語。二人の若者はいまどきのもやし人間、衛生環境の整った日本では、免疫性も乏しく、あらゆる感染症に抵抗力をもっていない。都会に育ったが運のつき、さらにはおまけに青春真ッ只中ときている。父のように雑草ではない。それだけに境遇に負けないで元気でとりくんで欲しいと願う。ウソから出たマコトの喩えもある。邪が出るかマコトがでるか。得度式の後見人は、日光師に善光寺総代。智昭師に父、福田教授。博志師に父、黒田方丈。これ以上の後見人はない、さらに土屋先生ご夫妻、山泉社長ご夫妻の参列者、あとは儀式を待つのみ。方丈以外の参加者は上座仏教の得度式を知らない。私もはじめてだが、方丈にご縁いただいて以来このとしまで、見ていなかった。先にも少しふれたがみ仏の引き合わせか、私の甥子が出家した、安名を大豊賢心、壮厳にして、真摯な儀式だったそれを目のあたりにして、仏弟子になることの尊さを知る。上座仏教とて原点は同じ、三十分位で終えるものと思っていた。しかし聞いて驚く。通常は六十分、通訳が入るから悠に九十分はかかるだろうとのこと。たとえ一日かかろうともそのために来たのだから。得度式までは、三時間の余裕、方丈の発案、折角パーリー語の権威者もおいでのこと、勉強会を開くことになる。まこと願ったり、叶ったり。

さて留学僧、この時点ではまだ会っていない。既に三名は、十日も前に到着寺院に籠もって、得度式の準備にこれ努めている。基本的な戒律（ビイナヤ）を学んでいるはずである。式では、教戒師との問答、パーリー語で答える。儀式と

いうより、入門試験。

やがて三名が現れる。方丈は顔を見るなり「どうだい元気そうだネ。パーリー語は覚えたかい。自信をもって得度式に臨めるかい」「ハイ、なんとか」「なんとかでは困るんだよ」「……」。

「もう十日、二百四十時間も過ごしているんだヨ」「……」。「どうだい、やめて帰るんだったら今なら間に合うぞ。入ったら後には引けないのだからネ」「……ハイ」どこまでも方丈は大乗僧侶らしく脅しているように見える。折角、父、母に会えたよろこびも束の間、それも吹っ飛んでしまった。途端に留学僧の顔が引きつっている。日光師は日蓮宗からの代表選手、これまで大概の難行苦行に堪えてきた戦士。それでも心なしか、色が失せている。いまさら弱音も吐けない。暗誦する段階で戒律のなんたるかもおよそ承知している。二二七条の戒律は、息をするだけでも、吸うていいのか、吐いていいのか、戸惑う程の細部に亘る。親子の再会も、わずか五分、すでに師と弟子でしかなかった。そばにいて胸の詰る思いがする。慰め、労わることばも出せないでいる。頭も青く剃り落とし眉毛もない、目だけが異様に輝く。お歯黒があれば、平安時代の堤中納言。

両先生の講義は、別棟、およそ三〇〇畳もあろうか、机と椅子が数百も並べてある。

道場か精舎か、すでに先客あり。群れをなして、寝そべったり、歩き回っている犬と猫。

その隅っこを借用、とりあえず円卓式に囲む。坐りながらもう始まっている。司会もなければ、はじめる合図もない。方丈は「得度行・解脱」と題して、話しはじめている。

モトモト私は、生まれながら寺の子。だからといって経など読む気にはならない。家にいても、自分の家なのか、人の家なのかわからない、

いつでも他人がいる自分の家。

父白純大和尚に、僧侶になれと進められた覚えはない。兄たちはみな立派、生まれながらの僧侶、父の意志を読んで、せっせと歩いていく、都合七人の男兄弟。私はその五男坊、置かれている状況は、どうでもいいポジション。

特に期待されてもいない僧侶になるなど考えてもいなかった。しかし環境的影響は大きく、門前の小僧も、いつとはなしに仏門へと歩いていた。父は言う。お前は、好きな道を歩けばいい。いいと言うても、どうすればよいのかわからない、あとには、まだ二人も弟が続いている。父は経済的にも苦しいなかから、大学院まで援助してくれた。母の遣り繰りは一汐ではなかったと思う。家でいつも口にするのは、お供えものか、おさがりものでしかない、それがお寺の台所。

これから先なんとしても自分の力で歩かねばならない。そんな時期に来ていた、母は私の性格を見抜き危ないと思っている、どう転ぶかわからないタケシ。

願わくば、仏門にあることを、という母の思いは痛い程わかっていた。あの頃の父と母のご苦労をいま此処に来て、ふと想い出しております。父に私がなにか相談をもちかけると、いつも口ぐせのように、タケシ死ぬなら、書物の中、生きるなら仏の道。名をとるか、実をとるか、そのときはタケシ「名を捨てる」ことが大事だ、僧侶たるもの、誠心誠意檀家に尽せとも言っていた。父の生きざまは、すべて「人のために」ということだった。

上座仏教の「行」は孤独と閑寂でしかない自分の一切を投げ出す。これが解脱の道だがそれができない。戒律を守るということは「自分を律する」ということ、張りつめた、一日一日を終える。自分が「無知」だと気づく迄、随分時

間を要した。自分を捨て、苦からの脱出を試みるそして、これをわかろうとあせる。実はこれが無知というもの、理屈でわかろうとする間は、行になっていない。

心身は疲労困憊、はじめのころは、瞑想どころではなかった。いつ死ぬのかそんな不安すら起こる。それも数えきれない。当時の生活環境は今と比べられないほど、極めてきびしいものだった。此処で生きて「行」するためには「食」が必要。食べるためには托鉢する、一日の糧を得るために歩く、歩くとお腹が空く、歩かねば一日の糧が得られない。なぜオレはここにいるのだ、いったいなにをしようとしているのだ、自分の存在すら、見失いかけていた。そんな時、父の言ったことを想い出していた。「タケシ、水の一杯入ったコップに水を注いでみても水はあふれるたけだ。一滴も入らぬばかりか周囲を水びたしにする。なあタケシ、心のコップは空にして上に向けて注がにゃナァ」一年も過したある日のこと当時の私は極限の毎日、窮地、泥沼とはあのことか、追いつめて、追いつめて、追いつめられてゆく。そんなときは、一心不乱に経を読む、それしか方法がない。そんなころだった。ふっと、なにか体が軽く、自身の重力を感じない、頭の中が全く空間になってしまい、お腹も空かない。周囲の汚物さえ、美に輝いている。虫や蚊にさされ、血を吸いとられていても、気にならない。あれは私の中で大いなる変革をもたらした瞬間だった。われながら透徹した叡知の目が開き、実存のなんたるかを、はっきり認識できるようになっていた。その時点では、もはや何ものも恐れず、心動かされることもなくなっていた。あの時、父の言う、ボクの心のコップが空になっていたのかもしれない。それは、私にとってかつてなかった、大事件だった。私に悟りの境地をもったことがあるかと問われ

れば、〝悟り〟という大それたことではないが父が子に与えた、最高の贈りもの、この寺この場所で私は私の目で私を見たこの瞬間が私の悟りだったのかもしれない。

よく人から、なぜまたタイの仏教ですかと聞かれることがある。これまで一度も、明かしたことはない、そして語ったこともない、しかし、ここには私だけの郷里が…。失いかけていた自分をよみがえらせてくれました。父白純大和尚と私、私と息子、わかってもらえましょうか。大乗ルート、小乗ルートのジョイントになる場所なんです。

この時、方丈の目に熱い、大粒の輝きがふくらんでいた。当時がそのままに映し出されていたのだろう。

私もこれ迄、方丈になぜ、タイですか、なぜ上座仏教ですか、何度聞いたか、問うたかわからない。いま初めて「なぜ」かがわかった。ここには方丈の魂がある。菩提樹もあった。さらにつづける。

ここでの修行は片手間の行ではない。そんなことでは、先づ成道はおぼつかない。私は、新しい自分の発見から、次々ともちきれない程の新しい誓いをもった。この感動は私ひとりで享受するものではない。多くの人々に味わってもらいたい。『日本から人を送り出そう、広く世界にも送り出そう、また世界中の人を日本に呼び、真の仏教を学んでもらおう』。そのためには、日本に『ボクの拠点（寺）が必要』だなどと、「途方」もないことにどんどん世界が広がってゆく。私の力でできることではないしかし、私の思いを人に伝えれば、キットわかってもらえる、キットお力添えがいただけると思い込んでしまった。いまにして思えばその通り、自分の一身において実現した寺ができ、留学僧育英会ができ、ま

た海外から、日本へ留学僧を呼ぶことができている。「途方」もないことではなかった。これは、お釈迦さまのご計画を、私がお手伝いしただけのことだということをいままたあらためてその思いを深くしていると、言う。ただあの時、全く頭の中に映らなかったことがある。結婚する。子供ができる、そして子供がここに来るなどと考えもしなかった。当然にして、独身協会の会長であり続けると思っていた。どこかでか踏みはずしたものと思う。わからない。

さらに、私はここで大乗の教える教義と、叢林の宗とする只管打坐の素晴らしさを再認識する。それ迄の私は、生半可に字が読めたり、理屈がわかったりしたがために教義がどうの、教理がどうの、方法がどうの、僧侶がどうのと明け暮れていた。そんなことがなんになる。人間にとって一番大事なことは、やるべきことを、いますぐやることだ。私にとって、大事なことは、常に原点復帰。「迷うたら、スタートに還れ」の諺ではないがそれに漸く気づく。〃宗祖を通して釈尊に還れ〃これが私の終生のモットーになった。これは私だけの信条。三十五年使い続けて尚新しい。

これは、同時に〃身を削り人に尽さんスリコギのその味知れる人ぞ尊し〃これも包含。それもこれもわが身を削る以外、人の、ものの尊さを知る方法はない。解らない奴は、いい子して、身を削っていないからだ、どうでしょうと。止まること知らず、迫りながら話し続ける方丈。

最後に、私を継承すると、約して臨んだ息子、ここまでは私の後を踏んでくれました。これから先どうなるかわかりません、本人の心掛け次第です。まことに「人を導き、育てる」ことはむづかしい。ましてや吾が子となれば、さらにむづかしい。だれでもわが子よかれとその良き成長を願わぬ親はない。その為には、あらゆる

犠牲を厭わないのが親の常。こどもに幸あれと、願いつも、叱る、たたく、打つ、撫でるも、すべては親の至情。いま私は、あらためてそんなことを思い知る。

これすべてみ仏のお導きでありお慈悲と感得しております、と締めくくった。

続いて駒澤大学福田教授。日本屈指のパーリー語権威者、仏陀の教えを言語で理解するお方。「息子智昭も方丈の尊い御慈悲をいただき、御檀家の皆さまや、信者の皆様の御蔭で、留学僧として、名刹ワットパクナムに得度することになりました。唯々ありがたいの一語です」と。

先生は、上座仏教の教義。教律論、戒律と四苦、縁起等について、縷々とお話くださった。

得度式は授戒堂で行われる。これに先だち受戒者は、浄髪し（頭髪、眉毛、口及び顎髭）摘爪をする。身心を浄めたのち白衣をつけ授戒堂に向う、後見役、檀家総代、役員とあとに続く、日本より持参した供養、御供えの品々を夫々胸元に一杯捧げもち、あたかも大名行列が行くようにソロリソロリと式場へ。受戒者は蓮華一本合掌に添える。授戒堂への道のりは信者の人たちが列をなし、合掌し祝福をくれる。

授戒堂を中心に右遶三回（これは尊崇への感謝を表わす）、堂の正面に進み浄域であることを示す、結界標石の前に立つ、献香、献華、点燭し、跪坐三拝、のち、親族、後見人から引き離され、寺院関係者（副住職、他役僧侶）に導かれ入堂、裏正面より前後して入堂した。僧伽の僧衆も「コの字」型に着座する総勢二十五名。十六時ジャスト、教戒師大僧正の入堂、中央に着座、順々とまことに、諄諄と儀式は人ごとのように進んでゆく。やがて黄衣が手に授けられ、式師に従い、仏、法、僧に帰依の誓い、のち、十戒が順々と問答の形で与えられる

第一、生類を殺さない

第二、盗みをしない
第三、あらゆる性行為をしない
第四、ウソをつかない
第五、酒を呑まない
第六、午後に食事をしない
第七、歌、舞など娯楽にふけらない
第八、装身具、香水など用いない
第九、高く、大きい寝台にて眠らない
第十、金、銀をさわらない、受けとらない

教戒師（尊師）は戒律を授けつつ受者に回答を求める。受戒者にとって①適当であるか②適正であるか③ならば浄心でもって努めなさい。とさらに十戒は細分化され、①服装に関する作法、②一般の民家を訪れる時の作法、③食事の作法、④説法の作法、⑤大小便に関する作法など、罰則のある規定からない規定、許されない大罪と許されうる小罪、軽罪から微罪へと具体的に授けられてゆく、この間、留学僧（受戒者）よどみなく、ひとつひとつにパーリー語で応酬する。留学僧のパーリー語が的を得ているのか、あまりの見事な応答におどろく、同時にパクパクと合っている様に見えるからQ&Aになっているのだろう。しかし何度か副戒師の人差し指が動き、確認し直している場面があった。それが何を意味していたのかわからない。それがわかるのは、方丈と福田教授だけ。さいわいに子供の恥は親知るのみで他人にはわからない。

戒律の最もきびしいものは「性交の罪」。相手が動物だろうが、同性だろうが、違反者は、共住すべからざる者として（アサンワート）即、黄衣剥奪、教団外へ放逐される。比丘が結婚できないのは当然である。上座仏教徒が日本の仏教僧を堕落しているという最大の理由は、妻帯し大罪の第一に違反したる者を、僧として認めているところにあるという。大乗の僧は小乗の戒律からすれば九割以上放逐刑に当る。

この得度式で見る限り、是非もない。二二七の戒律には、微罪もあり、許され得る罪として懺悔告白で免罪されるものもある。

大乗と小乗の最大の相違は、基本的には戒律の在り方と、出家者と檀家制度の在り方に大きな違いをみせる。ここは永久に埋め合わせ、融合できるものではない。この在り方の相違を、基本的に理解させ得る方法はない。

仮りに、日本の僧侶が、タイ或いは東南アジアの仏教圏に旅行する場合妻を同伴したり、酒を食堂等で呑んだ場合、先づ好意の目はない。軽蔑されるだけ理解を求めても、制度を説明しても、全く通じないと心得たい。大罪の第一級なのだから。金、銀等にふれない。さわらないという一条は貨幣経済で成り立っている現代、とくに都市周辺に行じている。比丘には不自由この上もない、金がなければ、バスひとつ利用することもできない。当然だとすれば、それだけのことではある。仮りに比丘に欲しいものがあれば、金にふれることなく、寺の子（デット、ワット）という制度がある。寺の子に頼んで必要なものを手にすることはできる。この寺の子は、いつも寺内に過しており、俗界との仲介をする、いわゆる便利屋さん、救いの道は開かれている。

比丘は僧伽（サンガ）で生活をする。僧伽は行者の聖域、ここにあるものは、自己の救済のみに専念することが許されている。僧伽に属した黄衣の比丘は、一般社会とは全く隔絶した環境のなかで過す。従って上座仏教の本格的修行は、僧伽に招来されるや否やにかかってくる。従ってその許可条件とは戒律（具足戒）を守れる、比丘としての資質が問われていることになる。

この僧伽制度は、男子に限られ、女子にはない、女子の出家者も、かつてはあった。これは

比丘尼と呼ばれさらに戒律はきびしく、三一一ケ条の具足戒を守る必要があった。しかし比丘尼の僧伽はすでに消滅、今日上座仏教には存在していない。寺周辺で見かけたり、手伝っている白衣やピンクの天使はメーチェと呼ばれ、戒律は信者と同じく八戒に限られる。いまでも寺院周辺に庵を結び戒律をきびしくして独自の修行道場に安居し、自主的に行動しながら奉仕しているメーチェもあるという。実態はさだかではない。

さていよいよ黄衣がくだされ、着用が許される。

最后の難関に差しかかっている。そして一体得度するとは、比丘とは、行するとは、日々の心構えと、精進の在り方を確認しながら僧伽にふさわしい比丘へと導く。

留学僧は声を揃え教戒師に乞う。

「一切の苦を解脱し、涅槃を証得せんがために、尊師よ、御慈悲を垂れたまえ、われに。黄衣を賜いて、何とぞわれを出家せしたまえ」と。

尊師は、応えて正式な座法にのっとり「横坐り」を許す。この時点で尊師の許可はおりたことになる。しかし「行」する同志僧伽側の許しはでていない。尊師は得度志願者に向って静かに語りかける。「この沙弥の得度式は汝らが沙弥になること、僧になること、修行者になることだ。即ち、戒律を行じることだ。この波羅蜜を積善することが出家の目的である。精神が乱れると、仏道を成ずることができない。そのために、頭髪、体毛、爪歯、皮膚の五相を観ずる。五相に対する不浄観を修して禅定に入り、すべての執着を断ち、行三昧の境に入って解脱することが、出家者の目的だ」。

やがて尊師は、法衣の中から、肩衣（アンサ）をとり出し、受戒者の首にかける。出家者はひっかからないように頭を垂れ、耳を掌の平で押え、

授けてもらう。師弟に通い合う、ぬくみと美しい契りの在り方をみたような気がした。やがて三衣（重衣、上衣、内衣）が授与され、黄衣着用を指示する。受者三名は堂を退き裏庭の太陽のもとカメラは追っかける。待機していた比丘たち、一人に三名ないし四名係りが手早く白衣を落し、素っ裸にしてしまい、黄衣を巻きつけてゆく。三人は緊張のなかにも、青空一点に視線を射て、晴々とした趣である。威風堂々のうちに華麗さえ観じる。さあ、比丘の誕生である。

最后に托鉢する一鉢を如法に被着。右肩を顕わしたテーラワーダ（寺院内のみの僧形）の沙弥姿。終えて堂に戻り、尊師の前に立つ、尊師は、ひとり、ひとりを目で追う様にしっかりと確認する。

うしろに坐し黄衣に包まれた比丘を拝す、それを見守る父と母、後見役の声が堂一杯に広がる。「子供よ!!今日はお前たちにとって残された人生の第一歩だ。どんなにきびしくとも、どんなに辛くとも、人生はただ一人の旅ぞ、頼りになるのは自分だけ、だれ一人一緒にはいてはくれない、それが覚悟だ。なにもかも捨てろ。背負っていたものを捨てろ。目をつぶって捨てろ、涙をふるって捨てろ。いいかい、捨てきったとき、お前たちは、新しい自分にめぐり会える。お前たちは、ここに、いまここに、いま一人の自分に会いに来たんだ。来たんだゾーオ」と絶叫する声が聞えた。否そんな声が聞えたように…思った。

尊師は比丘を前にして、眈眈として淡淡と辺りを払う。ひときわ大きな声、「汝ら傾聴せよ、これは汝らにとって、真実を述べるときである。即ちこれらのことにつき、僧伽の中で問われたら、事実なら然り。事実でなければ然らず。と申し述べよ。事実に困惑することなかれ、当惑すること勿れ」と尊師は、ふりしぼるように、

ひとりひとりに、問いかけてゆく。

『汝、癩病ありや。汝腫ありや。汝疱瘡ありや。汝肺病ありや。汝癲病ありや。汝人間なりや。汝男子なりや。汝自由者なりや。汝負債なき身なりや。汝公務に仕えざる身なりや。汝父母の同意を得しや。汝二十歳に達しや。汝衣鉢は完璧なりや。汝の名はいかに。汝の親教師の尊名はいかに』と、Ｙｅｓ、Ｎｏを求め、合わせて認識あるか、確認する。承りながら二五〇〇年前にタイムスリップする。戒律の中には、すでに死語となっているものもある。おそらくこの若者たち、その語のなんたるか知らないものもあろう。時代とともに少し変化させてもいいのではないかとなどと思う。死語に代わる、新しい時代の、新しい心配や、感染症など、―しかし変えられないのが歴史、かわらないのが伝統、変えてもいいのが時代への対応ではないかなど。――戒師は、「汝ら真実を述べるとき」だと最も、語気に溢れていたから余程大事な徳目なんだろう。

儀式も終りに近づいている。

尊師は視線を移し、僧伽に対峙するかのように一同に向って合掌。さてさてこの新しい受者たちを、僧伽に招じ入れて欲しい、と告げる。僧伽は尊師に向い合掌、『沈黙による』同意を表わす。それを見てとった受者たち「何卒、何卒、憐愍を垂れたまいてわれを召換し、救済されんことを』と大きな声で乞う。

僧伽も同時発声、尊師と受者に『おおせの通りに』と応え、承認する。

得度式も頂上にのぼりつめ、全員正面に向いて、仏陀への慈悲に感謝の誠を奉げ、読経三拝ののちすべての儀式が終了した。

儀式とはゆえ見事なストーリーが演出されている。得度式イコール僧伽入りではない、道場は全く別のものだということがわかる。いかに

僧伽の力が大きいか、伺うことができた。

あとがき

実に一時間四十分を要した得度式。尊師は、留学僧（十四回生）三年目の真野大成比丘に、都度通訳を求めた。これは参列者に対する最大の、お心遣い、おそらく黒田方丈に対する礼であり、敬意をお示しになったと思う。それにしても、僅か三年目、真野比丘の通訳は、見事としか言いようがない。比丘の存在がなかったら、なにがなんだか解らないうちに、ながーい時間を過していたかもしれない。

得度式を順々と追いかけ、進行のままに、書いてきた。しかし百聞は一見に如かず。説明しきれるものではない。

取材するについて、殊に僧伽は、聖域であり結界されている、その中を撮影するなど許されるものではない。しかし善光寺関係の取材に限って、住職より許可あり、どこを覗いても、どこを撮ってもかまいません。なんと寛大、この寛容さ、解放されたお持て成しに合掌。それもこれも、方丈への信頼、今日仏法交流に身を削り、身を粉にして、尽力されていることへの、配慮が感じられる。

七月のバンコックは、猛烈な太陽、お湯でも浴びせられるような湿度。それでも早朝のひとき、涼風さえ味わうことができる。そんな時分、至るところ、ひときわ鮮やか、三衣のオレンジ僧、きょうも比丘たちの托鉢風景が、家々の軒先、屋台ぐるまの前で、左肩に鉄鉢を落し、両脇にかかえこんだり、一日の糧を得るために黙々と歩いている。これぞタイならではの風物詩。

ただ観光気分で見ている分には、この様に映る、しかし実際は修行の身。そんな生易しいことではない。中村元訳、スッタニパータの一文

に「托鉢僧には、合掌し礼拝せよ、飲食をもって彼らに供養せよ」と。比丘は、在家者の義務としての施食、供養を受納するがために訪れる。それが定めだと示されている。貰いに行くのではない、布施、施食するものを受けとりに行く。方丈の話の中に「托鉢しながら糧を得る、そのために訪ね歩くことは、苦しかった」と駆け出しのころの心情を吐露している。比丘の托鉢は生きるためにではない。その様に考えてはいけなかった。これは上座仏教の最も大切な徳目、いわゆるタン・ブン（善行善果）の手助けをすることになる。これが理解できねば、上座仏教はわからない。

日本では、滅多に見かけなくなったが、托鉢の習慣はあるにはあった。しかしその心は「あげてやった」ではなかろうか。

大乗で説く、布施、供養、施食、施餓鬼など、益々上滑りしてしまう。いわゆる理解に必要なベースがないからむづかしい。日本の経済大国は、必ずしも個人生活に結びついていない、実に不思議な現象。物質文明は世界一栄えているのに心の豊さや、安らぎのない奇妙な事態に直面して久しい。なぜなのか、つきつめてゆけばはっきりしてくる。

「所有欲」が収入と消費グセをはるかに超えてしまっているということ。丁度これを書いているとき（7月24日）、ＮＨＫのクローズアップ現代というニュース番組を耳にした。御殿場の山の中にブランドものだけの一大ショッピングセンターをオープンした。アメリカから一人の女性がやって来て高級ブランドものの激安店を開いた。なぜ山の中なのかに対し、土地が安いからという。いよいよ初日、四五〇〇名の来店を予測、ところが東京よりバスで買物ツアーが乗り込んで来た。来場者四倍、売上五倍。この有様をみた彼女クレージー、クレージと連発し

ていた。なんと日本人は金もちなんだろう、一人が買えばみんな同じものを買うこれならすぐにでも全国に多店化出来るとインタビューに応えていた。

所有欲を充したときの幸福感は、束の間、人並以上にありたいとしてまた次のモノが欲しくなる。幸福は止まらず、すぐ慣れてしまう。そしてまた、永久に満足感は得られない。ここのところを、上座仏教は見事に教える。そこで人間にとって最も大事な正しい知恵として与えてゆく。

さらについでに、私の家は、公園を前にした角地、立地は最高、住宅地の中央に建つ。お蔭で市より、立地の良さを認められ。家の入口が、地域の「ゴミ出し場」として選ばれた。

隔日で分別出しが行われ、百世帯余りの家から、出る、出る、よくもまあこんなに出るものだと驚くゴミの山、それだけではない。粗大、燃えないゴミの日など、家具、電化製品、アンテークもの、衣類、フトン、自転車、単車まで、立派で、高価で、価値あるものが山と積まれる。それが年末とか特別な日ではない。毎回都度だから、時々、大きな袋など開けてみたくなる。もしかして、ご主人でも入れられ粗大ゴミとして、出されていないかと。「捨てる。消費する。文化は」まだ衰えていない。手にした瞬間の幸福感は、粗大ゴミとなって捨てられてゆく。これでは経済大国と幸福感は永久につながらない。「もったいない」「物を粗末にするな」「神仏に対し罰があたる」「米一粒」「菜一切」「紙一枚」「紐一本」これなど懐しい。平気で手にして、平気で捨てる。空恐しいこと、天罰当らずしてどうなる。どんなものでも、いのちを全うさせてあげる心こそ所有欲からの開放になる。

お釈迦さまの教えているところ、人間は「無知」ゆえに、あらゆる欲望から逃げられないで

いる、これこそ最大の苦、この欲望から逃れる「知慧」さえ持てば、だれでも幸福になり得るという、実に単純にして明解に道を教えている。

二〇〇一年二月、タイ仏教界としては、関係者の努力が実り、ワットパクナム寺院の日本別院が、成田国際空港の近く完成間近となっているが、日本仏教界も大歓迎を示している。

上座仏教寺院の日本進出。仏教の国際交流も、いよいよ本格的になって来た。大乗、小乗の融合も遠くはない。大事なことは、人さまのいいところをなんでもいただくこと。マネすること。吸収すること。いいところは出し合うこと。これが度量というもの。私の提案は、先づ上座仏教より、比丘、出家制度を部分輸入する。日本からは檀家制度（交番制度を輸出した様に）を輸出する。いづれも完成品では、双方の「利益」にも乏しく、いささか歪みが生ずる恐れあり。特に戒律の扱いは、夫々の思惑により、都合よく処理、国と国の中間地点にフリーゾーンを設け（株）ワットテンプルの、精舎において、夫々の国の規格に合うよう組み立て完成品とし。そして流通にのせる。

その前に相互間で人材交流を主にバーター制により推進する。一〇〇〇年先を見すえ余裕をもってとりくめば、程良い「中乗仏教」が誕生するかもしれない。

出逢い

ここまで書いてきた―私は黒田武志という「人となり」を、だれよりも承知していると思い込んでいるからである。方丈に尋ねて書いている部分は極めて少ない。遠く過ぎた日を想い起こすとき、互いは青春二十六歳、大本山總持寺、夏季摂心参禅会、方丈は参禅者への指導僧として雲水であり、私は一般人として参加、すでに亡き善光寺開基に連れられ、しぶしぶと参禅す

る。縁起とはこんなことを謂うのか、このときが抑、方丈との運命的出逢いとなる（成寿21・22号に掲載）。以来、方丈は私の知己であり、師友。出逢いの瞬時に、すでに目標と方向を共有する。徐々にではない。互いは、学びあい、励ましあい、助けあう間柄。そしていつの間にやら四十年。この間、お互いが「その場かぎり」であったことは一度もない。

よくオーラ（aura）を発散しているというが、おおげさに言うなら、この時の雲水（何千何百という中で）に飛び抜けた、霊気と圧倒される様な覇気を感じていた。特に何か特別にあった訳ではない、話すチャンスさえない、はっきりしているのは、耳に残る声だけ。参禅中は面壁しているから、全く顔を見ることはない。ただこの方がうしろにいるだけで凛々たる気魄を感じる。

私はそれまでそんな力を全身に受けたことはなかった。たまたま八日目下山一〇分前、私共の宿舎になんとなく飛び込んで来たひとりの雲水。私どもを労らってくださる。以心伝心だろうか「あの雲水ではないか」しかと声に覚えあり、私は早速ひとつだけ先生にお尋ねしたいと申し出る、すると雲水は「どうぞ、どうぞ」という。

ではいったい「悟り」とはなんですか。

雲水はその場にドッカと胡坐を組んで頭を掻き掻き、「アハハハァー悟りですか、悟りですネエ。それがわかれば、私はここにはおりませんヨ。これでいいですか」。全く呆気にとられる。これこそお釈迦さまの同事。たったこれだけのこと、瞬時に目標と方向を暗黙の中に共有して別れる。実に面白いこれが出逢いのはじまり。その翌日から大阪の本社を臨時休業にする。そして全社員三泊四日の参禅会、その指導を黒田雲水にいただいた。都合十一日間、坐ったこと

になる。それからというもの、先生の御法話をいただきながら幹部社員は、両本山の夏季、臘八、報恩摂心にも参加、私も五度上山参禅する。

或る時期、雲水に憧れ、先生を羨しく思ったことがある。「僧侶になることは難しくない、しかし僧侶であることは、非常にムズカシイ」

と言われたことが忘れられない。この頃の方丈には、人に言えぬ修行上の悩みがあったことをのちに知る。そんなこととは関係なく実に積極的に教えていただく。方丈はまた、仕事について、「仕事というものは、自分がしたくてするものではない、仏さまがさせてくださるものだ、どんなに働きたいと思っても、できなくなるときがきっと来る。仕事が与えられているときは、感謝の心で精一杯働くこと。これがわかりはじめると仕事らしい仕事ができるようになる」といわれたことも私を変えた。

「仕事は世間さまからいただくもの」こんな心が少しわかりかけると、おもしろく、そして楽しくなる。とてもありがたいこと。

私はこんなすばらしい方丈に、罪を犯し、負い目を感じていることがある。いわゆる、仏道者としての黒田雲水がめざす尊い理想を砕いてしまったという事実。方丈の修行時代、道に従い頑なに「独身を貫ぬく」と、公言して憚からないころ、「寺をつくる」という時運がめぐって来た。アメリカより帰国して間もなくのことだった。私はその計画を、はじめて打ち明けられ、これは決して夢物語りではないと思った。

私は即座に申し上げた。「いったいどうすれば手に入るのですか」と。方丈は言う、「資金が必要です。でも私は無一文、金がない。金がなければ手に入りません。これは私に与えられた天命です。東郷さんどうしたらいいのでしょう」という。「簡単です。銀行から借りる。借りられないなら、夜、頬被りして、金のありそうなと

ころに入るのです。どうでしょう」咄嗟にそう言った。方丈は「それができないから相談しているのです。東郷さんどうする」。いよいよ来たと思った。「先生これが天の暦数なら従いましょう、しかし私が協力させていただくなら、ひとつだけ条件があります。先ず、寺の経営には世話する女房の存在が絶対条件です。先生が〝嫁はいらん、寺はいる〟というのであったら、協力できません。私の条件を充たすなら、全面的に責任をもって協力します」とここまでは言った。これは無茶な対話。土地を取得し、伽藍までという費用を見たとき、三十五年も前のこと少くともいまの感覚では三、四億の金額、まず無理だと真に観じていた。

あまりに唐突な話、無碍に断ることもできずそのとき「独身を貫ぬく」と公言している方丈のそれを思い出す。この信念は簡単に崩れるものではないと確信、出まかせに打って出た条件だった。

先生私も忙しい、返事はいますぐお願いしたい。考えて二・三日後ということではないと申し上げた。忘れもしない。これは二十九歳のときの攻防。ところが方丈「嫁も貰い、寺もつくる」と言う。私はあわてて一体戒律はどうなりますかと、問うてみる「捨てます。」と一言、私の狼狽ぶりは想像できると思う。仕方がない、もう従うほかない、と思いながらいまひとつ条件をつないだ。「嫁は、私におまかせ下さい。私のすすめる御方であり、それも一度きり」だと言った。方丈は「意のままに」とまた一言。いよいよ、私は追いつめられ、自分の出した条件に、自分が縛られてしまった。もう後には引けない、嫁のこと、金のこと、寺のこと。なにか手だてがあるはずもない。私に出来る可能性は唯一社長（のち開基）に縋（すが）ること、嫁とりは社長夫人に頼む以外、全く方法は考えられなかっ

降三世明王図
三喜庵

た。どう考えても、高が一介の平社員、会社を代表している様な錯覚をしている、とても簡単なことではない。本社（大阪）に帰って社長に子細を話す。そして協力を求める。これは企業で謂う、事後報告、ホメたことではない。その上、事後承諾まで得ようとしている、それも少々の金ではない。ところが聞いていた社長、ニッコリ笑って即座に「おもしろい、いまどき人材育成の寺とは、意を得たり。一切させてもらおうではないか、嫁のことは、女房（当時副社長）にまかせればいい」という。私は耳を疑った。稍あって、黒田先生との約束はどうなっている（約束などできる立場ではない、事と次第では、首に関わる）約束は…と言ったときに、いつまで、何年間で、どれだけ工面すればいいのか。私はホッとする。成る程当然です。たしかにその通り。私と方丈の間で、そこまで詰めていない。ただ私的に基本的合意をしただけのこと、早速、方丈に電話する「そうですか金は三カ月後で結構です。それ以上延びると人手に渡ります。会社のまとまった金ではなく願わくば、折角ならひとり、ひとりの浄財として、できるだけ多くの方々からのご喜捨（よろこんで施しをすること）をいただきたい」。なんという言い方でしょう。私が方丈の紐なら、わかり易い表現。

私はパニクッてしまった。貰うことまで条件をつける、この勝手気ままな方丈に思うように手玉にとられてしまっている。私の打つ手、打つ手に狂いが生じている。ところが不思議とこの方のそばにいるとこの方のために働きたくなる。また社長に伝える、方便など通用しないから、そのまま、報告する。「ふーんヤッパリそうか。そうだったのか」と、ひとりで合点し相槌うっている。「トーゴ!!いったい黒田という男はなにもんだ」と言いわれる。「ハイ化物です。」「その通り、只者ではないヨ、素晴しいことだ。実

に真理を得ている。この在り方は世のため、人のためにとしか思っていない稀なお方だぞ」と言う。ここが偉いのです。浄財、ご喜捨という仏教の基本的理解のできる「悟性」こそ開基たる所以完全に見抜いている。「話は決まった。じゃあ東郷、お前の番だ。お前が決めたことはお前が責任をもつ。許可するから、期間内何処でもいい。誰でもいい。すべてはまかす、もしも集め足りぬ時は、わしが出す。存分にやってくれ」と逆に励まされてしまった。さあ大変、お金は社長、会社からは出ない。私が集めるという。窮地に追い込まれてしまう。期間は三カ月間。一日、十万円、そして九十日これを積み上げねば目標に到達しない。その頃の私の月給は五万円、日給ではない。いったいできるのか、できないのか。

兎にも角にも、歩いて動く以外、方法はない。モノや技術を売るなら目的も手段も方法もしっかりしていて、いくらでも考えられる。ところが宗教や理想や思想を売る。全く空気を売るようなこんなことで金を手にした経験がない。それからというものは業務上の出張をからませ、日本の津々浦々それこそ北海道から沖縄まで、訪ね歩いては奉賀帳を手に(これは方丈がつくってくれた)趣意書を説明、喜捨を呼びかける。三カ月で約一三八〇名の方々に協力を得ることができ、社長も、大口のご喜捨。お蔭で予定額を少し越えるところまで遂に来た。そして必要な資金を手にする。早速方丈に伝える。「先生少し余力があります。」「そうですかお金はいくらあっても邪魔にはなりませんどうぞ、どうぞ」という。この時のやりとりは、いつの間にかお互いしゃくり上げてしまい、本当にうれしかった。そしておひとり、おひとりのお心づかいと喜捨に感謝せずにおられなかった。これは、黒田武志という人となりの、人徳であり、徳性に

与えられた天からの賜りもの。つきない二人のこのしゃくり上げが善光寺のベース。そして私の仕事も、売上も環境も好転、このときから急上昇を辿ってゆく、まことに不思議な現象。

嫁とりの方も同時進行。当時社員として社長秘書であった才女の誉れも高い加藤倫子（当時永平寺単頭老師、息女）さんに白羽の矢が立つ。私もこれに終始荷担する。縁とは異なもの味なものといいますが、敷かれたレールに乗って双方異もなく快諾、トントンと運ぶ。方丈など一瞥もなく求婚する。ついに百日足らずでゴール。東京品川迎賓館。御二人の第一歩は善光寺の第一日、第一歩。

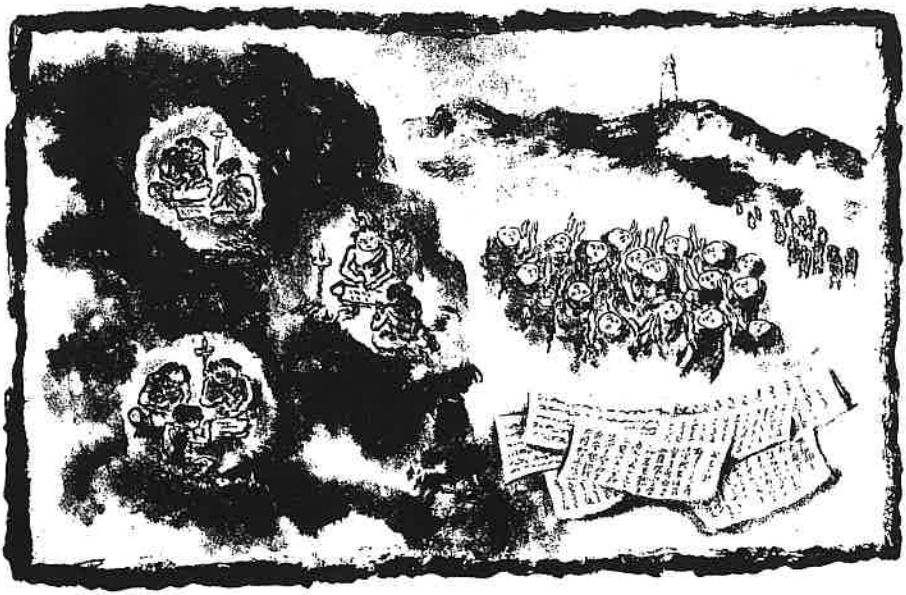
いづれにしても型破り、ご覧いただく方は少し滑稽に思えるかもしれない。

台所はてんやわんやの大騒ぎ。おまけがついて、新郎の父、白純大和尚のお礼のご挨拶。約束はひとこと五分。ところが延々と泣いて、泣かせて三十分。途中、時間切迫、タイムオーバーのメモ紙が二度、三度運ばれて来る。それを無視する進行係。遂に新婚旅行の列車には間に合わず、あとの祭り。この新婚さん二人と煙だけがホームに残った。人ごとながら、いい想い出です。それから二人はどこでどう過ごされたのか、いまだに聞いたことがない。この時の進行と司会はすべて私がやった訳ですから知りたくもないのです。

当時私は、戒律のなんたるかを知らず、方丈の信念に揺さぶりをかけている。これは実にいけないことだった。一方方丈も、身口意一致なく、チョイと色香を嗅がせるだけでいとも簡単に戒律を破るなど、これを堅持するという気概と信念の脆弱さは、否めない。従って方丈にも一端の責任がない訳でもない。ただ「寺づくり」という重大な局面で、これを交換条件にしたことは、仏道においていささか負い目を感ずる。

時偶もしも、倫子夫人の存在がなかったらと考えてみる。おそらく今日の黒田方丈はなかったと断言できる。だからいつだって処かまわず「ミチコ、ミチコ」と絶叫する在り方は衆知のところ。これは愛の恋の女房など云々するところではない、よーく見ていると「ミチコ、オレはこうする」ではなく「ミチコこれはどうする」という在り方。これは文法的にも命令形ではない、依存形であり、方丈は用語の活用法を誤っているように思う。従って、すでに倫子夫人なくして歩くことができなくなっている。しかしとまれ、この現象実に「寺の盛衰は女房次第」という隠された、大乗の諺に表わされているように思う。

檀家に支えられ成り立つ寺、大乗仏教寺活性化という見地から、まことに模範的絶対条件とも言える。



小谷亀太郎氏 逝去

タイ国在住で善光寺留学僧育英会顧問、世界仏教徒連盟本部事務次長の小谷亀太郎氏が七月十三日、バンコク市内の病院で死去されました。八十五歳でした。

バンコク日本人会の理事をつとめ、昭和十年に同会が建立した日本人納骨堂の初代奉賛会会長として春秋の慰霊祭の世話をするなど日本人遺骨の慰霊に長く携わり、またバンコクに本部を置く世界仏教徒連盟（ＷＦＢ）の事務次長を三十年近くつとめて、開教師や留学生などタイ国を訪れる日本人僧の招聘に尽力されました。

タイ国在住の日本人として日タイ親善に尽くした最大の陰の功労者というべき存在で、日本からの留学僧の得度式に立ち会ったり、タイ国を訪れる僧俗の世話役を果たすなど有形無形に貢献され、慕われておられました。

近年は病床に臥し、腎臓透析を受けながら自宅療養を続けていました。

葬儀は喪主を夫人の久子さんがつとめ、七月二十二日にタイ国で執り行なわれました。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

弔辞

日本パクナム会会長
横浜善光寺留学僧育英会理事長
黒田武志

小谷会長さまとお呼び致します。

会長さま、残念です。とても悲しいことです。私が最も敬愛してやまない尊い会長さまの訃報に接し、唯々驚愕し、哀惜のことばすらみつかりません。

世界仏教徒連盟本部（W・F・B）事務次長、タイ国日本仏教会奉賛会々長、日本国横浜善光寺留学僧育英会顧問である故小谷亀太郎会長様の御霊前に、謹んで弔辞を捧げます。

会長さまとは、昭和四十年ワットパクナムに安居して以来、法縁を頂いておりました。

私は「宗祖を通して釈尊に還る」を念願し、大本山での修行を終え、インド仏蹟を巡拝、その帰国途次、縁あって石附周行師とワットパクナムに錫を留め、安居生活に入りました。今から三十五年前のことです。当時パクナムにはプ

ラパーワナコーソンテーラ副住職様や、佐々木弘傳先生、佐々井秀頴先生等が安居され、皆様「行」に励んでおいででした。そのとき、私共を親身になって一切のお世話を下さったのが会長様でした。

当時、勉強不足の私は、教義に疑問が多く悩み、苦しみ、どれが釈尊の正しい教えなのかわからず迷うておりました。はじめて上座部仏教にふれ、苦よりの解脱は僧伽にしかないと確信し修行の決心をいたしました。

いま、世界はあたかも一国の観を呈しておりますが、反面、人類はかつてない不安と絶望に見舞れております。今日ほど佛陀釈尊の教法宣伝布を必要とするときはないと感じております。

今日、大乗仏教と上座部仏教とが相互に理解し合い、交流をはかり、人材の育成、仏教の振興、世界の平和、人類の進運に益々寄与せねばならぬとき、その要(かなめ)を失い、惜しみても余りあるものがあります。

私が世界に眼を開いたのも、解脱に近づくことが出来たのも、二二七の戒律をいただき、その守ることの尊さを知ることができたのも会長さまを介してワットパクナムの僧伽に過すことができたお蔭です。当時日々の糧は托鉢して供養を受ける。住む場所は木の下、清貧と簡易の「行」こそ解脱への道と教えて下さったのは会長さまでした。

会長さまは、タイ国の六十余年に亘り、百名を超える日本からの留学僧をお世話いただきました。その献身的ご貢献はことばに尽せぬ程大きく尊いものです。

いまこそ佛道への堅固な菩提心と人種民族の枠を超えた弘法救生の慈悲をお説き下さった会長さまの存在がなくてはならないときであったのに。……

私には忘れられないことがあります。十年前、

十一面觀音像

横浜善光寺で私の子供四人の上座部仏教の得度をいただいたことであります。当日列席者の挨拶の中に、東大名誉教授中村元先生から、「これは有史以来全くはじめてのこと、仏法の国際交流にとって、意義深いことだ」と、ことばをいただいたことも、今日、タイ上座部仏教と交流を深くしていることも、その実現に深く、厚くご尽力下さった会長さまのお蔭です。又、その頃『宗教と現代』誌に、東隆眞博士も「タイ国の高僧が日本までおいでいただき、戒師となり、日本人のために授戒されたということは、おそらく中国の高僧鑑真和上が東大寺戒壇院を建て、日本人僧に授戒して以来のことであるまいか。ここに日本タイ両国の仏教史（戒律史）上新しい一ページが書き加えられることになった。」と述べておいでした。

「念ずれば花開く」といわれますが、会長さまが念願し待ち続けた日本ワットパクナム別院も二〇〇一年二月に本堂の完成も間近かです。その開山の式典に居なければならなかった小谷会長でした。悔まれます。

過日、善光寺留学僧吉田日光、私の愚息三男博志、又私の弟子智昭の得度式の節は、先づ小谷会長さまにご報告をと九名の参列者がお訪ね致しましたが、遂にお見舞叶わず、そんな中、奥様のご臨席を賜わり、身に余る尊い儀式と黄衣をいただくことができました。これ全て小谷会長さまのお蔭であります。

生者必滅、会者定離とは申せ、あまりにも早いお別れとなりました。会長さまが、私達にお与え下さいました慈悲心を心に深く刻んで、今後一層、日タイ友好親善に精進をいたす覚悟でございます。

会長さまの長きにわたるご貢献とご功績をたたえつつ、御冥福を祈り、哀悼の言葉を捧げ弔辞といたします。どうか安らかにお眠り下さい。

横浜善光寺留学僧育英会

〝法燈国際化〟目指す

留学僧を派遣、受け入れ

国際交流にもさまざまな形がある。国境を超えた人材育成の育英事業を続けているのが横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長、事務局＝横浜市港南区日野中央一ノ一二ノ九・曹洞宗善光寺内）である。各国へ留学僧を派遣し、また日本への留学生を受け入れ、滞在に必要な経費と往復旅費を給付しており、設立から十六年の間に採用した育英生は十九カ国一地域・九十七人にのぼっている。

黒田理事長は昭和四十四年八月、「真の平和と人類の幸福は正しい教えに依って創られる」との信念のもとに、「一宗一派の偏見にこだわらず大聖釈尊の説かれた生きた正しい仏教を高揚し、世界平和と人類福祉の向上に貢献する」ことを願って新寺建立を発願、その三年後、横浜市港南区日野公園墓地の一角に善光寺を設立した。

この地を選ぶとき、「私の求めていた、やすらぎの寺はここだ、と直感した」と黒田理事長は回顧している。「墓碑二万基を擁する壮大な日野公園墓地。ここに集まる多くの人たち。神戸、

長崎、函館と並ぶ国際都市、横浜のど真ん中。私はその小さな寺を布教の拠点として、世界に向け新しい情報の発信基地として活用したい。さらには檀信徒の研修センターとして、仏教の本来の使命と、国際化を果たす拠点として育てあげ、理想的な寺院を創ろうと決意したのです」

――善光寺の原点がここにある。

育英会は、善光寺開創十五周年の報恩事業として黒田理事長が発願し、昭和五十九年一月十五日に発足した。留学僧の派遣・受け入れを援助するこの育英事業は、「一カ寺としては破格の企て」として一躍注目されたが、国内での反響以上に、韓国、中国、スリランカ、台湾、バングラデシュなど、アジア各国から日本に留学する優秀な僧侶や学生たちが帰国後、日本での留学体験を政府機関や所属する僧伽に報告する中で、善光寺育英会への国際的な評価は高まった。

スリランカ政府公認の慈善団体「サラナンダ財団」が平成十年六月、黒田理事長に「国際栄誉賞」を授与したことは、善光寺育英会に対する国際的評価を端的に示している。

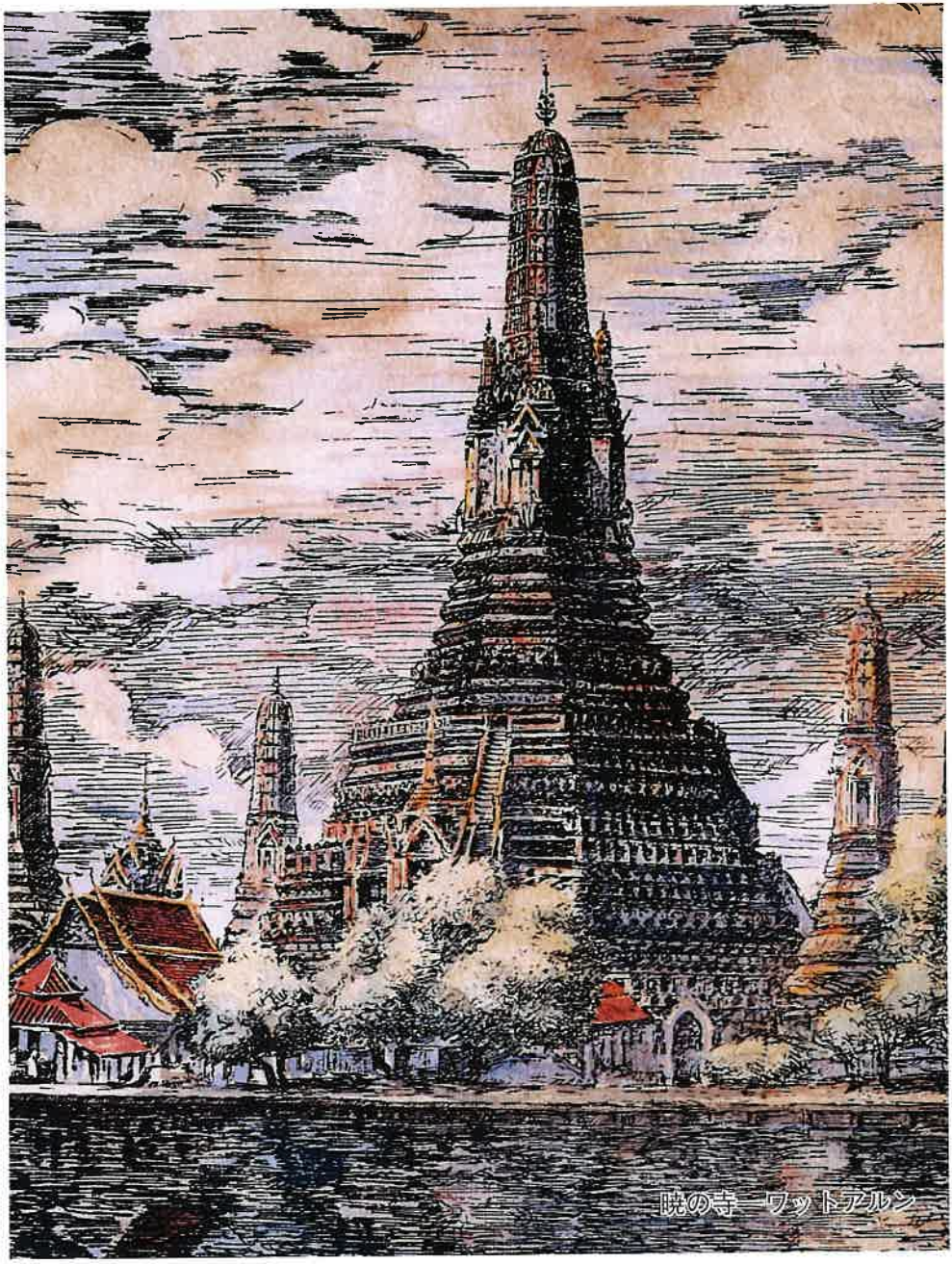
この事業の国際性は、単に舞台を世界に広げたところにあるのではない。「仏法興隆、世界平和に貢献したい」という理想を檀信徒とともに実現していることにある。

黒田理事長は、檀信徒に「毎食ごとにおかず一口分だけ減らして協力してください。それで熱意ある若者を留学させたいのです。世界に仏法を広げる人づくりのために。未来の平和のために！」と呼びかけ、〝法燈の国際化〟を目指す国際的な育英事業に取り組んでいる。

（注　平成12年3月30日付『中外日報』の〔「宗教と国際交流」特集〕より転載しました。）

仏教への厚い信仰に生きて

タイの仏教文化を訪ねて



暁の寺　ワットアルン

▲パンパイン宮殿

アユタヤの遺跡▼

エメラルド寺院

運河のある町

川とともに生き、川の上で生活

チベット旅行

ニューヨーク州立大学
伊藤　宣博

チベット高原は西をカラコルムとパミール山脈、東を横断山脈で区切られ、その間二千五百キロ。そして北の崑崙山脈から南のヒマラヤ山脈まで千二百キロもあり、面積は日本の六倍半の広さに、人口は約六百万人です。平均高度は東部は三千㍍、西部は五千㍍以上もあり、世界に十四座しかない八千㍍級の高峰が集中するチベット高原はアジアの大河の水源地でもあります。中国の揚子江、黄河をはじめとして、メコン河、プラマプトラ河、インダス河の源はすべてこの高原にあります。高地のために酸素が少ない等の厳しい条件と共に一日で四季を経験すると言われる位昼と夜の温度差が激しく、例えばラサの七月の平均最高温度は二十七度、最低は六度です。政治的な問題を除いても素人が旅をするには最も難しい地域の一つです。

チベットの歴史

チベットが本格的に世界史の舞台に登場したのは七世紀初めで、ソンツェン・ガムポがチベット高原に割拠していた諸部族を統一して古代チベット王国吐蕃を建てました。彼は軍事国家の

基礎を築き、チベット文字をインド文字に倣って作り、中国とネパールから妃を娶りました。この二人の妃が熱心な仏教徒でこの国に仏教を伝えました。ソンツェン・ガムポの時代に伝えられた仏教は八世紀後半になると国教となり、王室の保護を受けて発展します。大きな寺院が次々と造営され、経典の翻訳が行われました。しかし相次ぐ大規模な寺院建設は国家財政を圧迫し吐蕃王国が傾く一因ともなりました。

九世紀中頃にダルマ王が暗殺され、ここで吐蕃王国も歴史の幕を閉じました。その後しばらくチベットは氏族割拠の時代となり十三世紀に入るとモンゴルの脅威に晒されました。チベットの仏教諸教団はモンゴルに代表を送り、次々に元朝を興したフビライの信任を得る様になり、チベットの支配権を得る様になります。チベットの政治と宗教の両権力を握り栄えました。

元朝が衰えるとそれを後ろ盾にしていた政権にも翳りが出始め十四世紀前半には別の教派が権力を持つに至りました。この時期にゲルク派を興したツォンカパが出、多くの支持者を集めて当時の仏教界に見られた退廃的な風潮を正すため戒律を厳しく守る事を前提にした仏教修行のカリキュラムを作成しました。十六世紀後半にゲルク派のソナム・ギャムツォがモンゴルのアルタン汗よりダライ・ラマの称号を贈られ、ソナム・ギャムツォ以前にも二人の転生者がいた事が認められ、彼はダライ・ラマ三世となります。

ダライ・ラマ五世の時にチベット全土が統一され、以後三百年に亘ってチベットを支配する政教一致のダライ・ラマ政権が誕生しました。五世は政権を握るとポタラ宮の建設を始め、又この時代に経済や学芸が大きく発達し、チベット文化は黄金時代を迎えました。ダライ・ラマ十三世の時、インドを植民地としていたイギリ

スはチベットとの通商を求めましたがチベット側が応じなかった為に国境を武力突破しました。十三世はモンゴルに亡命します。

一九〇四年のイギリス・チベット間のラサ同盟調印後十三世はラサに戻ります。一九一〇年には清軍に攻められ今度はイギリスに保護を求めてインドに亡命します。一九一一年辛亥革命で清朝が倒れたのでその翌年チベットの独立宣言をしますが、イギリス・中国ともに認めず一九四九年新生中華人民共和国はチベットは中国の領土の一部であると宣言しました。中国支配の進展に伴いチベット各地で次第に抵抗運動が激化して一九五九年にはダライ・ラマ十四世はインドへと亡命しました。

十四世亡命後のチベットでは中国による社会主義国家建設のための政策が推進され、一九六六年に始まった文化大革命はチベットにも及び、宗教否定から多くの仏教寺院が破壊され、チベットの人々の社会と文化に大きな傷跡を残しました。

チベットの宗教

古来チベットの人達は自分達を取り巻く美しくも恐ろしい自然の中で数々の精霊の存在を感じてきました。それを鎮めるために犠牲や供物を捧げて祈るシャーマニズムの伝統がありました。そのチベットに仏教は紆余曲折を経ながら次第に深く根を下して行きました。秀れた研究教育制度によって学問仏教・僧院仏教を発展させると共に民間習俗と結び付いて人々の隅々にまで浸透して、この高原の国に特異な仏教文明を花開かせていきました。

古来からチベットにあった民間信仰はボン教と呼ばれ、太陽や山、空、様々な自然現象等への民間信仰と呪術や祈祷を行うシャーマニズムがその特徴です。日本の神道のようなものだと

も言われます。チベットに仏教が入って来るとボン教は勢いを失い、チベットは仏教の国になりましたが、その影響は根強く残っており、仏教儀式の中にボン教的要素が色濃く混じっていたり、地方によってはボン教が力を持っている所もあります。

チベットにインドの大乗仏教が本格的に導入されるのは八世紀後半になってからで、この頃から仏教はチベットの大宗教としての道を歩み、寺院の建立や仏教経典の翻訳が国家の事業として行われて行きました。しかし九世紀中頃ダルマ王が仏教弾圧を行い、その為に暗殺されると、王国は分裂、崩壊の道を辿り、王族や貴族の庇護を失った仏教は組織的な形では中央アジアから姿を消し、個人の信仰としてだけ生き続けました。

十世紀の後半から又各地に種々の仏教教団結成の動きが生じ、十七世紀中頃ダライ・ラマ政権が成立し、ゲルク派主導の教団国家が以後三百年間続きます。仏教は千数百年の間チベット人の心を深く魅了してきました。少なくとも古代国家のチベットは仏教により国を立て、文明を築いてきました。しかし仏教への過度の没入は彼等の外の世界への興味を鈍らせ文化的孤立を招いたようで、肥大した僧院勢力は近代化の障害となり、ついには独立を失う原因も作りました。近年亡命した僧達が世界各国で布教活動に従事し、異文化の中に地歩を築きつつあります。これがチベット仏教の新たな発展に繋がるか今後の動きに注目すべきでしょう。

チベットの仏教僧院は教団の教育研究機関であり、巡礼の聖地、祭礼を行う場所でありますが、又同時にその廻りに職人街ができ、金融貿易センターとしても機能しています。ここでの修学僧は顕業五科目を主に暗記と問答の勉強法で習得します。全科目を終了するのに通常二十

年かかると言われます。最後に問答の試験に合格すると博士の学位が授けられ、出身僧院に戻って教師になったり、密教の学習課程に入ったりします。一般僧は修学は行わず、僧院の雑役や事務をやったり、様々な職業に従事します。

輪廻は輪廻転生とも言われ、無限に生と死を繰返す事を言い、釈迦が説いた仏教ではこの迷いの状態である輪廻を断ち切る事が悟りであるとされます。しかし他者を救う事を目的とした大乗仏教が広まると菩薩（修行僧）は他者を救う為には自分自身が悟りを開かなくてはならないと説かれる様になりました。この悟りは自分が迷いの世界から抜け出すのが目的ではなく、あくまでも他者をその迷いの世界から救うためで、従ってチベットでは菩薩も高僧も悟ったからといって輪廻しなくなる事はありません。全ての人が救われる迄は無限に輪廻を繰り返し、人々を救う為に何度でも生れ変わります。その代表格が観音菩薩の化身とされるダライ・ラマであり、阿弥陀如来の化身とされるパンチェン・ラマなのです。チベットの庶民は死んだら「あの世」で暮すよりも「来世」に再び生れ出る事を強く信じて祈ります。

もう一つチベット仏教の特徴として転生活仏制というのがあります。この制度では転生活仏と呼ばれる高僧達が没すると、その生れ変りが幼児の中から捜し出され、故人の権利や財産の全てがその霊童により受け継がれます。

研究機関、教育施設としての僧院は経典のサンスクリットからチベット語への翻訳を行い、チベット大蔵経と呼ばれる経典集を作り出しています。これ等経典はサンスクリットから直接訳されたものなのでインドの原点に一番近いと言われてきました。収録した文献の数は併せて四千五百から六千に上ります。チベット人が古代チベット王国時代から営々として取組んでき

た仏典翻訳事業の成果です。初めは手書きでしたが後に木版印刷となります。チベット経本の代表的スタイルは長方形の大判紙の表裏に経文を印刷し、その紙を三〜四百枚重ねて板で挟んで一巻としています。大蔵経一セットに必要な版木は約十数万枚と言われます。

チベットの密教

チベットでは密教が盛んです。密教即ち秘密仏教は神秘主義的な性格の強い大乗仏教の一形態として四世紀頃インドに現れ、インド仏教が滅亡する十三世紀初めまで続きました。その間密教は各地に広まりましたが、この教えが今でもはっきり残っているのは日本とチベットだけです。日本の密教がインドの初期と中期の密教を受け継ぎ、「大日経、金剛頂経、蘇悉地経」を信奉するのに対し、チベット密教はインドの後期密教（タントラ仏教）の教義を伝える無上瑜伽タントラを最も重視します。密教は大乗仏教で説かれる他人への救済（菩薩の行い）を実践し、戒律を守る者に対して更に高い段階を得る為の仏の秘密の教えで、思想的には空や般若の教えが中心です。実践的には儀礼や瞑想が中心でインドのヒンヅー教のタントリズムの影響が見られる為にタントラ仏教とも呼ばれます。

密教は儀礼の宗教で、中でも曼荼羅（まんだら）の儀礼はその中心をなしており、この図形は一口に宇宙の縮図と言われます。マンダラ図は宇宙の中心にある楼閣を上から眺めた図で、その中に配置された諸尊は宇宙を構成する諸原理に配当され、「輪廻の世界と涅槃とは実は区別がない」という理（ことわり）を表現しています。実践面から言うとそれは供養の際の諸仏の依代（よりしろ）であり、入門儀礼である潅頂や護摩の修法など密教の重要な儀礼を行う時に必要な装置なのです。

チベットのマンダラは百種類以上あると言わ

れますが、これを表現形式により分類すると、第一に色砂によって建立される砂マンダラがあります。第二に壁画やタンカ等の図絵マンダラでサキュ寺やパンコルチューデ寺の壁画が有名です。第三に諸尊の像をマンダラ状に配置したり、楼閣の模型を作って安置する立体マンダラがあります。立体マンダラの例としてはポタラ紅宮にある時輪のマンダラが有名です。砂マンダラを建立する時は、先ず導師が地神を慰撫し、諸尊を招いて供養して、金剛橛で魔を釘付けにする等の作法を行い、儀礼が無事に執行される条件を整えます。その後壇上に墨打ちが行われ、そこに彩色した砂で中心部からマンダラの各部分が描かれてゆきます。色砂を角状の容器に掬い取り、砂の出具合を微調整しながら先端の穴から少しづつ出してゆきます。しかしマンダラを構成する諸尊の細かい像容までをこの方法で描くのはさすがに難しく、諸尊をシンボルで表わす三昧耶マンダラ、あるいは種子と呼ばれる梵字一字で表す種子マンダラが好まれるようになりました。砂マンダラの完成には一週間を要し、その後で護摩が焚かれ、本尊を降臨させる儀式などが行われます。全ての儀式が終了すると砂マンダラは壊されます。

チベット人の生活

チベットの経済は昔も今も農耕と牧畜により支えられています。牧畜民といっても一年中テントで暮らす放牧民もいれば、固定式の家屋を持ち半農半牧の生活を営んでいる人達もいます。しかし高原の牧草地でヤクや羊を連れて移動を繰り返すチベット人は少なくなっています。牧畜民と農耕民の関係は密接で彼等は生産物を交換し、お互いに足りない物を補っています。牧畜民は乳製品、肉、羊毛、毛皮、岩塩、ソーダ、生きたヤクや羊を供給し、かわりに穀物、茶、

豆、干した大根や蕪などの必需品を手に入れます。

放牧地での牧畜民達の住居はダクルと呼ばれる黒いテントです。これはヤクの毛で織った目の粗い布を縫い合わせて作られ、モンゴルのゲルとは構造が異なり天幕を何本もの支柱で支えた背の低い家型のテントです。天幕の四方は張り綱で張りが強化されています。このテントは保温に秀れ、通気性も良く、高原に吹き荒れる暴風にもよく耐えます。

牧畜民が遊牧する高地から標高四千㍍位迄下りてくると広い谷間が開け、緑豊かな農耕地となります。チベット人の多くは農民です。農耕は南部と東部の大河の流域で行われ、これ等の地域は寒冷、乾燥のチベット高原の中では比較的温暖で土地が肥え、モンスーンの影響を受けて雨も降ります。主要作物はチベット人が常食とするツァンパ（麦こがし）の材料となる青稞麦（大麦の一種）をはじめ冬小麦、蕎麦、豌豆、蚕豆、馬鈴薯、蕪、砂糖大根などです。東チベットでは杏、桃、梨などの果物や胡桃もとれます。南東部の比較的標高の低い所では水稲や高粱、大豆、玉蜀黍なども栽培されています。

チベット人は遠路も厭わず、時には何年もかけて聖地を巡る旅をします。「一切衆生の為、来世の幸せの為」に巡礼をしているのは勿論なのですが、巡礼はむしろチベット人にとって無くてはならない人生の一部であり、そこには彼等が無上の喜びとする諸国巡りの物見遊山の要素も含まれています。巡礼者達は観音の真言を唱え、携帯用のマニ車を回しながら寺々を巡り、霊験譚と奇跡物語に彩られた仏像や仏画、仏塔を礼拝して回ります。巡礼達は全身を使った祈りの姿である五体投地を寺や仏の前で繰り返すだけでなく、寺院の周囲や聖山の周囲をこれで回り、又遠く離れた土地から聖地まで何ヵ月も

かかって五体投地で来る人びともいます。これは全身全霊を仏の前に投げ出して帰依を表す最高の礼法なのです。

もう一つチベット人の生活で特徴あると思われる習慣に鳥葬があります。チベットには鳥葬、土葬、水葬、火葬、塔葬と五種類の葬法がありますが、遺体を禿鷲に食べさせてしまうという葬法はチベットでは最も一般的な遺体の処理方法なのです。チベットでは人が死ぬと遺体は三～五日間家の中に置かれ、師僧によるポア（転移）の儀式、（輪廻から解脱させようとして行う儀式）が行われ、枕経が唱えられます。葬式の朝遺体は白い布を被されて家の角口で鳥葬の請負人に引き渡され、輿のようなもので鳥葬場へ運ばれます。遺族は現場に立ち合う事は許されず、二～三人の知人が代理で見届けます。一般のチベット人には私達が考える様な墓は無く、鳥葬は魂の抜けた肉体を他の生物に布施する慈悲の行為

と理解されています。

ダライ・ラマ

チベットと言えばダライ・ラマを想像するほどダライ・ラマはチベットの象徴でもありますが、一九四九年に中華人民共和国が「チベットは中国の一部である」と宣言して以来、暴動その他の問題が止まず、一九五九年にはついにダライ・ラマ十四世はインドに亡命しました。ダライ・ラマは世襲される事なく、仏教の輪廻思想に基いて選ばれます。一九三三年にダライ・ラマ十三世が没し、一九四〇年に青海で発見された五歳の少年が十四世として即位しました。ラサに移された少年ダライ・ラマは徹底的な宗教、政治両面のエリート教育が施されます。

ダライ・ラマ十四世は亡命後北インドのダラムサラに居を定め、謂わゆる「亡命政府」を作り、一九六三年にはチベットの民主憲法を公布しました。宗教家としては世界各地で平和活動のための講義や祈願を行い続け、最近は欧米だけでなく、モンゴルや台湾も訪れています。一九八九年にはノーベル平和賞を受賞しました。中国文化大革命の後もチベットは暴動や独立デモが治まらず、中国政府が神経を尖らせている為に、十四世は「私は中国政府の目の届かない所に転生する」と明言し続けています。元ナチ党員ハインリッヒ・ハラーが書いた『チベットの七年』の映画化とそれに対抗する北京の中央電視台の番組『ダライ・ラマ』はチベット論争を再熱させたかに見えます。宗教と政治の板挟みになり、今後もチベットは我々の関心を高めることでしょう。

末筆乍ら、私の旅行を可能にした第一興業印刷の飯泉千尋会長に心よりお礼申し上げます。

『正法眼蔵』における頭陀説再考

明治大学文学部教授
東京大学文学部講師
阿部慈園

1 はじめに

現在、「頭陀の研究」というテーマで論文をまとめつつある。その中心は、原始仏教・パーリ仏教における頭陀の研究であるが、原始仏教とは姉妹宗教といわれるジャイナ教の「ドゥヤ」(dhuya) との比較、また大乗仏教および中国仏教・日本仏教が言及する頭陀説にも触れたいと思う。中国では、『梁高僧伝』『続高僧伝』『宋高僧』を読むと習禅者の多くが頭陀を実践したことがうかがわれる。わが国では、頭陀者として筆者は、道元禅師（以下禅師）と一遍上人（上人）を挙げたい。捨聖一遍の遊行は、頭陀行にほかならない。上人の頭陀行については稿をあらためることとし、ここでは禅師の頭陀観をその著『正法眼蔵』を手がかりにして考察することにしよう。「禅師が採用した頭陀支」「糞掃衣と袈裟崇拝」「常坐不臥と只管打坐」がその主な内容である。その考察に先立って、「頭陀とは何か」についておさえておくことにしよう。なお、

『正法眼蔵』の引用は水野弥穂子校注の岩波文庫本である。

2 頭陀とは何か？

「頭陀」は、パーリ語のドゥタ、ドゥータ(dhuta,dhūta)、サンスクリット語のドゥータ(dhūta)の音写語である。玄奘はこれを「杜多」と音写した。以後、頭陀は旧訳、杜多は新訳とされる。

さて、dhuta（dhūta）という語は、「洗い流す」「除き去る」を意味する動詞語根ドゥー(dhū)から作られた過去分詞形である。ジャイナ教のdhuyaもその語根はdhūであり、仏教のdhutaに対応する。現代インド語のひとつであるマラーティー語でも、汚れた衣類を「洗濯する」というときに、ドゥーネー（dhūne）の語が用いられる。

仏典ではこの語に「除遣（じょけん）」とか「抖擻（とそう）」という意訳を与えている。「心に附着した煩悩や悪を洗い流すこと」また「煩悩や悪を除去して心が浄化された状態」を意味する。衣類についた汗や垢を洗濯して除去するように、心にしみついた煩悩（随煩悩も）や悪を除き去るのである。ゆえに、頭陀とは「心の洗濯」であり、その結果「心の浄化に導くこと、またもの」ということができよう。パーリ仏教では、頭陀の語に次の二義（人と法）を与えている。

① 煩悩を除遣してしまった人

② 煩悩を除遣するための実践徳目

①は、ときとしてブッダを指す。②は、パーリ仏典では「頭陀支（ずだし）」(dhuta-anga)と呼ぶに対し、大乗仏典の多くは「頭陀功徳（ずだくどく）」(dhuta-guna)と称する。gunaには「功徳」のほかに「徳目」「項目」という意味があるから、ここではdhuta-ngaとdhutagunaを同義と見る。パーリ系では十三支、大乗系では一支少ない十二支をたてる

のが一般的である。

3 禅師が採用した頭陀支

「行持」の巻（㈠三〇一―三〇三）に、『大比丘三千威儀経』が掲げる十二頭陀支が引用される。長文であるが煩をいとわず紹介しよう。

第八祖摩訶迦葉尊者は釈尊の嫡嗣なり。生前もはら十二頭陀を行持して、さらにおこたらず。十二頭陀といふは、

一者不受人請、日行乞食。亦不受比丘僧一飯食分銭財（一つには人の請を受けず、日に乞食を行ず。亦比丘僧の一飯食分の銭財を受けず）。

二者止宿山上、不レ宿人舎郡県聚落（二つには山上に止宿して、人舎郡県聚落に宿せず）。

三者不得従人乞衣被、人与衣被亦不レ受。但取丘塚間、死人所棄衣、補治衣之（三つには人に従つて衣被を乞ふことを得ず、人の与ふる衣被も亦受けず。但丘塚の間の、死人の棄つる所の衣を取つて、補治して之を衣る）。

四者止宿野田中樹下（四つには野田の中の樹下に止宿す）。

五者一日一食。一名僧迦僧泥（五つには一日に一食す。一は僧迦僧泥と名づく）。

六者昼夜不臥、但坐睡経行。一名僧泥沙者偏（六つには昼夜不臥なり、但坐睡経行す。一は僧泥沙者偏と名づく）。

七者有三領衣、無レ有余衣。亦不臥被中（七つには三領衣を有ちて、余衣を有すること無し。亦被中に臥せず）。

八者在塚間、不在仏寺中、亦不在人間。目視死人骸骨、坐禅求道（八つには塚間に在んで、仏寺の中に在まず、亦人間に在まず。目に死人骸骨を視て、坐禅求道す）。

九者但欲独処。不欲見人、亦不欲与人共臥（九つには但独処を欲ふ。人を見んと欲はず、亦人と共に臥せんと欲はず）。

十者先食、果子蓏、却食飯。食已不得復食果蓏（十には先に果蓏を食し、却りて飯を食す。食し已りて復果蓏を食すること得ず）。

十一者但欲露臥、不在樹下屋宿（十一には但露臥を欲ふ、樹下屋宿に在まず）。

十二者不食肉、亦不食醍醐。麻油不塗身（十二には肉を食せず、亦醍醐を食せず。麻油身に塗らず）。

これを十二頭陀といふ。摩訶迦葉尊者、よく一生に不退不転なり。如来の正法眼蔵を正伝すといへども、この頭陀を退することなし。

一は常乞食、二は阿蘭若、三は糞掃衣、四は樹下住、五は一坐食、六は常坐不臥、七は但三衣、八は塚間住、九は随得敷具、十は時後不食、十一は露地住に相当する。最後の十二の「不食肉・不食醍醐・麻油不塗身」はふつう頭陀支の一つとしてたてないものである。ただし、パーリ『ヴィナヤ』に見るデーヴァダッタの五事の第五支の「生涯魚・肉を食べるべからず」（Vin. iii.171）に対応するであろう。

『大比丘三千威儀経』の十二支は、第十二支のみならず、各支の文面および列挙順序はユニークである。あえていえば『十住毘婆沙論』の十二支に近い。本経の第十二支のかわりに、『十住毘婆沙論』の第八支に「持毳衣」が挙げられる。（毳衣とは鳥・獣の細毛で作った衣。「袈裟功徳」の巻。㈣一五一）

さて、禅師が頭陀支を『阿含経』や『般若経』『大智度論』などから引かず、なぜ『大比丘三千威儀経』の十二支を引用したのであろうか？禅師は本経を「洗浄」の巻に二回、「洗面」の巻

に五回、つごう七回も引用している。永平寺教団の修行僧を指導するにあたって、比丘の日常の威儀や心得を詳述した本経のほうが他の律典よりふさわしいと判断したのであろうか。あるいは、出家至上を説く禅師は「大比丘」の三文字に強く心ひかれたのであろうか。

4 糞掃衣と袈裟崇拝

ごみためや路地などに無価値なものとして捨てられたボロ切れをひろいあつめて、その弱い部分を切り捨て、強い部分を取ってよく洗い、それらを綴った一枚の方形の衣は「糞掃衣」と呼ばれる。原語の「パンスクーラ」(pāṃsukūla)には、①汚物の集積の如きもの、と②汚物の如く厭悪されるものという二義がある。汚物の如きものであるから、それにだれも執着しないし、所有権を主張することはない。この糞掃衣の着用は、比丘にとって四依(しえ)の一つであり、頭陀支の一つでもある。禅師は、衣を作る時の材料(衣財)として糞掃衣が最上であるという。「袈裟功徳」の巻に「諸仏の常法、かならず糞掃衣を上品とす」(四一三二)、「いわゆる糞掃衣を最上清浄とす。三世の諸仏、ともにこれ清浄としまします」(四一五七)、「その最第一清浄の衣財は、これ糞掃衣なり。その功徳、あまねく大乗小乗の経律論のなかにあきらかなり」(四一六八)などと見え、糞掃衣を衣財とする袈裟が最上清浄であるという。

法蔵部所伝の『四分律』、化地部の『五分律』はともに十種糞掃を説く。有部の『十誦律』は四種を、パーリの『ヴィナヤ・パリヴァーラ』は五種を二通りあげ、最も増広した『清浄道論』は二十三種をたてる。「袈裟功徳」の巻では、『四分律』と同じ十種が説かれる。「牛嚼衣・鼠嚙衣・火焼衣・月水衣・産婦衣・神廟衣・塚間衣・求願衣・王職衣・往還衣」の十種である(四一七

〇―一七一)。また、前三に死人衣を加えて四種糞掃も説く(㈣一三二)。

さて、「塔袈裟の偈」に至って禅師の袈裟に対する態度は、袈裟信仰から袈裟崇拝に結晶する(㈣一六〇・一七三)。

大哉解脱服　無相福田衣
披奉如来教　広度諸衆生

ちなみに、第三句を道宣の『四分律行事鈔』や道世の『諸経要集』は「披奉如戒行」とする。日本の浄土宗の「袈裟被着偈」の第三句も「披奉如戒行」である。学者は、禅師がわざと文句を変えたのであろうか、伝写の間に変ったものであろうか、という。

5　常坐不臥と只管打坐

常坐不臥は、パーリ十三頭陀支のうちの第十三支に配される支分である。ブッダゴーサはこれを精進支と見るが、住支に含める場合もある。

さて、常坐不臥の支分は、常に坐禅をしていて、夜になっても横臥しない頭陀支である。「袈裟功徳」の巻に引用した十二支のうちの第六「昼夜不臥、但坐睡経行、一名僧泥沙者偏」が相当する。ちなみに「僧泥沙者偏」は、第五の「僧迦僧泥」とともに原語の決定をいまだ見ない。

禅師は、第四支樹下住と第十一支露地住を古風な行履として高唱する。例えば、「古往の聖人、おほく樹下露地に経行す」(行持上、㈠三二一)、「露地樹下の風、とほくきこゆ」(行持下、㈠三七七)、「樹下露地に修習するとき起屋なし」(洗浄、㈢一九一)。

パーリ十三支のうち、阿蘭若住・樹下住・露地住・塚間住はそれぞれの場で禅定(瞑想)をなしつつ諸法の真実の姿を観察する支分である。常坐不臥は禅定の実修そのものである。また、衣の二支と食の五支は禅定に入るための準備的なものといえよう。禅師は「坐禅儀」の巻に「飲

食を節量すべし」(㈠二二三) といい、「坐禅のとき袈裟をかくべし、蒲団をしくべし」(同) と見える。

さて、禅師は「坐禅儀」の巻の冒頭に「参禅は坐禅なり」(㈠二二二) と説く。参禅は公案を用いることではなく、ただひたすら坐禅すること、すなわち「只管打坐」すべきであると主唱した。この只管打坐は、頭陀支の常坐不臥、天台の四種三昧の常行三昧と重なる部分であろう。今後の課題としたい。

6 おわりに

頭陀が説く衣食住の生活は、きわめて簡素なものであり、物を大切にし、物をリサイクルして用いるという精神をくみとることができる。そして、その精神は、ある意味では、物の消費(浪費) をややもすれば美徳と見なしがちな今日のわれわれに大いなる警鐘を鳴らしている。

道元禅師は「仏道はすべからく貧なるべし」といわれた。じじつ、原始曹洞宗教団は経済的には貧しく、社会的認知も弱いものがあったが、禅師は釈尊ブッダの正法を伝えることに燃えていた。禅師は、ブッダおよび摩訶迦葉が重視した頭陀を宣揚することによって、原始仏教教団の厳格性に回帰することを説かれた。

鎌倉新仏教の祖師がたのなかで、ブッダの厳格主義に帰れと主張したのは、道元禅師と一遍上人であると筆者は考えるが、とくに頭陀を重視しつつ瞑想(坐禅) からさとりへと主張したのは、道元禅師ひとりと考える。

〔本稿は『大乗禅』No.906、二〇〇〇年六月号に発表した論稿を改題・補正し、加筆したものであることをおことわりしたい〕

(黙仙寺住職・横浜善光寺育英会参与)

〔目的〕

佛教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1．Zen Center of Los Angeles（ＬＡ禅センター）
“923 S.Normandie Ave LA. CA.90006 197SA”

2．Zen Mountain Center of New York（ＮＹ禅センター）
“Box 197,Mt.Tremper,NY 12547 USA”

3．Wat Paknam（ワットパクナム）
“Bhasichareon Bangkok 10160 Thailand”

4．理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内佛教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成13年４月より１年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1．論文（次項による）
○論題
①これからの国際興隆と仏教の役割
②世界平和と仏教徒の誓願
③留学僧として私はこれを学びたい
④異文化の中で仏教を学ぶ
いずれか一題を選ぶこと　400字詰原稿用紙５枚以上（Ａ４版タテ書き）

2．保証人と連署した願書　3．卒業証明書
4．履歴書　5．推薦書　6．健康診断書

〔募集人数〕

平成13年度２～３名

平成12年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成13年１月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会
〒233　横浜市港南区日野中央１丁目12番９号
TEL.045-845-1371　FAX.045-846-2000

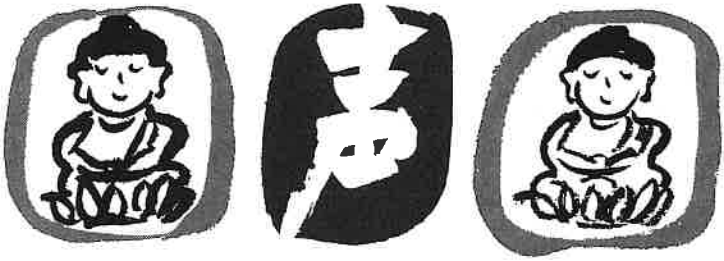
第17回生

横浜 善光寺 留学僧募集

平成13年度・2001

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。
ご希望の方はご応募ください。
詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。

ZENKŌJI
YOKOHAMA



教理試験の勉強

ワットパクナム安居

真野大成師

早いものでこちらへ来て三パンサー（安居）が過ぎ、私もおそまきながら、昨年より見習い僧や新人僧に交って、教理試験の勉強を始めました。この教理試験はご存知のように九等級に分かれた上級のパーリ語教理の試験と、その基礎になる三等級からなるタイ語による基礎教理（法理・戒律・仏伝）の試験に分かれており、その成績は本人の能力の指標とされると同時に、またことあるごとに肩書きとして紹介され、人々が僧たちの勤勉さを監視する目安ともなっているものです。もちろん私には上級の等級をねらうような能力も野心もありませんが、それでもタイ語の勉強を兼ね、いずれこちらの師僧方にお話しを伺う際にも必要となる素養であろうと考え取り組んでいる次第です。

ところで、今日まで日本から多くの方々がタイの僧院に勉強に来られていますが、残されたものを見る限り、上座部仏教を本格的に勉強され、日本でその紹介・弘通に努めておられる方は、まだほとん

ど居られないようです。私たちは或いは、意識の底では旧来の先入観すなわち〝小乗仏教〟が久しい以前に大乗仏教によって乗り越えられた、幼稚な劣った考えであるとの考えから、まだ完全には抜け切れていないのかも知れません。たしかに小乗を大乗より劣った立場とするのは、歴代の祖師方のお考えでもあります。しかし、また、現代の私たちは祖師方がそのように判断された時代とは比較にならないほどの、それぞれの教えに関する資料・情報を有してもいます。したがって私は、はたして先人の判断が妥当・公平なものであったのか、今一度自分自身の頭で考えてみることは、今日、決して無駄な営みではないと考えています。

さらに、今日日本の仏教は、遺憾ながら心の拠り所を求める人々の要求に次第に真正面から応えなくなってきています。そして、そのような既存の宗教に絶望した人の中には、怪し気な教えに惑わされ、ついには半社会的な行為に走る人々も少なからずいます。

従来、小乗仏教として軽視され日本ではまだほとんど知られていないと言ってよい釈尊の元々のお教えを、今日の文脈に即して人々に説き示すことができれば、それはまた、このような文化の現状に照らしても、大いに意義のあることではないかと思っています。

以上のようなことで、私はなお暫くこちらで研鑽を積んで参りたいと思っております。不慣れな言葉での勉強に四苦八苦した一年ではありましたが、お陰様でつつがなく過ごさせて頂くことができました。本年は育英会から三名の留学僧が新たに来られるということで、少しは兄貴面ができるかなと、今から楽しみにもしております。

発表した論文を発刊

北米禅仏教学研究所所長
市村承秉老師

北米禅仏教学研究所は、創立以来七度目の新年を迎え、年来を通じてご協力を頂いた諸山、諸研究所並びに諸々の善知識にたいして心から御礼申し上げます。

年来懸案であった英訳『宗祖としての道元禅師』は、今年中研究所紀要シリーズ第三号としていよいよ発行される段階に至りました。英訳並びに出版発行に対する諸般のご後援に対して深甚な感謝の意を捧げる次第です。

特筆できる昨年の研究活動には、三月下旬西安の北百キロに所在する銅川市と、中国国際玄奘研究会との共催による第二回発表会（第一回発表会は一九九三年夏）に出席し、玄奘の最後の翻訳事業として知られる大般若経六百巻が完成されたと伝えられる玉華宮跡に、銅川市玉華博物館並びに玉華玄奘記念館が建設されましたが、その開館式に参列しました。七月下旬には台湾の国立政治大学で開催された第十一回国際中国哲学学会に出席し、八月下旬にはホノルルで開催された第九回国際真宗学会に参会、そして十一月初旬には、ベナレス・ヒンズー大学のインド中央政府及び地方政府共催による第二回国際仏教研究会に参加したこと等です。発表した拙論の題目はそれぞれ以下のごとくですがいずれ拙論集として発刊の予定です。

「中国仏教文化の見地より羅什の『大明呪経』に比較して見た玄奘の『般若心経』」「今世紀並びに二十一世紀における仏教教判研究（特にブルーノ・ペッツォルドの『仏教教判論』に関連して）」「観音菩薩信仰と阿弥陀仏」「ストア学派倫理哲学と比較してみた上

座並びに大乗仏教の倫理的根本原理としての宗教的批判精神（Prajñā）」

様々な催しを計画

ドイツ大悲山普門寺
堂頭　**中川正壽老師**

新しい千年紀を迎え、皆様方におかれましては益々ご清勝のことと拝察いたします。折しも本年は道元禅師ご生誕八〇〇年にあたり、そして平成十四年は化を遷されて満七五〇年となります。当山におきましても、今年を大きな飛躍の年とするべく、いっそうの精進に励む覚悟でおります。

普門寺建設のための工事も、活動を行っていく上で必要最低限の部分は完了し、徐々に二期工事に取り掛かってきております。別館に本堂が完成いたしましたので、以前使っていた本館内の仮禅堂を取り壊しました。現在、基本改修工事の終わった別館セミナーハウスの内装工事を少しづつ進めております。しかしまだ雨漏りのある本館の屋根の修理等を、今後も引き続き進めていかねばなりません。本館内部の全面修理の費用など、資金繰りは相変わらずとても厳しい状況であり、引き続き各方面からのご賛同と資金の援助を仰いでおります。

ようやく当山も寺院としての体裁がある程度整って参りましたが、それに応じて、本来の活動である聞法参究と坐禅功夫にあてる時間を少しづつ増やせるようになって参りました。事実普門寺では、年間を通して月の半分以上に摂心等のコースを設けております。もちろん内容の充実という点では、これからが正念場でございますが、参加者も増加、定着してきつつあります。

今年は日本から諸老師をお迎えしたり、ドイツや日本の学者の方々の協力を得て、様々な催しも計画しております。

お袈裟の会、週末の正法眼蔵研究会等、日本側からのご協力のお陰をもち実現の運びとなりました。

中でもその中心となりますのは、九月に当山が主催し、ミュンヘン市文化センターと普門寺で行う宗祖道元禅師ご生誕八〇〇年慶讃の特別記念講演並びにシンポジウムです。これを機として、今後は仏教センターだけでなく、大学等、様々な教育・研究機関とも積極的に交流し合い、布教の裾野を広げていく所存でおります。

習得した仏法を活かし 平和に貢献

駒澤大学聴講生　涂　美珠様

私は仏教を学ぶために留学し、十二年間駒澤大学で学んできました。その締めくくりとして『比丘尼パーティモッカの研究』と題した博士論文を一九九九年十月に提出し、幸いに二〇〇〇年二月に合格判定を頂き、三月に博士号が授与されました。

第十六回留学僧育英僧に採用されたことを感謝しています。当初、駒澤大学仏教学部研究員をもって募集出願し、採用して頂きました。しかしながら十二年度駒澤大学研究員は不採用となりました。なぜなら大学院を終了した者は直接に研究員となる例がなかったからです。とりあえず半年もしくは一年という間をつくり、再出願するように勧められました。こうした事情を指導教授奈良康明先生に報告したところ、「せっかくここまで勉学してきたので、何とかなりませんか」とおっしゃいました。その他にも奈良康明先生のご助力を得させて頂きましたが、厳しい現実に直面しました。とりわけ博士号を取得した場合、一年以内に博士

論文を公にする義務があります。このような事柄は駒澤大学の学則であり、文部省の規定でもあります。しかし私の留学ビザは四月二十八日をもって有効期限が切れてしまいますので、一時的に帰国しなければなりません。その後、これまで戒律研究指導をして頂いた片山一良先生に相談したところ、身元保証を引受けてくださり、至急東京入国管理局に学生ビザから文化活動ビザに変更の手続きを申請し、ようやく四月十日に一年の文化活動ビザが許可されました。

奈良康明先生からお話しをお伺いしていましたが、辞令式において初対面ですが、黒田老師様の器量の良さと高尚なお人柄を知りました。黒田老師様のお言葉に甘えて貴奨学金に応えることができますように勉学に励みたいと思います。

以上のような研究活動を続けるためにも、博士論文の出版にあたっても、貴奨学金により研究や滞在などの費用を有益に使わせて頂きたいと存知ています。

貴育英会の趣旨のもと、与えられた機会を無にせず、自分が習得した仏法を活かすことによって人間共通の目標たる平和に貢献していきたいと念じています。

深い人生哲学の教え

横浜市　石井修道先生

『成寿』第三〇巻をお送りいただきまことにありがとうございました。また、成寿山善光寺開創三十周年、育英会設立十五周年を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。

何度か訪れた中国の天童寺やその関連記事になつかしさを覚えると共に、特に私にとって黒田老師が特別読物としてご寄稿された「駒澤大学茶道部の五十年に寄せて」の一文は、利休居士の教えられた七則に内包された深い人生哲学の教えに心ひきしまる思いがいたします。今後、駒澤大学茶道部の発展を心より祈念するものであります。

心洗われるもの

東京都　永井光延様

『成寿』第三〇巻拝受致しました。有難うございました。御開創三十周年、育英会設立十五周年、洵におめでとう存じます。巻頭の記念式典のご盛儀を拝見し、この隆昌の淵源を尋ねる人あらば、「留学生交流を支えて」を拝読すれば、

いづれの人も又、肯なる哉との思いを禁じ得ないでありましょう。何回この条を承りましてもその都度心洗われるものがございます。大切に座右に置かせて頂きます。

息の長い取り組み

東京都　伊藤　勲様

『成寿』第三十巻をご恵贈くださり感謝申し上げます。新世紀を目前にした世界は、まだまだ多くの難問を抱えております。こうしたときにこそ、国境、人種、言語を超えて、相手を尊重しあう拝み合いの精神を大切にしたいものです。

貴誌を拝読し、その活動に触れるたび、小さな営みであっても、息の長い取り組みが、点を線に線を面にと、ご慈悲の燈火を明るく灯していけると信じ期待しております。

チベットに再び信仰が

秦野市　田村　仁様

いつも『成寿』をお送りいただきありがとうございます。

私は昨年六月上旬から約四ヵ月間チベット取材に行き、多くの未解放地域を取材してまいりました。チベットの中心地ラサでは中国人（漢民族）の入植者が増え続け、盛んに中国化政策が進められています。しかし、ラサを一歩出ると一九〇〇年代始めにチベットに入域した西欧の探検家や日本の僧侶等が書き残した当時のチベットの姿とほとんど変わっていないように感じられました。中国は昨年、革命五十周年にあたり、これまで破壊し尽くしてきた寺院や文物を躍起になって修復してきました。まだ修復の終っていない寺院もありますが、主要な寺院はほぼ修復が終ったようです。チベット仏教寺院の

華やかな出現は長い間、宗教活動が禁じられてきたチベットに再び信仰がよみがえった現われだと思います。

三十余年前のこと

東京都
上坂元一人様

『成寿』第三〇巻拝受、大きなお仕事の数多なるに驚きながら勝縁に感謝しております。

スリランカ御巡錫の記事に、バーナガラ・ウパティッサ師の尊名を拝し、少年の日の師がインド・サンチーの大菩提会の寺院で会い師の日本への結縁と来日のため奔走した三十余年前のことを懐かしく想起しております。

寺檀一体のご浄行

兵庫県
丸山一雄様

『成寿』第三〇巻をご恵送下さいまして、誠にありがとうございました。善光寺開創三十周年、育英会設立十五周年記念として、「天童寺・西安・北京の旅」のお写真と「道元さまに引かれて天童山参り」を拝読さしていただき感激いたしました。

善光寺のお檀家の皆様が、黒田方丈様の国際的な仏教交流と仏法興隆世界平和に貢献したいと念願されている御趣旨を痛感し賛同され、「宗祖を通して釈尊に還れ」を原点として寺檀一体のご浄行のお姿を拝読し感激しました。

外に出てみて幅広い視野をいただく

小田原市
安藤嘉則師

『成寿』第三〇巻をお送り下さり、誠にありがとうございました。いつもながらの充実した誌面、興味深く拝読させていただきました。特にこのたびの特集記事である善光

寺開創三十周年、育英会設立十五周年記念式典は、宗門内外の大勢の方々を集め盛大に開催なされ、これまでの善光寺様の幅広いご活動の一端をうかがい知ることができました。小生も善光寺海外留学僧としてアメリカの禅に参学させていただきましたが、外に出てみて初めてこうした幅広い視野をいただいたように存じます。貴重な体験でございました。

今後とも御当山の益々の御隆昌と育英会のさらなる発展を祈念申し上げます。

東郷氏のうしろについてお参り

長野県　池沢悦二様

成寿拝読いたしました。三〇巻にふさわしい内容ですが、今回の圧巻は東郷氏の旅行記「道元さまに引かれて天童山参り」の一文でありました。参加することができない私どもまで東郷氏のうしろについてお参りしているような気分で「アッ」というまに読ませていただきました。ともすれば旅行記など平凡なものになってしまいますが今回の天童山参りは実にすばらしく心からトーゴー氏に御礼申し上げます。

お手本が目標に

愛知県　岩田文有老師

いつも成寿をお送り下さいまして有難く御礼申し上げます。貴老師の育英会の満分の一にと思い、今度、内モンゴルからの留学生の身元保証人になりました。全日本仏教会でこれほどの大事業をしておられる方は他にございません。このようなお手本がなければ、地方では目標がございません。いよいよのご隆盛を祈念申し

上げます。

益々円熟されたお人柄

兵庫県
安部嘉明様

善光寺開創三十年、育英会設立十五年、おめでとうございます。黒田ご住職の人間の大きさと崇高さは私がナリスの神奈川県厚木市に在職中(昭和53～56年)、時折お伺いして少なからず感化を覚えたものです。

今回東郷さんが寄稿されている「道元さまに引かれて天童山参り」を拝読しましても、黒田方丈様の益々円熟された人柄と共にその偉大なご人格をうかがい知ることができて嬉しく思いました。

感動を新たに

横浜市
松井薫子様

『成寿』第三〇巻ご恵送下さいまして有難う存じました。巻尾に何人かの方が書かれておりましたが、私もNHKの深夜放送「心の時代」を拝聴し、感動を新たにしておりました(以前ご著書を拝読しあらましは存じ上げておりましたが)。

私は定年後、ある大学の学生相談室にカウンセラーとして勤めておりますが、精神のひよわな若者にあのお話を聞かせてやりたいと思いました。又、お目もじの機会を願っております。

「気安く信心すること」を学ぶ

横浜市
林田司郎様

山崎康弘さんのご紹介でお伺いした節には、思わぬご接待に預かり、厚く御礼申し上げます。有難う御座いました。三法印の講和も心に響きました。目下、「訪中団記」を拝読中です。東郷さんの随行記を

読んで、「気安く信心すること」を学びました。律義に考えすぎて心が堅苦しくなることから解放されました。いっそうのご隆盛を祈念します。

一生の思い出に大切に

兵庫県
大和田笑様

過日は大変有意義な且つ楽しいツアーに参加させて頂きまして本当に有難うございました。その上立派な経典やお写真の本を頂戴いたしまして、一生の思い出に大切にさせて頂きたく思っております。いろいろお世話になりました皆様方にもくれぐれも宜しく申して頂ければ幸いに存じます。

亡き夫もきっと喜んで

横浜市
三澤玉江様

このたびは墓地のことで大変お世話になりました。お陰様で場所も閑静で「やすらぎの郷」という名の通り心安らぐところと思いまして、家族皆ほっと致しております。墓石も出来上がり見せていただきました。亡き夫もきっと喜んでくれる事と思います。これもご住職様皆々様のお陰と思い深く感謝いたしております。ありがとうございました。

なつかしく興味深く

大阪市
江川　宏様

『成寿』をご恵送下さり誠に有難うございました。

善光寺開創三十周年、育英会設立十五周年の由、非常におめでたく心より御祝いを申し上げます。西安、北京の旅の記事も、以前私も行ったことがありますのでなつかしく興味深く読ませていただきました。

いよいよ西暦二千年代を迎えますが、更にお仕事が充実

し、発展されることをお祈り致します。

成寿は私のパートナー

兵庫県
面川勝治様

『成寿』三〇号をご恵送賜り恐縮に存じます。誠に有難うございました。成寿山善光寺開創三十周年、育英会設立十五周年の記念式典、祝賀会が盛大に開催されましたこと、本当におめでたく、心からお慶び申し上げます。

黒田先生には自分を無にされ、尊い犠牲を捧げ、幾多の山河を乗越えて、昼夜を厭わず、ひたすら仏道に邁進されたその結晶が今日のご発展とご繁栄でございましょう。私事でございますが、昨年十一月無事ナリスを定年退職致しました。

三十数年前、總持寺で黒田先生から坐禅のご指導をいただいてお出会い以来、自己変革をさせていただき、入社以来退職するまで、病欠一日もなく元気で勤めさせていただくことができました。これも先生の御導き下さったお陰でございます。『成寿』は私にとって人生の大切な定規であり、羅針盤となっています。日々心遣いと行動の虎の巻として、バイブルとして、私のパートナーとして大活躍しています。

日々に感謝

タイ国
佐々木弘淳師

タイ僧として黄衣を着て三年目を迎え、テーラワーダ仏教の国々の人々に支えられての日々に感謝しております。一昨年のミャンマー、昨年のスリランカ参拝、貴重な体験を積ませていただいております。本年はインド、ネパールへの仏蹟巡拝に兄の遺骨と共に出掛ける予定です。

Foreword

The chief priest of Zenkōji—Temple
Takeshi Kuroda

Zenkōji-Temple held the ceremony of opening of "Yokohama Yasuragi-No-Sato" cemetery last June, which we had waited to have for years. This cemetery involves any kind of nationality, religion, concept and sect. This is located in the part of a hill in Asahi Ward, Yokohama City. We can see the Fuji-Mountain in the west and such a good view that we can't express by any picture, especially in a sunny day, in the cemetery, we have some simple elevators equipped for the people old or handicapped. We wish you to visit once a while. And I appreciate all our supporters' help.

However,although it is said that people who meets should go, I have to tell you sad news. Mr. Kametarou Kotani, Chairman of the Zenkōji-Ikueikai from its start, passed away in Bangkok, Thailand, last July 13. I had got a lot of cooperation from him, also a over-sea-superviser, for 35 years officially and privately. He was 85years old.

He truly had a strong belief for Buddhism and lenity of "Kobo-Kyusai" for all of ethnic, and he was the man of mercy. I wish him the rest in peace.

Anyway, I'm invited to the 1700th anniversary

which will be held in the mid of this coming November from Shusho Aiin Chief Priest of Tendo-Zenji Temple, Ningpo, China, where the founder of Soto-sect Dogen practiced asceticism and got the truth of Buddhism. We are going to participate in the ceremony with our colleagues.

In this year of the Millennium, we can hear footsteps of the 21sh century near. The world has more interest about Buddhism now. It is that the truth of Buddhism agrees with the truth of the nature of the universe. The world is reconfirming that Buddhism is the very true religion.That is why the threat of destroying the earth and environment of the nature is coming up now, and people are seeking the rescue for the heart of Buddhism. Now It hink that Japan, a nation of Buddhism, has to observe the truth that Buddha taught, improve a perception and a sense that are common to our neighbors in Asia, andcarry on building the wonderful community. We have to realize the better society to get a bright prospect and a comfortable life in the next century and generation, making two Buddhisms, Daijo and Joza, as one. And I swear to purify myself more and more with a heart to devote"until my body wears down"for peace, fortune andcomfort, like in the Tai-Zan mountain, through the friendship between Japan and Asia.

編集後記

▼『成寿』第31巻をお届け申上げます。善光寺は昨年、開創三十周年の記念の節目を迎え、何かと多事多忙の一年でございました。有縁無縁の大勢の皆様のあたたかいご支援を戴き、寺内は一段と身を引きしめ精進を誓っております。

▼開創三十周年記念事業の一つ「横浜やすらぎの御霊園」が開園いたしました。本誌特集でその内容をご紹介させて頂きましたが、墓地ご希望の方はお申込を受付けております。善光寺までご連絡下さい。

▼リポーターの川内朋子様には、霊園開園、管理棟落慶式典のリポートをして頂きました。当日の雰囲気がよく伝わって参ります。ありがとうございました。

▼黒田方丈の三男・博志師が、吉田日光師、福田智昭師と共にタイ国ワットパクナムで具足戒授与式にのぞみ、現在安居中です。式の様子は東郷敏氏が克明な記述で伝えて下さり、また、上座部仏教については福田孝雄先生の筆によりわかりやすく解説して頂きました。両氏にお礼申上げます。黒田方丈にとりましては、育英僧の授戒式にいく度か参列いたしましたが、子息の授戒式は、35年前の自身の体験に重ね合わせ、感慨も一入でありました。皆様に扶けられながら己を磨き、一まわりも二まわりも大きく成長し帰寺できるように念じるばかりです。

▼ワットパクナムでの授戒式から帰国すると同時に、タイ国在住の小谷亀太郎氏の訃報が届きました。訪タイの折りにお見舞叶わず、心残りでしたが、このように早く悲しい報に接するとは、思いもかけぬことでした。黒田方丈にとりましてはタイ国の父、善光寺にとりましては海外の顧問として、心からの御慈悲を戴いて参りました。三十五年間にも及ぶご交誼は筆舌に尽くしがたく、悲しみで一杯です。心よりご冥福をお祈り申上げます。

▼厳しい残暑も終り、九月は秋彼岸を迎えます。ご先祖様に思いを致し、一日一日を大切に過ごして参りたいものです。

成寿　第三十一巻
平成十二年九月一日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号
電話　〇四五(八四五)一三七一
FAX〇四五(八四六)二〇〇〇
印刷所　神奈川新聞社出版局

伊藤三喜庵先生による想い出の成寿表紙

成寿創刊号から成寿30号まで

1983年（夏季号）創刊号 ▶

カラー●開創15周年記念式典によせて
カラー●開創15周年記念茶会
特　集●開創15周年記念式典
「偉業を讃えて」
座談会●善光寺　0歳から15歳まで
64頁

世　相
○三宅島の雄山が大爆発、四百戸以上が焼失
○中曽根首相が韓国を訪問（歴代首相初）
○NHK連続テレビドラマ「おしん」が放映される

◀ 1984年（春季号）第2号

カラー●二つの得度式
カラー●善光寺収蔵品
留学僧派遣育英会の発足
64頁

世　相
○ロス疑惑の騒動が起こる
○グリコ森永事件が起こる
○冒険家・植村直巳がマッキンリー登頂成功後、消息を絶つ

1985年（夏季号）第3号

カラー●南方仏教の仏・法・僧
カラー●タイの僧院での生活
第一期留学僧論文

80頁

世　相

○男女雇用機会均等法が成立
○日航ジャンボ機が群馬山麓で墜落、死者540人
○科学万博つくば85が開催される

1986年（春季号）第4号

カラー●文殊・普賢菩薩
カラー●胎蔵界曼陀羅
特　集●善光寺収蔵品
座談会●タイの僧院にて

80頁

世　相

○天皇在位60年記念式典が両国国技館で開催される
○伊豆大島の三原山が大噴火、全島民が島を脱出
○イギリスのチャールズ皇太子とダイアナ妃が来日

1986年（夏季号）第5号 ▶

カラー●円空仏・不動明王像
カラー●ボーイスカウトの参禅会
特　集●善光寺収蔵品
座談会●燃え続ける芸術人生
→伊藤三喜庵先生を訪ねて

80頁

世　相

○三井物産マニラ支店長が武装ゲリラに誘拐される
○「青い山脈」などで知られる作家・石坂洋次郎が死去
○第11回主要先進国首脳会議（東京サミット）が開催される

◀ 1987年（春季号）第6号

カラー●善光寺釈迦殿内陣
カラー●第一回留学僧タイより帰る
特別寄稿●留学の決心（中村元）
第二回留学僧論文

88頁

世　相

○関西新空港の建設が始まる
○新国鉄「JR」グループ11社が発足
○NTTの株式が上場され注文が殺到

1987年（夏季号）第7号

カラー●インドへ
カラー●インド旅行記（佐藤俊明）
特　集●インド留学のころ
（高崎直道）
第三回留学僧論文

106頁

世　相

○日米間で半導体摩擦が起きる
○竹下内閣が発足
○ニューヨーク株式市場で大暴落
（ブラック・マンデー）

1987年（冬季号）第8号

カラー●ニューヨーク・マウンテンセンター
カラー●タイ留学僧激励
特　集●美術シリーズ
特別寄稿●禅について（鎌田茂雄）
講　演●ふるさとへ還るおみやげ
（遠藤太禅）

122頁

世　相

○ノーベル医学生理学賞を
利根川進が受賞する
○安田火災がロンドンの競売で
ゴッホ「ひまわり」を落札
○歌手で俳優の石原裕次郎が死去

1988年（春季号）第9号

カラー●矜羯羅・制吒迦二童子
カラー●二童子開眼法要
特別寄稿●日仏セミナー
（フランス・パリで講演）
座談会●仏との出逢い（錦戸新観）
106頁

世　相

○青函トンネルの鉄道が開業し、日本列島は地つづきになる
○東京の後楽園球場が東京ドームに生まれ変わる
○瀬戸大橋の坂出・児島ルートが開通

1988年（夏季号）第10号

カラー●タイ・ワットパクナムよりの奉迎仏
カラー●タイ法式による得度式
特　集●開創15周年記念式典
「偉業を讃えて」
調査研究●アジアの遺跡保存と日本人
（石澤良昭）
112頁

世　相

○リクルート疑惑で政官界の責任辞職が相次ぐ
○「マル優」制度が廃止され、預貯金の利子一律20％の課税となる
○藤ノ木古墳の発掘調査により貴重な副葬品が確認される

1988年（冬季号）第11号

カラー●中国の仏
カラー●海外留学僧派遣育英会の
　　将来について（東隆眞）
特　集●開創15周年記念式典
　　「偉業を讃えて」
　　第四期育英生入選論文
106頁

世　相

○ソウル・オリンピックが開催される
○日米の牛肉・オレンジ交渉が妥結をみて自由化へと進む
○詩人・草野心平が死去（85歳）

1989年（春季号）第12号

カラー●ロス・ゼンマウンテンの法戦式
特　集●前角老師の偉業
　　（佐藤俊明）
128頁

世　相

○昭和天皇が崩御される（87歳）
○皇太子明仁親王が新天皇に即位され、年号が「平成」となる
○新日鐵釜石製鉄所の高炉の火が消され、130年の歴史が終わる

1989年（秋季号）第13号 ▶

カラー●燦然と輝く大日如来
特別寄稿●世界的視野に立つ
　　宗教家の育成を（山田恵諦）
対　談●世界に活眼を開く人材を
　　育成したい
　　（庭野立正佼成会会長と対談）
第五期育英生入選論文

138頁

世　相

○新型間接税の「消費税」が実施される
○歌謡界の女王、美空ひばりが死去
○宇野内閣が発足するが、間もなく海部内閣に移る

◀ 1990年（春季号）第14号

カラー●甚妙泰佛国土を歩く
カラー●タイふれ合いの旅
特　集●ロイ・カトーンの祭り

136頁

世　相

○イラク・クェートの湾岸戦争が始まる
○兵庫県の高校で校門圧死事件が起こる
○新天皇の即位の礼と大嘗祭が行われる

1990年（秋季号）第15号 ▶

カラー●志は仁なり、韓国を歩く
カラー●開創15周年記念茶会
特　集●韓国仏教の現状と
　　今後の展望
第六回派遣僧入選論文

150頁

世　相

○国際花と緑の博覧会（花の万博）が大阪で開催される
○福岡国際女子柔道大会で中３の田村亮子が初優勝（48キロ級）
○第二次中東支援策として約3000億円を支出

◀ 1991年（春季号）第16号

カラー●照燿一念佛　台湾を歩く
カラー●台湾ふれ合いの旅
カラー●三松閣参拝
特　集●台湾仏教交流の旅

164頁

世　相

○関西美浜原発で放射能漏れ事故が起こる
○宮沢内閣が発足
○骨髄バンクが発足

1991年（秋季号）第17号

カラー●二仏像成り御堂に坐す
カラー●開山・楳庵白純大和尚十三回忌法要
特　集●二仏像成り御堂に坐す
講　演●激動する世界の旅
（伊藤　博）
第七回育英生入選論文

160頁

世　相

○長崎の雲仙普賢岳で最大級の火砕流が発生
○秋篠宮夫妻に女児（真子さま）が誕生
○大型台風19号が全国に被害をもたらす

1992年（春季号）第18号

カラー●韓国・袈裟捧呈の旅
カラー●ビルマ世界最大の仏塔「シュエダゴン・パゴダ」
カラー●ミャンマー・慰霊の旅
鼎　談●仏の姿に打ち込みて
…仏師・錦戸新観師に聞く

178頁

世　相

○経済企画庁は景気の下降局面に入ったと表明（バブルの崩壊）
○国公立学校の学校五日制が始まる
○東海道新幹線の新型車「のぞみ」の一番列車が走る

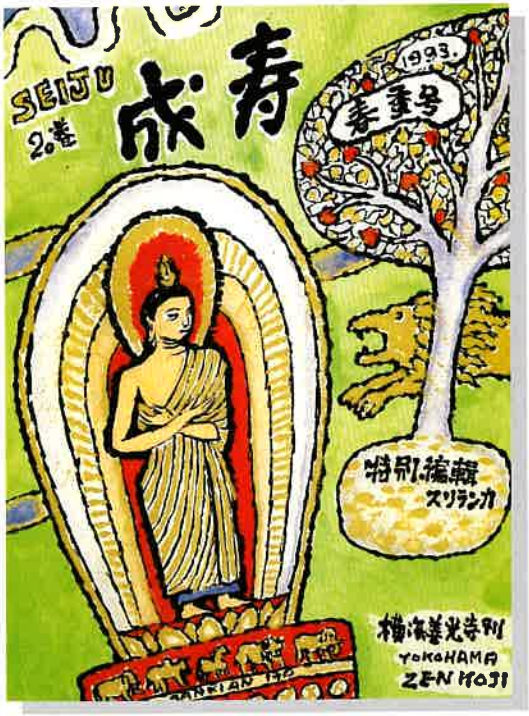
1992年（秋季号）第19号 ▶

カラー●アンコール遺跡
カラー●追悼・故黒田嘉さま
特　集●アンコールワット紀行
第八回育英生入選論文

172頁

世　相

○バルセロナ・オリンピックが開催される
○天皇・皇后が中国を訪問される
○PKO協力法案が成立し、各国へ自衛隊が出発



◀ 1993年（春季号）第20号

カラー●スリランカ
カラー●永平寺と総持寺祖院参拝の旅
特　集●スリランカ訪問記
講　演●明日を生きる（黒田武志）

168頁

世　相

○皇太子徳仁親王と小和田雅子さんの結婚の儀が行われる
○細川内閣が発足
○先進七か国の首脳を集め東京サミットが開催される

1993年（夏季号）第21号 ▶

カラー●大本山總持寺祖院・成寿のあゆみ
カラー●仏縁にもよおされて
　　マレーシアとタイ
カラー●観桜茶会
特　集●瑩山禅師の二大誓願

156頁

世　相

○日本初のプロサッカーリーグ（Jリーグ）が開幕
○異常気象（冷害）による農作物被害は戦後最悪となる
○北海道南西沖でM7.8の地震、大津波が奥尻島を襲う

◀1994年（春季号）第22号

カラー●中国太白山天童寺を歩く
カラー●中国八日間の旅・北京雍和宮弥勒大佛開光慶典記念
カラー●ボロブドール・トラジャ
特　集●中国八日間の旅
特　集●天童寺と如淨禅師

178頁

世　相

○羽田内閣が発足、間もなく村山内閣に移る（社会党政権の誕生）
○関西国際空港が開港
○純国産の大型ロケット「H－Ⅱ」が打上げに成功

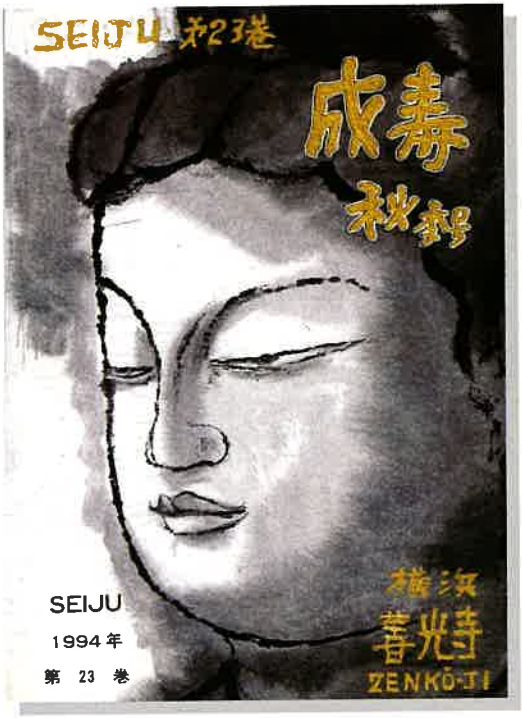
1994年（秋季号）第23号 ▶

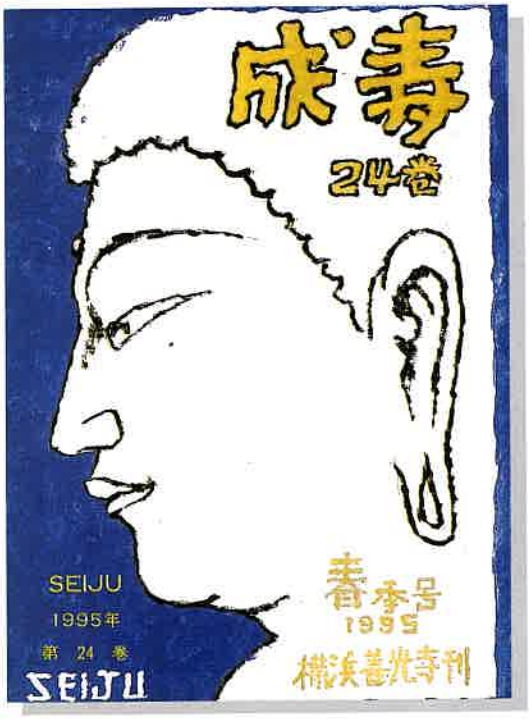
カラー●大本山總持寺
カラー●開創二十五周年記念式典
カラー●横浜善光寺留学僧育英会
　　設立十周年記念式典
カラー●第十回育英生辞令交付式
　　開山忌と理事長母堂三回忌法要
カラー●聖徳太子坐像
特　集●開創二十五周年記念事業趣意書
特　集●横浜善光寺留学僧育英会十年の歩み

164頁

世　相

○「いじめ」の問題が大きな社会問題となる
○青森三内丸山遺跡から4500年前の木柱が出土
○ノーベル文学賞が大江健三郎に贈られる





◀1995年（春季号）第24号

カラー●永平寺
カラー●韓国へ答礼の旅
カラー●大田山光真寺·成寿山善光寺
　　開山·楳庵白純大和尚十七回忌法要
　　第十一回育英生辞令交付
カラー●伊藤三喜庵の世界
特　集●大本山永平寺と道元禅師
特別寄稿●「急がば廻れ」の心意気を（古田紹欽）

160頁

世　相

○地下鉄サリン事件が起こる
○阪神大震災が起こる（死者6308人）
○オウム真理教の麻原代表が逮捕される

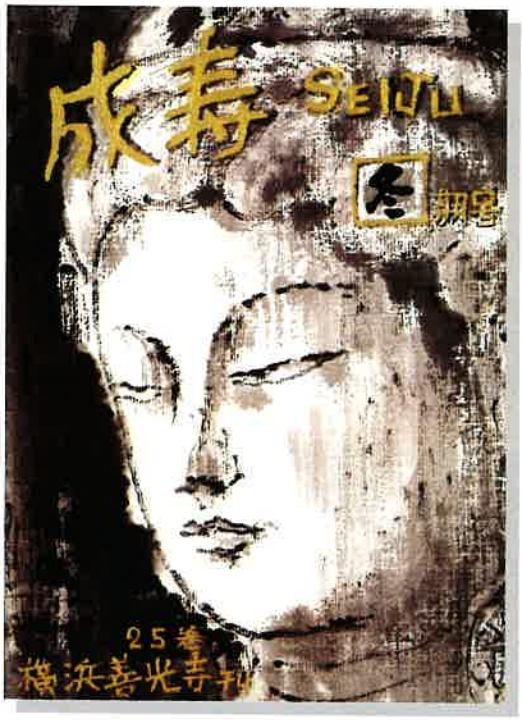
1995年（冬季号）第25号 ▶

カラー●東京稲城の台地に屹立する
　　駒沢女子大学
カラー●前角博雄老師急逝
カラー●ロサンゼルス禅センター
特　集●前角博雄老師密葬儀

192頁

世　相

○日本産のトキが絶滅
○高速増殖炉「もんじゅ」のナトリュウム漏出事故が発生
○東京都知事に青島幸男が大差で当選



◀ 1996年（秋季号）第26号

カラー●愛知学院大学
カラー●ワットパクナム住職が
　　ソムデットに
特　集●お袈裟・曹洞宗の
　　「服制規定」

196頁

世　相

○橋本内閣が発足
○薬害エイズ問題で菅厚生大臣が厚生省の責任を認める
○「0―157」による食中毒が全国に広まり、伝染病に指定される

1997年（春季号）第27号

カラー●ありし日の伊藤三喜庵先生
カラー●伊藤三喜庵の世界
カラー●善光寺節分会
特別寄稿●インド石窟の旅

180頁

世　相

○動燃東海事業所で火災爆発事故、37人が被爆
○福岡の三池炭鉱が閉山
○山一証券が戦後最大規模の負債総額3兆で倒産

1998年（秋季号）第28号

カラー●黒田住職「国際栄誉賞」受賞
カラー●東北福祉大学
カラー●ローザンヌ大学、仏像仏書贈呈式
カラー●亡き師を偲ぶ（遠藤博因）
講　演●心やわらかに今を生きる（黒田武志）

200頁

世　相

○ローマ法王がキューバに初訪問する
○小渕内閣が発足
○金大中韓国大統領が誕生

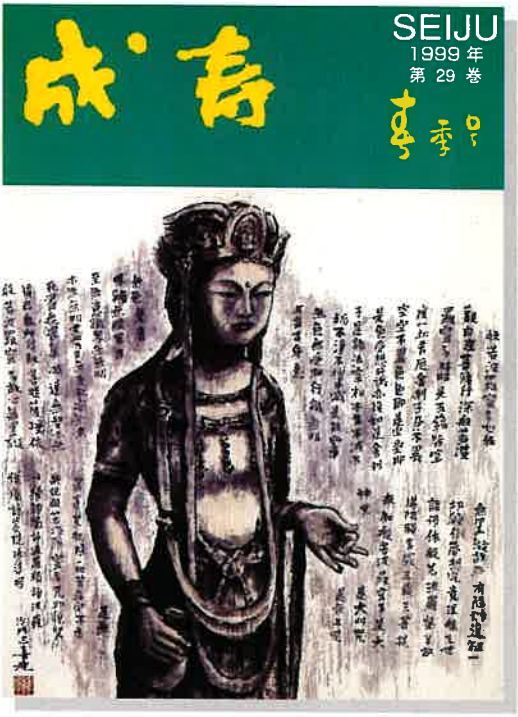
1999年（春季号）第29号 ▶

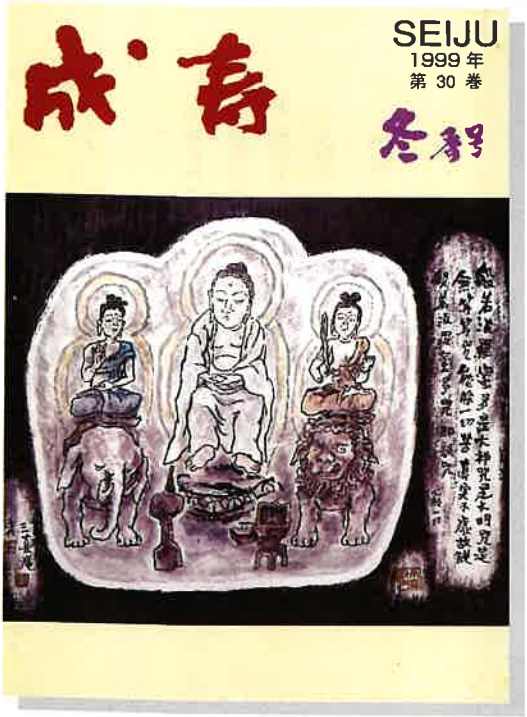
カラー●横浜善光寺十八羅漢
カラー●東野光生の世界
カラー●南伝大蔵経の経蔵完成
カラー●伊藤三喜庵の世界
特　集●21世紀に向かって真実の種まきを「横浜善光寺開創三十年の歩み」黒田武志
特　集●「ブッダモントン」に世界最大の経蔵

264頁

世　相

○欧州単一通貨ユーロが発足
○最古の貨幣「富本銭」が出土
○臓器移植法に基ずく初の脳死移植が行われる





◀ 1999年（冬季号）第30号

カラー●成寿山善光寺開創三十周年・育英会設立十五周年記念式典
カラー●天童寺・西安・北京の旅
特　集●善光寺開創三十周年・育英会十五周年記念式典、祝賀会

192頁

世　相

○川崎公害訴訟の和解が成立
○国旗国歌法が成立
○JCO東海事業所で臨界事故が発生

横浜善光寺